
PTD

吏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P T D

【Nコード】

N 0 3 5 2 K

【作者名】

吏

【あらすじ】

ポケットモンスターの世界観、シンオウ地方を舞台にした物語。ポケモン小説としてはダークなネタを含みます。一応R15としています。この作品について、詳しくは本編1話の前書きをご覧ください。

1話（前書き）

この作品は2ちゃんねるの「ポケモンの二次創作に関する議論スレ6」に投稿された、ある設定についての相談で書かれたレスのネタを、そのレス主から許可をいただいてから書かせてもらった「ネタの二次創作作品」になります。

そのネタの内容が書かれているレスのアドレスを予め貼っておきますが、それによってプロットを作り上げましたので読むことは多大なネタバレとなります。ご注意ください。最終話の後書きに同内容を掲載します。

<http://schiphhol.2ch.net/test/read.cgi/poke/1248789869/778>

1話

5月7日、午前10時、ポケモンリーグ

「今日集まってもらったのは他でもありませんっ」

ポケモン協会シンオウ支部、第2会議室

口の字型に並べられた机、その中心でおさげの女の子が8人を見るここに今、この地方を代表するジムリーダーが全員集まっていた招集かけたのは中心にいるスズナ、スモモの横にはポケモン協会シンオウ支部長が厳しい表情で座っている

「これを見てほしいんだよね」

スズナの手にはビニル袋、そのなかにはオレンジと白の小さな力ブセル錠が入っていた

「最近シンオウ地方に出回ってる新型ドラッグ、通称PTD」

彼女がビニル袋を視線の高さまで持ち上げて、指差した

「正直、すつごくやばい薬なんだ」

「ドラッグがやばいものなのはわかるよ。相当依存性が高いとか？」

ナタネが左手をあげて訊くと、スズナに聞くと彼女は首を振った
「そういうんじゃないんだよ。これの正式名称はポケモントランスドラッグ」

とん、とんとビニル袋を指でつついて詳説する

「言葉通り、白い方を飲むとポケモンになれる。オレンジ色で元に戻る。そういう触れ込みなんだ」

ざわつと会議室に驚愕の波紋が広がった

「ふん。頭の悪いガキが取ってつけたようなネーミングの上、突拍子もない効果。信じられるか」

トウガンがぱつぱつと切り捨てると、確かにとデンジが同調する
「そのPTD、実際初めて聞いた。そいつにハマった人間がポケモンになった、という話も聞いたことがない。何かも怪しすぎると

思っんだが」

「そもそもポケモンになりたいと思う人がそんなにいるのかな？」

「わたしはポケモンになれたらいいなって思う時はありますよ。
ルカリオと話してみたいな」

「アタシもなりたい。きつと楽しいです」

「ここらドラッグだぞ」

「ポケモンになるというのは比喻表現であって、実際はそんな風に思いこめる幻覚症状じゃないのか？」

会議室がにわかに活気づき、様々な意見が飛び交う

ただそのなかでスズナと支部長はその推移を見守るように、押し黙っている

「結局、それが本物なのかわからないとどうしようもないな。成分の分析結果とか、確かな情報が無いと……」

勿論、薬剤関係について素人同然のジムリーダーズが成分分析表を見たところで理解はできないだろう

それでも確かな情報、ひと目でそれとわかるものが欲しかったのだ
会議室が再び静かになろうとした時、スズナが口を開いた

「そうですね。論より証拠と言いますもんねっ。スズナ飲みます」

彼女は明るく元気よく声をあげてビニル袋を開け、白いカプセル錠を取り出してごくんと飲んだ

がたつとヒョウタが立ち上がり、のどから声が出かったが出なかった

彼女、スズナの身体から薄く白い蒸気のようなものがのぼる
ジムリーダーズはその奇妙な光景から、目を離すことができなかった

骨がきしむ音も、肉が盛り上がったたり裂ける音もしない

蒸気が机の中央で膨れ上がり、何かが落ちたようなぱさつと軽い音がした

デンジやメリッサ、ナタネが身を乗り出してのぞきこむ

息を、呑んだ

のぞきこんだそこにはスズナの服だけが残されて、そして1体のグレイシアがいた

スズナが消えた、いやPTDでポケモンに変身した――？

にわかには信じられない光景、何かのトリックにしか思えない現実
ジムリーダー全員が緊急に会議へ招集され、そこでまだ世間的に知られていない冗談みたいな新型ドラッグについて話された

その重大性の意味を、脳天をつり撞木で叩かれたような衝撃を受ける

「まさか……本当に……ポケモンになっちゃう、なんて」

「オーノー！」

「それよりも早くオレンジ色の錠剤を飲ませるんだ、それで元に戻せるんだろうっ？」

会議室が再び騒然となるなか、トウガンが机を飛び越えて床に落ちたオレンジ色の錠剤を指でつまみあげる

「その必要はない」

ガチャとドアが開く音、ザザッザザッと規則正しい靴の音、
ボタンとドアが閉じる音

あつという間に会議室の壁が人で埋まり、ジムリーダーズを囲んだ

「どちらの薬を飲んでも結果は同じだ」

「なんだお前達は」

トウガンが低い声で脅すように言うが、立ち並んだ侵入者は顔色も変えずひるまない

侵入者達は機械的に、一斉に懐からガスのようなものが吹き出す
ジムリーダーズは顔を覆い、ポケモンを出して応戦しようとする
がすぐに手が震えだした

即効性のある毒なのか、彼らの掌からぽろっとスーパーボールがこぼれ落ちる

「支部長、これは」

ガスが室内に充満し、1人1人と倒れていくジムリーダーズ
その光景を前にしても、ポケモン協会シンオウ支部長は何も話さ
なかった

……

5月8日、午前11時24分

「ウムムム」

白ひげを口元にたくわえ、精悍な老人が新聞を見てうなっていた
その紙面は『シンオウジムリーダーズ総入れ替え』『怪盗マージ
ユまたもや弱い者いじめ』『集団失踪事件か!?!』などと、いかに
も興味を引きそうな見出しが目についた

ぱさと新聞をめくり、記事を深く読みこむようにじつくりと視線
を動かす

その脇で、ドンドンドンと強く板を叩く音が響く

「せつ！ 博士！ ナナカマド博士っ！」

ドンドンドンと叩き続けられているのはドア、外にいたのは黒ぶ
ち眼鏡の男性だった

白衣姿で内股になって腰をひねり、必死な形相でドアにかじりつ
いている

「早く出てください、漏れる！ 漏れるうっつ」

ナナカマド博士は一通り記事を読み終えたのか、新聞を折り畳ん
ですくつと便器から立ち上がる

元々ズボンは履いたままだ、用を足しているのではない

がちやつとドアを開けると、ナナカマド博士を突き飛ばすほどの
勢いでその横をすり抜けてトイレに入った

立っていたナナカマド博士はふむ、と水音の流れるのをドア越し
に聞いた

がちやとトイレからはあゝと、解放されたため息を吐きながら

黒ぶち眼鏡の男が笑顔で出てくる

その笑顔もナナカマド博士の顔を見て、眉を吊り上げてその男が怒る

「博士！ 何度も言いますけど、トイレは新聞や研究書を読む場所じゃありません！ もう少して膀胱が破裂するところでしたよっ」

「何故、トイレという場所はあるなにも集中できるのかな」

ナナカマド博士は不思議そうに首を傾げ、男、その助手のお小言を半ば無視して歩き出す

ここはフタバタウンにあるナナカマドポケモン研究所、所員は2人カジュアルなスーツをビシッと着こなすお洒落なナナカマド博士こと所長、常にしましま柄のネクタイと白衣といういかにもな格好をしている助手

対象的でありどこか似通った2人が並んで廊下を通って、ドアを開ける

研究所の一室のなかに入り、ナナカマド博士は手に持っていた新聞を机の上に放った

それを見て助手は新聞も元の位置に戻してください、と小言しながら手に取るとそこにあつた見出しが目に入った

「ああ、また怪盗マージユが出たんですか。怪盗なんて格好いいものじゃなくて、こそ泥とかにすればいいのに」

助手はぶつぶつと文句を言う

「お金持ち狙いじゃなくて、一般の民家や病院に入って盗みを働くっていうのもひどい。こんなやつに連れまわされてるポケモン、ムウマージも可哀そうだ」

「ああ、話には聞いているよ。盗みに入られた住人は半狂乱になるそうだな」

「そうなんですよ！ こんな卑劣な奴、早く捕まればいいのに」

「そうだな。その方がいい」

ナナカマド博士はさほど意識を向けず、コーヒーマシンに手を伸ばす

「今日来る子はそんな風にポケモンを使わない、優しい子だとい
いですね」

「ふむ？」

助手が「忘れたんですか」とナナカマド博士に詰め寄り、彼はカ
レンダーを見た

「そうか。今日だったか」

「はい。今日ですよ。博士からポケモンを貰って、旅立つ子が来
るのは」

ネクタイの結び目をぐつと握り、助手がふふつと笑う

ナナカマド博士が研究室の機械に乗った、モンスターボールを見
てから視線を新聞に移す

「可愛い子には旅させろ、とは言うが危険な誘惑も多い物騒な世
の中だ。そんな悪影響を受けないような、意志の強い子だといいい
ん
だが」

「それは大丈夫ですよ、博士。きっとそんなような、強い子です
よ」

助手がネクタイの結び目に手をあてたまま、片手で机の上の書類
をあさってみる

ナナカマド博士は首を傾げ、助手の顔ををいぶかしんで見た

「なんたつて名前がいい。きっと意志の固い子です」

「それだけか？」

助手は「電話での受け答えもはきはきしてたし、しっかりした印
象でしたしね」と見つけ出した書類を博士に示した

それとほぼ同時に、玄関の方からチャイムが鳴った

どうやら、その子が来たらしい

助手がはいはい、と声に出して返し、慌ただしく玄関に向かう
ナナカマド博士はコーヒーをすすりながら、助手が置いていった
書類を拾い上げて見た

「歳は13か。名前は」

……

同日、１１時４１分、フタバタウン

「直接お会いするのは初めてになります。はじめまして、ダイヤといいます」

名乗る彼の髪の色は黒、瞳の色は茶色で曇りがない

薄い水色を基調にした上下揃いの長袖長ズボンに、少し派手な模様のマフラーを巻いた男の子

身長は１５０くらいだろうか、見た目や年齢よりもやや大人びた雰囲気を感じる

ナナカマド博士が手に持った書類、その顔写真と彼の顔を見比べてうなずく

手を差し出し、「ナナカマドだ」と言うとダイヤもその手を握った

「ダイヤくんか。早速、きみに渡すものがある」

挨拶も早々に切り上げ、ナナカマド博士は今日ダイヤがこの研究所に來た理由その本題に入った

横に立っていた助手がうやうやしく小型の機械をナナカマド博士に渡し、それからダイヤの右手へと渡った

ダイヤはそれを見て、わあと声を出す

「ポケモン図鑑。きみがこれから出会い、捕まえたポケモンの姿と生態が記録されていく機械だ。その項目をすべて埋めた時、本当の完成となる」

ナナカマド博士が顔を横に向けると、助手がネクタイの結び目を押さえながら続けてモンスターボールを手渡した

ウム、とまたナナカマド博士の手を経由してダイヤの左手にそれが乗せられた

「そしてこれがきみのパートナーとなるポケモン、ポツチャマだ」
ダイヤがボールを開くと青い体色をした小さなポケモンが、彼のことを見上げていた

「よろしくな、ポツチャマ」

『ポチャ』

膝を折り、ダイヤとポツチャマが握手した

それから彼は図鑑を開き、その機能を確認する

今のポツチャマはLv5、性格はゆうかんでうたれづよいと出た
他にも身体ステータスの詳細や、手に入れた経験値も数値化されて出る

改めて凄い機械だな、とダイヤは感心する

「ありがとうございます。こんなによくしてもらって」

「気にすることはない。こちらも図鑑完成の協力を頼んだこともある」

ナナカマド博士がひげを撫で、そうつぶやく

しゃがんでいたダイヤはそのことで、と立ち上がった

「図鑑完成には協力させてもらいます。けれど、僕が手持ちにするのはこのポツチャマだけです」

その言葉にナナカマド博士は難しい顔になり、助手は面食らったように驚いて見せた

「図鑑用に捕獲はしますし、旅の途中でどうしてもいるひでんの技とかに他のポケモンを使うとは思いますが……」

助手は首をひねざるを得ない、この年頃の子供なら沢山のポケモンを捕まえて持ち歩きたいというのが普通だ

だから、こうして旅立つ前にポケモンを一度に持てるのは6体までとよく言い含めるのがほぼ慣例と言っている

ナナカマド博士はダイヤのことを見つめ、目をつぶって頷く

「もしかすると、彼の影響かね」

「……！ はい」

ダイヤとナナカマド博士の間で何かが通じ合ったようだが、助手にはわからない

説明を求めると、ナナカマド博士はうむと頷いてから話す

「この氷雪の地方、シンオウを自分の足と草ポケモン1体でまわった若い写真家がいるんだ」

「はい。彼の代表作である『シンオウの湖畔』を見て、僕もシンオウ地方に来たんです」

助手が「ああ〜」と思い出したように何度も頷く、確かにそんな人がいたと聞いたことはあった

ナナカマド博士も合点がいき、ダイヤの肩に手を置いた

「そういうことなら、わたしは止めない。だが、きみは彼よりも若いし経験もない。大自然は甘くない、シンオウは特に厳しい」

その若いカメラマンは前もって準備された装備と知識、その両方を持ってそれを成功させたのだ

「曲げない信念よりも、きみの命の方がずっと大切だ。勇敢と無茶は違う、決して無理だけはしないようにすることだ」

「はい！」

ナナカマド博士の言葉をかみしめて、ダイヤは力強く返事をした
「では、行きなさい。シンオウ地方がきみを待っている」

「ありがとうございます。いつてきます！」

ダイヤは頭を下げ、ポツチャマと共に研究所を飛び出した

ナナカマド博士は頷き、助手はまたネクタイの結び目を押さえながら手を振って彼のことを見送った

……

5月8日、正午

その部屋は王の間、というに相応しい空気を備えていた

同じ色同じ型の裾の長い服を着て傳く3人の前に長く、高く、傾斜のきつい階段があるが登ることは誰1人としてない

その頂上には玉座、そこに座る者だけが続く階段を登ることから何もかもすべてを許されるのだ

「発言を許す」

玉座に座る男が眼下の3人に声をかけると、その3人は一斉に胸の上で複雑な文様を描くように指を動かした

それが玉座に座る男へ見せる、最大の礼儀と崇拜の示すものと取れた

「まずはこの私、オークルめがご報告いたします」

若く張りのある男性の声、うやうやしく薄い黄色の長髪を揺らしながら頭を下げる

「ポイントGにて採取したエネルギー波長、肉片の解析は順調。間もなく、PTD化できるでしょう」

オークルの言葉に頷くことも返事をすることなく、玉座の男は3人のことを見下ろしているだけだ

それでも3人にはわかるのか、一定の間をおいて次の者が進言する赤茶の髪に両目を覆うように平紐で巻き、厚ぼったい唇の女性だ
「ヴェルです。PTDの普及は、確かに進んでおります。シンオウの総人口より27%の見込みです。その内、完全にポケモンとなつたのは99,99982%です」

更に細かな数字とそれらの考察と詳細を述べ、言い終わるとヴェルは階段下の床に口付けた

最後の1人は眉までそった剃髪、誰よりも僧侶や神に仕えるものといった雰囲気を持っていた

「シャザであります。懸念であったシンオウジムリーダーズの処置は済みました。最早約束された時の邪魔にはなりません」

掌を合わせ、祈りの言葉をつぶやくように「どうかそれまで我らをお導きください、宗主様」と懇願した

3人の報告を聞き終えても、玉座の男はそれらに対して何も言わなかった

それはそうなって至極当たり前のことであり、その確率は100%でなければならない

玉座の男には聞くまでもないことだったのだ

「あの子はどうしている？」

そうして玉座の男が初めて3人に興味を持って声をかけたのは、当然3人の発言に含まれていないものだった

オークルが頭を下げ、発言する

「パール様は現在コトブキシティ付近に滞在している模様です」

「失礼を、ご無礼を承知で申し上げます。パール様は私達にとっても大事な御身。いつまでそのような自由をお許しになれるのですか」

何に対してもかヴェルの声質が微かに震え、誰にも気づかれないほどに唇を噛んだ

シャザは無言で、何かに感じ入るように目をつぶっている

玉座の男はふ、と微笑んだ

それはパールに対する3人の心中さえもすべてを見通した上で、語りかけた

「今はよい。しかし、然るべき時が来たら私自身の手で連れ戻そう」

その言葉に3人はそろって了承と理解の言葉を、頭を深く下げた

「すべては我らが導き手、エースのままだ」

玉座の男は3人の誓いの斉唱を無視して立ち上がり、3人からして反対側にその姿を消した

2話

203番道路、陽もほぼ落ちた頃

茂みや木陰の裏に隠れて薄っすらと煙が上がっているのが、夜目を凝らせばわかるだろう

ダイヤは携帯食料にきのみを加えるなど、ひと手間かけた夕食を作っていた

ぱちぱちと燃える小さな火、そしてその上の煮立つ鍋をポッチャマはじいっと見つめていた

「もうすぐ出来るから、もうちょっと待ってね」

ポッチャマがこくりとうなずき、ぺたんと座る

今日1日中バトルに明け暮れ、お腹ぺこぺこなのだ

ダイヤも逸る気持ちを抑えて、鍋の中身を混ぜながらポケモン図鑑を開いて見た

「ポッチャマ、今はLv12か」

フタバタウンの研究所から旅立って、3日経った5月11日

2日間朝から夜まで通してこの道路に居たのだ、この辺りにいるポケモンは一通り捕獲したように思う

ポッチャマのLvも順調に上がっているが、進化にはまだ届かない図鑑によるとあと4レベルで進化するらしい、ダイヤは考える

「ここか、この先のクロガネジムに挑戦しようか？」
したら、クロガネジムに挑戦しようか？」

そうポッチャマに語りかけると、その返答のように頷いた

各地にあるポケモンジムを制覇し、この地方のポケモンリーグ挑戦権を得る

そこはポケモントレーナーなら誰もが憧れる夢の舞台、しかしダイヤはあまり興味が無かった

ただ勝てばジムバッジの特典、わざマシンが貰えるということもあるので挑戦すること自体にデメリットも無い

頃合いと見て、鍋の中身をお皿に移してポツチャマに渡す

ポツチャマは嬉しそうにそれを受け取り、ぱくぱくと食べた人間を食べ物をポケモンにあげちゃいけない、と言われることもあるがダイヤは味付けに気を付けているので平気だと思っているダイヤも自分の分をよそい、スプーンを使ってぱくぱくに入れたシンオウ地方はどの季節でも気温が低い、温かな食べ物が身体に嬉しい

ポツチャマは早々に食べ終え、おかわりを求めるようにお皿を差し出すのでダイヤは笑って自分のお皿を置いた

そして、ポツチャマのお皿を受け取りよそおうとした時だった

ダイヤ達の横の茂みからがさがさと音が、そして何か黒い影が目前に現れた

匂いにつられた野生ポケモンかと思ったが、違う

「……」

飛び込んできたのは人間だった、その細長い手足に着ているのは濃紺と朱色のライダースーツ、それから何か小脇に鞆のようなものを抱えている

ダイヤとポツチャマのことをにらむつり目、下からの火で浮かびあがる輪郭と幾何紋様のバンダナにその下から見える銀いや白髪に一瞬目を奪われた

身長は目算でも、ダイヤより10cmくらい背が高いだろう

そして突然、その人間は長い足で鍋を蹴り倒し、ぶちまけた中身と足で火を踏み消した

「なっ、何する」

ダイヤが声を出そうとすると、その人間がポツチャマとダイヤを上から押さえつけて自分も地に伏した

「黙れ」

抑えた声で凄まれ、ダイヤは委縮してしまう

ポツチャマに技の指示をして追い払おうと考えたが、人間相手にそんなことをするのは躊躇われた

「静かにしている」

何のことかわからなかったが、しんと静かになるとダイヤの耳に何か届いてきた

「さがせーっ」

「どこだー」

「なんとしても見つけ出せー」

そんな何かを、誰かを探す沢山の人の声が聞こえてきた

ダイヤは押さえつけられている腕を軽く叩き、自身の唇に指を当てて騒がないことをアピールした

その人間はゆっくりと腕を離すと、ダイヤは伏せつたまま茂みの隙間から道路を見た

やはり沢山の人が懐中電灯を持って、何かを探しているようだった。それも尋常じゃないくらい、かなり怒った様子に思えた

「……ここも時間の問題だと思う」

茂みの隙間から目を離し、薄暗いなかで浮かび上がる人影にダイヤは声をかけた

「つり目がダイヤのことをにらみ、小さく舌打ちした」

「あの人達が探しているのはきみ？」

「いたぞーっ！」

姿勢低いままダイヤが聞いた直後、その頭上から男性の大声が響いた

ひどいタイミングで見つかったかと思うと、目の前にいた人影がダイヤの頭上を飛び越えて大声を出した男性にドロップキックをしていた

「うわっ」

男性が道路に倒れる音を聞き、ダイヤは思わず茂みから出てその人のことを見た

大丈夫ですか、と声をかける前に息を飲んだ

50人はいるのではないか、既にダイヤと人影のいた茂みは完全に包囲されていた

「返せ！」

「返せ！」

「俺のものを返せ！」

1人が叫んだ後、全員がそれに続いて「返せ！」の大合唱が始まった

びりびりと空気が震え、ダイヤは目の前の光景を疑う

そして、このライダースーツの人が何をしたのかとも疑った

小脇に抱えている鞆、あれだろうか

「おい、お前」

ライダースーツに呼びかけられ、はいつと返事をするのと同時に
茂みからポツチャマが出てきた

「お前はポケモントレーナーなんだな」

「あ、うん、はい」

ダイヤに背を向けたまま、ライダースーツがモンスターボールを
取り出した

そのなかから出てきたのはゴウカザル、トレーナーにそっくりな
目つきをしている

「強行突破する」

「ええええ」

全く話についていけない、もしかして巻き込まれたのかとダイヤ
は驚く

しかし話せばわかるのでは、特にその鞆を返せば怒りは鎮まるん
じゃないかとも考えた

ダイヤの目の前で、これまで以上に信じられないものが目に映る
まではそうだった

「返さないなら実力行使だ」

誰かがそう言つと、懐から震える手で何かを取り出した

暗くてよく見えなかったが、それをごくんと飲んだようだ

後からまた続き、何人十何人もが同じような動作をする

「うっ」

「ああああ」

薄っすらと見えていた人影のなから、明らかに人ではないものになっていくのが見えた

道路の街灯に照らされていた人もいたおかげで、ダイヤの目にはつきりと映った

その女性は何かを飲んだ後、夜の月を見上げ、そして身長が縮んでいき……ポケモンのニユーラになった

それは悪夢のような光景だった

ダイヤ達の目の前で取り囲んでいた人達が、次々にポケモンへと変身していく

「ゴウカザル、フレアドライブ」

身悶え、変身し始めた人めがけてゴウカザルが遠慮なしに突っ込んだ

悲鳴に似たものが聞こえ、ライダースーツはその後に続いて走るダイヤは足がすくみ、動くに動けなかった

取り囲んでいた1人、いや1体がダイヤに襲いかかってくるとポツチャマがあわで応戦したところでダイヤの足が動いた

ポツチャマを抱え、ライダースーツの後に続いて包囲網を突っ切る『シャアアアア』

ゴウカザルを先陣に、包囲網を抜けると後から殺気だったポケモン達が追ってくる

急に走ることになったダイヤはげえげえと息を切らし、抱きかかえられているポツチャマは後方に向かってあわを噴きだす

しかしその攻撃は効いていないのか、走ってきたルカリオなどの複数体が飛びかかってくる

ダイヤが肩をすくめ、身構えると飛びかかってきたポケモンを大きな翼が迎撃して吹き飛ばした

確かあれはドンカラス、ダイヤが前を見るとライダースーツの掌に新たなモンスターボールがあった

助けてくれたのか、いや自分の身を守る為だろう

そして、改めてダイヤは驚いた

「（あのゴウカザル、フレアドライブが使えるってことはLv5
7以上なんだ）」

ダイヤは抱きかかえたポツチャマを見て、そして上空を飛ぶドン
カラスを見た

ポケモンのLvというものは一定のものではない

バトルによって勝つことで経験値を獲得し溜めていき、その量に
応じてLvは上がる

多くの経験値を獲得し、その蓄積された戦闘経験に対応した身体
に変化するのが一般的に言われている進化というもの

ポケモンの身体に一度起きた進化には退化がない、人間で言うと
成長に近いものだからだ

「ゴウカザル、マッハパンチ」

先回りしてきたポケモンを先制攻撃で制し、進路を切り開く

ライダースーツの指示にはまるで迷いがなく、時折後方の追っ手
を確認する時に見える横顔にダイヤの視線はそちらに奪われる

「（背も高いし2つか3つくらい年上なんだろうけど……凄い）」

ダイヤは感嘆する

ポツチャマのようにLv5からLv12くらいまで上げるのに、
同じくらいのLvの野生ポケモンと戦うことで集中的に鍛えていけ
ば3日くらいでいける

Lv10代から20代までなら更に同じように鍛えて1週間で、
20代から30代前後ならそこからまた2週間以上鍛えればなんと
かいけるだろう

しかし、Lv35前後からLv40Lv50以上になるには大き
な壁がある

その理由となるひとつが同レベルかそれ以上の野生ポケモンが殆
どいない、街周辺の道路には滅多に出現しないことがある

あまりにLvが高い野生ポケモンは街やその近隣の道路に被害を
もたらすこともあって、ジムリーダーといったポケモン協会の派遣

に排除されてしまうケースもある

だがLvの低いポケモンで貰える経験では少なく、次のLvアップには相当の時間を要する

そして何よりポケモンのLvというのはその相応の戦闘経験を積みませ続けなければ、いずれは下がってしまうのだ

人間でいえば筋トレ、休めばそれだけ鍛えた筋肉も衰えてしまうことと同じだ

ひとつの草むらに出現する野生ポケモンのLvが一定であること、進化ポケモンなのにその進化Lvに達していない野性ポケモンが現れるのはその辺りに由来する

だから、高レベルのポケモンを維持するのは普通のトレーナーには凄く厳しいことなのだ

ボックスに預ければLvの低下は止められるが、その状態では何の意味がない

だから同じ10代だろうライダースーツの人のゴウカザルがLv60近いこと、ドンカラスもLv40相当であることにダイヤは感嘆していたのだ

若くしてそこまで至れるのはジムリーダーや四天王、ポケモンリーグ出場権を得られるクラスだろう

だからこそ、気になるのだ

同じトレーナーとして尊敬に値するほど努力を重ね続けた人が、どうしてこんな得体の知れない人達に追われているのか

しかしこの状況では聞くことはかなわず、ダイヤは必死になって追っ手を振り払うような、ポツチャマにあわの指示をすることしかできなかった

……

「やっとまいたみたいだ」

203番道路からクロガネシティに入らず迂回するようにして、

街の北側207番道路まで来てしまったようだ

ダイヤはそれを確認しながらはあはあと思いい切り肩を上下させ、両膝を抑えて地面を見ながら呼吸する

あわのPPも尽きたポツチャマも、地面にへたり込んでいる

見るとライダースーツの人は大して息も上がっておらず、静かにゴウカザルとドンカラスをボールに戻した

ダイヤも疲弊しているポツチャマをボールに戻そうとすると、その身体がブルブルブルと震えだした

「ポツ……」

突然訪れたポツチャマのこの状態に、ライダースーツの人も流し目で見て気づいたようだ
ずらずと身体の形が変化する、蓄えられた経験値を使いこなせる身体に変化していく

おめでとう、ダイヤのポツチャマはポツタイシに進化した

「進化した……！」

ダイヤはポツタイシの手を取り、その進化と一緒に喜んだ
ライダースーツの人はそれを見下し、フンと笑った

「良かったな。大方、ゴウカザルのおこぼれだろうが」

ぐさつとダイヤの胸にその言葉が突き刺さる

経験値を貰うには例えばそのポケモンを戦闘によってきぜつといわれる瀕死状態まで持つていかなばならないが、それは決して命を奪うものではない

また他人が倒すところを至近距離で見て学ぶという経験値もある、ポツチャマはこれだった

それに確かにあの強行突破にダイヤはまるで貢献できていないし、元から手助けがなくてもゴウカザルがすべて倒せただろう

いや、元からダイヤの力など当てにしていなかった

それだけのLv差、フレアドライブという技で先陣を切ったこと

がそれを物語っている

おそらく後方から来る攻撃の盾代わり、そんなところだろう
そんな風にダイヤを非情に扱ったが、見る限り本当に命を奪うま
ではしない節度を守ったトレーナーだ

「……」

ダイヤを置いて、ライダースーツの人が夜の闇にまぎれて姿を消
そうとしていた

それに気づき、ダイヤは前に回り込んだ

「何だ」

「教えてほしい。あの、人がポケモンになったこととか」

完全にダイヤの理解の範疇を越えていた、シンオウ地方ではあれ
が当たり前……そんなわけないだろう

ライダースーツの人はダイヤをにらみつけ、右手を持ち上げよう
として止まった

その手でダイヤのことを押し払って、立ち去ろうと考えたかもし
れない

だが、そうせずに小さく舌打ちするだけにとどめた

「PTD」

「PTD？」

「怪しげな研究で生まれた違法の薬物だ。一粒でも飲めばポケモ
ンの姿になり、そこから何度かは人間に戻る。だが、回数を重ね
るたびに自我が失われ元に帰れる確率は格段に低下していく」

いくら違法な薬とはいえ、そんなことがあり得るのだろうかとかダ
イヤは耳を疑った

「薬物につきものの常習性もある。一度でも手を出せば二度とま
ともな人間には戻れない。間違っても手を出すな」

ライダースーツの人がそう言っていると、伸ばしかけた手を再び使って
ダイヤを押しつけた

ダイヤはライダースーツの人の手をぐっとつかみ、その身体を固
定させた

「僕はそんなものに手を出したりしない」

「……どうだか。俺はそう言った奴を沢山知っている。そして、案の定ハマって戻れなくなった」

ダイヤのつかんだ手をひねりあげ、ライダースーツの人は冷たい目で見下ろす

「嘘をつく女以上に、野郎は信用できない」

その言葉は夜の気温より、見下ろす目よりも冷たいものだった
迷いなく言い切れる、心の底からそう思っているのだ

ダイヤが頬を引きつらせ、ポツタイシがおやに乱暴する相手には
たくの攻撃をしてくる

ライダースーツの人はその攻撃をひらりとかわし、パツと手を離れた

「信用できないといえば、今のジムリーダーもそうだな」

「ジムリーダー？」

最近総入れ替えになったという話は聞いていたが、それはポケモン協会公認によるものだ

ジムリーダーは街の守護者といえる大事な存在、間違ってもおかしな経歴の持ち主や生半可な実力者は選ばれない

誰もが知るポケモン協会のお墨付きでシンオウ新聞の一面を飾ったのだ、怪しいところもおかしいところなんて何もなければさだろう

「ああ、目が気に食わん。俺のよく知る奴らにそっくりだった」

「……？」

そう吐き捨てるライダースーツの人に、ダイヤは頷いた

「じゃあ、ジムに挑戦するのをやめるよ」

あっさりそう決めたダイヤに、ライダースーツの人は眉をひそめた

「お前はポケモントレーナー。ジムに挑戦する気でポツタイシを鍛えていたのだろう？」

「僕の目的はリーグ挑戦じゃないから。写真でしか知らないシンオウ地方を、この目で見て回りたかった」

ダイヤはポケットから図鑑を取り出し、それをライダースーツの

人に見せるように差し出した

「ちよつとした縁があつて、ナナカマド博士のお手伝いすることになって、ポツチャマを貰った。それだけだから」

「その機械……」

「ポケモン図鑑」

ういーんと微かな音を立て、ダイヤの掌の上で起動する

起動画面に登録者：ダイヤの文字が表示されてから、親指で操作する

「……PTDとか、よくわからないけれど、この図鑑の出会った数が増えてる。それってすぐおそろしいことなんだろうね」

目の前で起きた信じがたい現実を裏付けるような、確かなものがここにあつた

図鑑を閉じ、ダイヤはライダースーツの人と真正面から向き合つた

「それからきみは同じ男それも初対面のやつのことを信じられなくても、僕はきみを信じる」

戦い方や信条よりも、その人のポケモンを見ればわかる

ここまで鍛え上げられるなんて、確かな信頼関係があつて本当にポケモンが好きではないとできない

ポケモンを扱う者なら知っているそういうことだから、ダイヤもまたそう思えたのだろう

「……」

ライダースーツの人は無言で、ダイヤから離れていく

ダイヤはその背中を見ながら、声をあげた

「あの、あなたの名前は」

聞こえていないのか、もう一度大きな声で言おうとしたらライダースーツの人は振り向かず凄んだ

「黙れ。また見つかる」

「……っ」

ダイヤが口を両手でふさぐと、ライダースーツの人は夜の闇に見えなくなつた

ふうと残念そうにダイヤがため息をつく、木々のざわめきにまぎれてつぶやくような声がした

「……………パールだ」

3話

5月12日、早朝、クロガネジム

陽も昇り始めたばかりだというのに新たに着任したジムリーダーが誰かを待つように、そこで立っていた

身じろぎもせず、口も開かない

そして、クロガネジムの扉が開いた

来訪者は陽の光を背に、カツカツカツと足音を立てて真っ直ぐジムリーダーに向かってくる

「おはようございます、シャザ様」

クロガネ新ジムリーダーが姿勢を正し、その来訪者に対して胸の上で複雑な模様を描くように指を切った

「おはよう。今日も規範を守っているようだな」

甲高い声でシャザが微笑みかけ、掌を開いて見せた

「クロガネジムリーダーに就任して、早5日は経つが具合はどうだ」

「至極順調です」

その言葉にシャザはそうでなくては困るのだ、とやんわりと叱責した

「我らの計画は最終段階を迎える。その重要な地位に就いたことを自覚しなさい」

「も、申し訳ありません。一層の精進を務めます！」

クロガネ新ジムリーダーは床につくくらい頭を下げると、シャザは座り込んでその後頭部に掌を乗せて撫でるように回した

その行為にクロガネ新ジムリーダーはむせび泣き、シャザの掌をつかんで祈りをささげる

シャザは立ち上がり、陽が差しこむ窓を見上げた

「シンオウ地方は季節によっては雪に深く閉ざされる町村が多く、近隣との連絡手段も限られてくる。故にPTDによって住民すべて

がポケモン化し、消えたところでその発見は遅くなる」

「はい。そして、こうしてひらけた街にPTDを広める為にジムリーダーとしての権限を行使する」

「そうだ。お前は教義に従い、常に信仰心を絶やさず、この街を宗主様の御心で満たすのだ」

クロガネ新ジムリーダーに言ったシャザは窓の外を見上げ、両手を広げ打ち震えるような声を絞り出す

「PTDこそ宗主様の御心の具現。お前達はひと粒たりとも無駄にするなよ」

「……わかっております」

シャザは両腕を素早くたたみ、クロガネ新ジムリーダーに背を向けて歩き出す

カツカツカツカツと足音を立て、扉の前に立ったところで止まり振り返った

「ところで、お前のポケモンの調子はどうだ」

「はい。とても扱いやすいです」

シャザとクロガネ新ジムリーダーは微笑み合い、互いに向けて胸の上で指を切って見せた

……

5月19日、ハクタイシティ西側に面する211番道路、昼過ぎの場合

ダイヤはポッタイシを連れて、またLv上げに勤しんでいた

この付近に出てくるポケモンのLvは14前後で、ポッタイシには丁度いい相手だった

「少し休憩しようか」

ワンリキーを倒したポッタイシに声をかけ、ダイヤはその辺りに転がっている岩の上に座った

聞き間違いでなければライダースーツの彼ことパールと別れてか

ら、もう1週間くらい経つ

206番道路、サイクリングロードを徒歩で逆走し、ハクタイシ
ティを拠点にハクタイの森などでポケモン図鑑を埋めている

かつて悪名高いギンガ団がいたという建物は観光名所となり、ダ
イヤに時の流れを感じさせた

岩に座ったまま彼が後ろを向くと、高い山があつた

テンガンざん、シンオウ地方で一番空に近いと言われる最高の山
であり最大の難所

山頂付近は常に吹雪いていて、その山全域にLvの高いポケモン
が生息しているそうだ

今のダイヤ、ポッタイシではまだこの山を登っていくのは無謀す
ぎる

ここから山の向こう側に行くとしたら、ふもとを迂回するか通行
の為に掘られた洞窟を抜けていくかだろう

あのパールを持つゴウカザルぐらい強くなければ、遭難は確定事
項だ

「(……パール、か)」

ふと空を見上げ、雲の流れをその目で追う

「……なあポッタイシ、僕さ……」

ダイヤが何か言いかけたが、すぐに口を閉じてやめた

ポッタイシは首を傾げ、膝を抱えてうなるおやトレーナーを不思
議そうな顔で見ている

「何か悩みかしら、少年」

声をかけられたように思い、ダイヤが顔をあげるとそこには美女
が立っていた

胸元が開いた黒い長袖のロングドレス、金色の髪を留める髪飾り
も黒を基調とし、首に巻くファーまで黒いがすべて彼女に合っていた
艶っぽい大人の魅力にどきとしたダイヤ、その彼女とは初対面
だったが知っている

思わぬ有名人との出会いに、ダイヤは座っていたところを立ち上

がった

「も、もしかしてあなたは……！」

「あら、あたしのこと知ってくれているの？」

にこと微笑む彼女に、ダイヤは頷いた

「ポケモンジャーナルで見ました。シンオウ地方、現チャンピオンのシロナさんですよね」

「ええ。そうよ」

やっぱり、とダイヤはポッタイシと顔を見合わせた

あまりに彼が嬉しそうにしているので、つられてシロナは手で口元を隠しながら微笑んだ

「ところで、何か悩んでいたんじゃないの？」

「あ……それは、もう、いいです。多分」

真面目な表情で言うダイヤに、ポッタイシは頭を傾げる

シロナは「そう」とつぶやくと、しゃがみこんでポッタイシのくちばしの下を撫でた

気持ちよさそうにポッタイシが目を細めさせ、シロナがダイヤに話しかける

「さっきまでのバトルを見てたわ。いいセンいつてる」

「ありがとうございます」

「ポッタイシもよく鍛えられているわ。Lv22と半ばってところかしら」

図鑑といった機械も使わず、正確にポッタイシのLvを言い当てた流石チャンピオン、ポケモンの使う技や鍛えられ方ですっかりとそこまで見極められるのだ

「他に手持ちはいないのね」

「はい」

ここまで一気にLvを上げられているのは、ポッタイシ1体のみに絞っているからだ

複数体ポケモンを同時に持つトレーナーはどうしても均等にLvを上げていくので、経験値が溜まりにくい

だから1体だけを重点的に育て、程良く上がったところでポツク
ス行きを繰り返すのが一番効率いいとされている

しかし、トレーナーの多くはそんなポケモンをモノのように機械
的にLvを上げたくない

また1体のみだとバトルでのタイプ相性の問題、ひでんマシン対
応の障害や不慮の事態などに対処できないということも多くの特レ
ーナーは複数体持ち歩いているのだ

「そう。それもいいわね」

目を閉じながら頷くシロナはポツタイシから手を離して、すつと
立ち上がり、ダイヤと向き合った

「あなたのお名前は？」

「ダイヤです」

「ダイヤね。今、時間はあるかしら」

ダイヤに予定はない、ホテルもその日ごとに取り替えているので置い
てきた荷物もない

「じゃあ、少しあたしに付き合ってください？」

「いいですけど」

現チャンピオンで美女のシロナからの唐突なお誘いに、ダイヤは
すぐに了承した

しかし、いきなりすぎるので行き先を先に聞く

「カンナギタウン。このテンガンさんを越えた先にある町よ」

「登るんですか？」

「まさか」と微笑むシロナはハイパーボールを取り出し、なかか
らグライオンを出した

地面と飛行タイプを持つポケモンで、確かそらをとぶが使えたは
ずだ

「2人乗りだけど、大丈夫だから」

シロナが来い来いと手招きするので、ダイヤはポツタイシをボー
ルに戻した

「寒いけど、しっかりつかまってね」

宙を飛ぶグライオンの横に立って、その片足をつかんでいたダイヤを、同じように片足をつかんでいたシロナが彼のことを抱き寄せたぎゅっと腰をつかまれ密着した彼女の柔らかな温かな感触と匂いが鼻孔にして、ダイヤの鼓動が速くなる

そんな幸せのつかの間、グライオンがその釣り合わない翼を使つて一気に上空まで飛び上がる

雪が常時降るというテンガンさんの気温、びゅうううと吹き荒れる上空の強い風、そらをとぶの勢いもあつて一気に体温が下がる予測が甘かったとダイヤは身体を硬直させ、息も止まった

……

グライオンは高度を抑えながら、低く山を迂回するようにそらをとんだ

距離もそれほどなかったのか、山間に見える小さな町を見つけると降下を始めた

カンナギタウン、山間にある本当に静かな町で昔ながらのものを大切に守っているという

そらをとぶで見降ろした町にある民家は本当に少なく、人影もないそこは町というより村だった

シロナとダイヤは町の中心にあるほこらの上まで飛んで、そこで降りた

「着いたわ」

グライオンから手を離してとんとと軽やかにシロナが降り立つと、ダイヤも身体をガチガチに固めながら降りて一息ついた

成る程、彼女の黒い格好はああいう寒さに耐えるためなのかと納得する

シロナが早足でほこらの方に歩いていくので、ダイヤもその後についていく

ほこらの左右には壁画があつて、ダイヤはそれを横目に見ながら

ほこらのなかに入っていく

なかは薄暗いが真つ暗ではなく、足元にそれほど気を配らなくても転びそうになかった

先に入ったシロナは一番奥の壁際に経って、ダイヤのことを待っている

それに気づいたダイヤは駆け足になって、彼女のもとに急ぐ

「すみません」

「いいのよ。……あなたに見せたかったのは、これ」

ほこらの最奥に描かれた壁画、3つの点を 状に結んでなかの大きな模様を囲んでいる

点も模様もポケモンに見えなくもない、ダイヤはその目で隅々まで観察する

「これは何ですか？」

「このシンオウに伝わる伝説のポケモンを表したもののよ」

伝説のポケモン、強大な力を持ち唯一無二の存在であることが多
い為に幻のポケモンとも言われている

各地に伝説のポケモンは存在しているというが、シンオウ地方の
それらは別格の力を持っているという

「3年ほど前、時間・空間・反転の世界そのものが衝突を起こし
た。そしてその3つの世界それぞれに住まい、主である伝説のポケ
モン達は自身の存在と世界を守る為に戦い合った」

3体の世界の主が激突することで時空が歪み、人間世界にまで大
きな影響をもたらした

争いの場を中心に、すべての世界が破滅するかとも思われたそうだ

「その戦いは感謝と暗黒によって一旦はおさまり、3つの世界は
再び元の位置に戻った。今、3体の伝説のポケモンはそれぞれの世
界で戦いの傷を癒しているでしょう」

「へえ……」

まるで映画のようなシロナの話に、ダイヤは面白そうに聞き入った
シンオウ地方で、神話のひとつのような戦いが実際にあったとい

うのだ

この話には一般には広まっておらず、知っているのは戦いを直接その目で見たものか話を聞いたものに限られるそうだ

またこういった人智が及ばない壮絶な事象に出くわしたものは、それを面白半分に話を広めようとしなくなるものらしい

「もしまた同じようなことが再び起きるとしたら、それは同じような理由のもと……個々の世界と自身の存在を脅かす何かが起きた時……たとえ怪我が癒えていなくても戦わざるを得ない」

「……凄いお話を聞かせてもらって、僕は嬉しいんですけど、そんな話を本当にしても良かったんですか？」

シロナは壁画に触れ、そっと指でなぞる

それからダイヤの方を見て、フツと微笑んだ

「？」

「誰じゃ、そこにおるのは」

かこかこかこつとほこらのなかに小気味いい音が響く、その音に2人は振り返る

ほこらの出入り口に誰か立っている、その手に持っている杖で地面を叩いている音だ

「……！」

「あつ、すみません、勝手に入って」

ダイヤがぺこつと頭を下げると、からーんという音が響いた

頭を上げたダイヤを見ると、そこに立っている人が杖を手から取りこぼしたようだった

「お、お前……シロナか？」

震えた声を絞り出し、前のめりになって倒れた

何かつぶやく老人にダイヤが慌てて駆け寄り、杖を拾い、倒れたその人を抱きかかえた

老人は視線さえも震え、それでも何を見ようとしているのかはわかった

ほこらの最奥に立つ、シロナだ

「おつ、おおおおお、……ぜじゃ、ま……の苦し、をあ、わ、え……のかっ」

「大丈夫ですか！」

げぼげぼつとせき込む老人の状態は異常だ、何かの発作かもしれない

震える老人の和服の裾から手首にかかった巾着袋、ダイヤが直感的に手にとってなかをのぞくと処方箋と粉薬の包みが出てきた
カンナギ漢方薬局とあるそれをダイヤが拾って見せると、老人は頷いてからそれを飲む

ダイヤは背中をさすってやるが好転せずに、喉を抑え、うめく老人が急に立ち上がったかと思うと……がくがくがくと上下に震えだした

「ううううう」

老人が口を抑え、そして……その姿を変えていく

服を破り、背の曲がった小さな背丈から大きな身体へと膨れ上がり、変身したのはチャールームだった

「——っ」

チャールームが頭から突っ込んでいくのを、シロナがポケモンを出して防ぐ

出てきたのはブラッキー、指示はまもるだ

「シロナさんっ！」

チャールームが頭から何度も突っ込んで更に連続的に拳のラッシュ、ブラッキーはそれを避けつつ時に身体で受け止めている

ダイヤの声は届いているのか、最奥での戦いからぶわつとほこらの外へと風が吹き抜けた

「ブラッキー、かげぶんしん」

シロナの指示でブラッキーの姿がぶれ、チャールームの攻撃はすべてすり抜ける

それからまもるを使い、相手を完全に手玉に取っているように見えた

ダイヤは違和感、いやシロナの強さを疑うのではなくこのバトル自体が妙だった

まずシロナの手持ちだ、ポケモンジャーナルの手持ち全員集合写真ではグライオンもブラッキーもいなかった

新しい手持ちポケモンの可能性もあるし、この狭いほくらではガブリアスといったポケモンは使いづらいこともある

それ以上にチャーレムとブラッキー、この2体の攻防だ

チャーレムはエスパーと格闘タイプだが、攻撃に使っているのは専らしねんのずつきのようだ

悪タイプであるブラッキーにはまるで効果がない、連続的に放つ拳はわざとはずしているように見えた

それなのに、攻撃を防ぎ続けHPに変化のないブラッキーの表情が凄く苦しそうなのだ

「ダイヤ、後ろっ」

シロナがほくらにその声を響かせると、後ろにゴリキーやヨルノズクがダイヤのことをにらんでいた

ダイヤが前方に跳んだところで、ゴリキーの拳が地面に直撃する野生ポケモンがこんな、町の中心にあるほらの前まで侵入してくると思わなかった

「(……まさか)」

山間にある本当に静かで小さな町、それは人が少ないのではなく住人すべてがポケモンに変身してしまったからではないのか

あの212番道路で見たPTDで変身した人達のように、悪夢のような光景がここでも起きたのではないのか

「シロナさん、これはどういうことなんですかつ！」

ゴリキーがまた拳を振り下ろしてきたので、ダイヤはポツタイシを出して応戦した

バブルこうせんでゴリキーの顔面を攻撃している間に、ヨルノズクが隙間をくぐり抜けて最奥のシロナめがけて飛んでいく

「ダイヤ、あたしのことはいいから、あなたはここから離れなさ

い！」

「でもっ」

「いいから！」

目をやられて暴れ回るゴリキーにほこらの出入り口がぼろぼろと崩れ出し、その落ちてくるガレキをポッタイシがメタルクローで砕く

トレーナーとしての実力も経験も、手持ちポケモンのLvでもシロナの方が断然上だ

ここは従っておいた方がいいのかもしれない、ダイヤはその表情を少し歪め出口とシロナを見遣って迷った

「ポッタイシ、バブルこうせん！」

パパパッパっとはじける攻撃でゴリキーに隙を作らせ、ダイヤとポッタイシはその脇をすり抜けて脱出する

ほこらを出るとカンナギタウン側の211番道路から来たと思われる野生ポケモンや、この辺りにはいないようなポケモンまで集まりつつあった

こんなにいては、いくら強いシロナでも危ないのではないか

ダイヤはそう思ったが、ポッタイシに比べ目の前にいる野生ポケモン達のLvの方が10ばかり上回っていた

これだけのLv差と数が相手では、ダイヤには自分の身を守りつつ逃げるだけで精一杯だ

ポッタイシのバブルこうせんとメタルクローで不意を突き、少しでも体勢を崩させて野生ポケモン達をかわしていく

シロナの無事を祈り、ダイヤはテンガンさんとは反対方向の210番道路に向かって進む

進んだ先は霧が立ち込めていて姿を隠すにはもってこいだが、ダイヤの方も視界が悪くて足元の地面が少しぬかるんでいた

耳に響くのは流れ落ちる滝の音か、おそらくこの辺りの野生ポケモンもポッタイシより上のものばかりだろう

視界の悪さ、足場の悪さ、Lv差の不利

霧にまぎれて、ダイヤの周りのあちこちからポケモンのうなり声が聞こえてきた

「（どうする……どうするっ！）」

焦るダイヤは後ずさり、そしてかかとに浮いたような感覚をおぼえた

この下から崖、そして水音から察するに下は滝か川のようなうだぐくりと唾を飲み込むと、ポッタイシはダイヤの手に触れる思い立った

一か八か、ダイヤはポッタイシにつかまり、その身を滝壺に向かって投げだした

……210番道路に身を置いた、ダイヤの周りには追っ手も野生ポケモンもいなかった

それはこの山道の周りの谷間に響く、遠いポケモンの山びこ焦りと追い詰められたと思いこめるだけの状況に導かれた、痛恨のミス

「勇敢と無茶は違う」、そのナナカマド博士の言葉も思い出せなかった

4話

5月23日、深夜のノモセシティ、その街にあるノモセ診療所

「怪盗マージュだーっ！」

がっしやーんと2階の窓ガラスを突き破り、その身を宙に投げだす黒い影

全身を覆うほど大きい黒いマントをひるがえし、つばの広い帽子とマスクを付け、傍らにムウマージを連れている

黒いマントが風を受けると、それは大きく広がって翼のようになっ
った

怪盗マージュは地面に落ちることなく、空中を逃げ続ける

「かつか、返してくれーっ！」

ノモセ診療所、怪盗マージュが突き破った窓から身を乗り出して老人の患者が力一杯叫んだ

割れた窓ガラスの枠に手を置き、破片で血を流しても構わず、空
を行く怪盗マージュに目一杯手を伸ばして呼びかける

「頼む、それはわしにとって大事な、大事なちっち治療薬なんだ
ーっ！」

「サマヤさん、危ないですから離れてっ」

看護師に引き離されてもなお、老人の患者が叫び続ける

「おいっ、まさか俺の薬も！」

「すべてかつ、あっあのマージュが全部……っ、金も薬も奪って
いったというのかっ」

「ワシの手荷物は何処だ、持っていかれたのかマージュに！」

「あたしの化粧瓶はどこよおおっ、高かったのよあれえええ」
診療所内でパニックが起きたよう、暗かった診療所の窓に

次々明かりがともされる

そして、事情を知った患者達が我先にと診療所から飛び出して怪
盗マージュの影を追うのだ

「どこ行きやがった!」

「早く、早く探し出せ!」

「マージユウ!!」

半狂乱になった患者達が、嘆き悲しみ怒りながら空を見上げて叫び続けた

そこにはもう怪盗マージユの姿はない、夜空に溶けてしまったようだ

警察が駆けつけ、興奮状態の彼らを押さえて落ち着かせ、事情と被害状況を聞きだす頃には朝を迎えていた

……

5月26日、午後3時23分

しとしとと鬱陶しい小雨の降る、少しばかり肌寒い日の昼下がり

「怪盗マージユ、次はトバリシティに現れたってよ!」

「ああ、デパートの最上階にある社長室の金庫からごっそり金を奪ったそうだ」

「あくどい奴だな」

「それだけじゃ飽き足らず、スーパーマーケットのなかを荒らしてつたらしい」

「オイオイ、マジでどんだけ」

客の騒がしい話を流し聞きながら、シンオウ新聞を読むパイプをふかした男がハサミで記事を切り抜いていく

そしてその記事をばしんと叩きつけるようにノートに貼り、ふうんとつぶやくのだ

「マスター、それ、見せてくれます?」

ここはソノオタウン、その町中にあるコーヒーや紅茶にあまいみつ入れ放題、それからあまいみつをたっぷり使ったお菓子が売りの喫茶店

あまいみつは通常の砂糖より健康を害さないとTVで放映したこ

ともあって、近所だけでなくシンオウ中の甘党が毎日のようにやって来る繁盛店だ

「ああいいよ。ほれ」

マスターがカウンターに座る客に、手に持っていたノートを閉じて渡す

表紙にはマジックペンで、怪盗マージユ事件記録と殴り書きされている

「怪盗マージユ、ですか」

「お客さんも知ってるでしょ、タチの悪い小悪党ですよ」

「いえ。実は私は観光でジョウトからきたもので。ちよつと噂で聞いたことあるくらいです」

肩をすくめて微笑むカウンターの客は興味深々に、そのノートの表紙や裏表紙を眺めている

ソノオタウンは一年通して町中に咲く沢山の花と北側にある広大なソノオのはなばたけで有名な町だが、こう雨に降られてはそれも楽しめるものではない

「そうかい。じゃあ、知らないままの方がいいかもなあ」

マスターが眉をひそめ、にーつと虫歯のない歯を見せて笑うとカウンターの客は首を傾げた

「何故です？」

「やることが卑劣で、胸糞が悪くなるのさ」

はあ、とカウンターの客が手に取ったノートの殴り書きの文字をもう一度見て胸ポケットから丸眼鏡を出してかけた

ゴシップ・ワイドショーネタが好きな客の、最近のよくあがる話題は断トツで怪盗マージユのもの

喫茶店のマスターも注目していて、こうして記事を毎回スクラップしては何か警察に貢献できる発見はないかと目を凝らしているそうだ

マスターお手製の事件ノート、糊でごわごわしたページをぺらりぺらりとめくって見る

「最初に事件を起こしたのは…… 3ヶ月くらい前ですか」

「ああ。最初はただのこそ泥って感じで、名前すら付けられなかったよ」

小さな空きスペースを埋める為に入れられた、そんな程度の扱いだった

それから日を追うごとに被害件数は増加、ムウマージを連れた姿を事件現場で見たという目撃情報も増えた

そのこそ泥自身が名乗ったのか、被害を受けた誰かが勝手に付けて警察に言ったのか、さてはマスコミ関係者が付けたのか

どのみち自らもその姿に似せた、相方のムウマージから取ったのだろう

怪盗マージュなんてしゃれた通り名が定着し、そう呼ばれ出したのは2か月前ほどのことだ

「盗みに入るのが悪い大金持ちなら、義賊だの怪盗って名前が合うんだろうけどな。こいつは根っからの悪党よ！」

マスターはふんと鼻息荒くしながら、チーンと鳴ったオーブンを開けると香ばしく甘い匂いが店内を満たしていく

その匂いにつられて、客が次々にそのパイを注文するのを聞きながらマスターは熱々のそれを8等分にカットしていく

「盗みに入るのは民家から病院、抵抗しようのねえ弱い奴らから金銭や物品を盗んでく。たまに企業に盗みに入るが、んなの数える程度さ」

「ふうん。セキュリティもなく、把握・守りきれないほどある民家を狙う。確かに頭の良い空き巣ですね」

「その上病院だ！ 患者の薬や荷物を盗むとか、まったく許せねえ」

切り分けたパイを皿に乗せ、マスター自らが客のもとに持っていくながらつぶやく

怪盗マージュに対しての八つ当たりを皿に向け、乱暴に音を立てて置いていくが客はマスターに同調して頷くので気にしない

カウンターの客がぺらり、ぺらりとノートをめくっていく

怪盗マージユの出現に法則性はなく、これまで何十通りのパターンを出したがことごとく外れた

そらをとびやなみのりといった、自由な移動手段があるから検問にも引つかからない

そもそも怪盗マージユの素顔は誰も知らないのだ、マスクを取ってマントを脱いだらきつとわからない

謎に包まれた正体、帽子とマスクの下の憶測は美醜老若男女ふたなり宇宙人ポケモン説と広く想像され、毎日のように悪戯な誤情報提供で警察の電話を鳴らしていた

「しかし、なんだってこのマージユってやつはそんなものを盗むんでしょう。お金目当てなら、薬や手荷物よりもっと換金しやすいものもあるでしょう」

「ああ、まあそういうルートがあるのかもしれないなあ」とマスターが返すと、客の1人が会話に加わった

「インや、元から盗んだものに興味がないのかもしれないぞ」

「まさか」

「それがそうとも言い切れんのよオ。盗みがあった街のはずれで、何か高温で燃やした跡が見つかったり、スーパー荒らしみたいに店をめちやくちやにして終わりつてのもある」

怪盗マージユは予告状を出したり残したり、明確な目的を周囲に教えようとはしないのだ

ただの愉快犯かもしれないし、それが連れ歩いているムウマージや盗みを働く自身のレベルの高さを誇示する為だけのパフォーマンスなのかもしれない

何にしても、TVや新聞を通してお茶の間にネタを落とし続け、実のないお喋りに花咲かせる話題としては困らない対象なのだ

「……困った悪党もいたものですね」

カウンターの客がノートを閉じてマスターに返し、丸眼鏡をはずして、ついでにブレンドのおかわりを注文した

まだ外の雨は止まず、それどころか勢いを少し増しているようだ
絶えない談笑と菓子を焼くオーブンで暖かくなった店内との温度
差で、窓は白く曇っていた

……

同日、同時刻

バシャバシャと水たまりを踏んで、傘もささずに歩く者の姿があった

雨宿りする当てもなく、その者はふと窓が白く濁っている喫茶店を見つけた

店内はきつと温かいのだろう、それを求めて足をそちらに向けてみる

喫茶店まであと3歩というところで、ふと強く甘い匂いが鼻をついた

「……っ!？」

その匂いに吐き気をおぼえ、顔をそむけて、地面に顔を向けた

口元を押さえ、崩れ落ちた膝が水たまりに浸かって身体の体温を更に奪う

その者は店に入ることを諦め、ソノオタウンから一刻も早く逃げ出したくなった

しかし、これで逃げるわけにはいかなかった

晴れた日には、こんな匂いがこの街に充満する

そうしたら、また近付けなくなる

身体を奮い立たせて起こし、踵を返して街の外れを目指す

そこで一度暖を取ろう、それから今夜忍びこむところと逃走経路を改めて地図で検討しよう

下見は充分だ、今度は自分とポケモンの身を万全にすることが肝要だ

そう言い聞かせ、口元いや鼻を押さえて駆け足で行く

7時間20分後、民家2軒と個人商店1軒に怪盗マージユの被害が出た

……

5月30日、正午

純白と金色に統一された室内、そこに入る者は心せねばならない
オークルとヴェルが玉座の間に足を踏み入れ、即座に頭を下げて
平伏する

見上げるまでもなく、そこにその2人にとって絶対的な存在がいるとわかるのだ

「発言を許す」

玉座に座る宗主が2人に許しを与えた

ヴェルが先に進言することをオークルと視線で交わし、一步前に出る

「報告します。カンナギタウン10日前、クロガネシティ7日前、ミオシティ2日前、ナギサシティも昨日に90%を超える世帯にPTDの普及滞りなく完了致しました」

「11日前のカンナギタウンでの悶着はどうなった」

すべて知っておられるのだと、ヴェルは先に報告しなかった自分を悔いた

「問題ありません。恐らく幻を見たものと」

それをきっかけに最後の住人もポケモンと化した、それ以上の情報は何もない

ヴェルは床に口付けし、額をすり合わせて伏せつたまま宗主様に余計な言葉を発させた自らを戒める

オークルはそれを横目で見ることせず、ただ自らの言葉を発することだけに努めた

その報告に対する高揚をなるべく抑え込み、平常を意識する

「ご報告します。ようやくあのPTD3種が完成しました。都合上、テストはできませんが何ら問題はありませぬ」

「そうか。よくやった」

玉座から労いの言葉をかけられ、オークルは即座に平伏するそれから小さく「この玉間を汚すことをお許しください」とつぶやきながら、感涙を見せた

それがわかり、ヴェルはぎりと唇を噛んだ

玉座から立ち上がり、宗主が静かに天井を見上げた

「では、向かおうか」

5話

6月1日

テンガンざん山頂、早朝

そのわずか下の方では猛吹雪が吹き荒れているが、ここはまるで無風だった

太古の人と神が築き上げた、滅多に人が踏み入れることのない聖域と呼ばれるような場所だ

やりのはしら、それがこの聖域の名

そこに4人の人間が訪れ、1人が聖域の中央にある聖壇まで足を進めた

「ついにこの時が、来たのですね」

ヴェルが巻かれた平紐の下、その目から一筋の涙を流す

「宗主様を阻む運命などありはしない」

シャザが掌を合わせて、目をつむって祈るようにつぶやく

「我らは教義のもとに、最後まで宗主様に従います」

オークルがそう宣誓し、胸の上で複雑な模様を指で切って見せた聖壇に立つ宗主は3人と向き合い、天を抱くようにその両手を大きく広げる

陽が昇り、聖域にその反射光による輝きであふれていく

「新たな日を迎える」

宗主が天を見上げたまま、3人に呼びかける

「許す」

その言葉を待ち望んでいた、と3人が掌にあるものを宗主に見せて示した

オークルは青いカプセル錠

ヴェルは薄桃色の丸い錠剤

シャザは包みに入った黒色の粉薬

各々が口に含み、喉を通して身体のなかに取り込んだ

「古き伝説の上に真なる神話を刻む」

3人が同時に、一斉に胸の上に複雑な模様を指で切りながら叫ぶ

「我らは」

「宗主様の」

「御心のままに」

嗚咽が漏れるのを耐える3人の身体に波紋が広がり、それは大気にも伝わり震える

波立つ皮膚に色や文様が浮かぶ変化が生まれ、そして3人は人間としての形を失っていく

金属質のような固い皮膚、人間には見合わぬ巨大な身体、強大な力をその内に秘める

「私に天上への道を開け」

宗主の目の前に、もうあの3人の姿はない

そこに存在するのは唯一でなければならない、無二を許されないもの

時間を司る神、ディアルガ

空間を司る神、パルキア

反転世界の王、ギラティナ

やりのはしらにシンオウの三神が産声をあげると、その上空に目に見える亀裂がはしった

宗主の目の前で広がっていく3つの亀裂を大きく開き、別世界からその姿を見せる

ディアルガ、パルキア、ギラティナ

今現在、それぞれの世界に君臨する三神がやりのはしらにいる三神に咆哮をあげる

そして自身の存在を脅かす存在の出現に怒りを露わにし、生まれただけの三神に襲いかかってくる

あまりに強烈な激突に大気が、いやこの世界そのものが激震する

同等の巨大なエネルギーが3種類もぶつかり合い、その行き場は
テンガン山を中心に、シンオウすべてを揺さぶる大地震となった
三神同士の戦いに宗主は微笑みを見せ、踵を返した

……

フタバタウン、同日、同時刻

これまで一度も起きたことのない、震度7レベルの大地震がシン
オウ地方すべてに起きていた

まともに立つことさえままならないほどの揺れ、耐震強度のない
建物から次々に傾いていく

この町に残された最後の建物、それはナナカマド博士のポケモン
研究所だった

通常の建物より丈夫に造られているが、それもいつまでも保たな
いだろう

なかにいるナナカマド博士と助手が研究室の機械にしがみついて
いる間にも、ガラスの器具といったものが机から滑り落ちて割れた
早く逃げ出さないと、倒壊に巻き込まれてしまう

「ただっただ大丈夫ですか、博士っ」

「ウム、なんという揺れだ」

揺れは一向に収まる気配はないが、先程に比べれば半分くらいの
ものだ

ふらつくが、歩けないレベルではない

助手はネクタイの結び目を押さえながら、ナナカマド博士の傍に
駆け寄る

「急いで避難を」

「いや、それは、できんっ」

揺れに翻弄されながら、ナナカマド博士は辺りに散らばった書類
や小さな機械をかき集めて鞆に詰め込んでいく

「何をしてるんです！　こんな時にどこへ」

「ミオの図書館だ」

助手は耳を疑った

「シンオウ全体の危機っ、非常事態ですよ！ 今更過去の資料や研究書を読んで、どうなるっうわッ！」

また揺れが激しくなり、助手がどさつと前のめりになって倒れたしかし、助手の言う通りだ

この事態をどうこうする力など、図書館にもミオシティ自体にもない

確かにミオの図書館は古い資料を保管する為にシンオウでも一二を争うくらい頑丈な建物だが、この大地震では必ずしも安全とはい切れない

またミオシティはフタバタウンからそれなりに離れている、もつと他に良い避難場所はある

ナナカマド博士のような頭脳を持ち主は一刻も早く広場のようなところへ避難、そして状況を把握して打破・改善する対策を練るそれがシンオウの為だ、助手はナナカマド博士の肩に手を置き、そう説得した

だが、ナナカマド博士はその手を押しやって怒鳴った

「すまんっ！ だがっ、だからこそっ、わたしは未来に会いに行かねばならんのだ！」

その剣幕に助手が圧され、たじろぐ

腹と足に力を込めて歩こうとすると、大きく横に地面が揺れてナナカマド博士は壁に身体を叩きつけられる

「ぐう」とうめきながら、ナナカマド博士は研究室の一角に目をやる

その視線の先にはこの大地震でも揺らぐ、ものともしない大樹のような存在感

「そこまでの護衛、しっかりと頼むぞ」

ナナカマド博士がこの状況を切り抜けていく、頼みの綱

大きくて丸い背中のポケモンに身を預け、大の字に寄りかかる青年

茶髪でたれ目、日焼けした肌に肩幅もがっちりとした体格で身長180cm以上はあるだろう

胸元には大きな一眼レフカメラが黒光りし、上下共に薄い布地の服を着ていた

その青年はだらーっとしながら、文句を言うようにつぶやく

「あーあ、博士の頼み事っていつも厄介だよなあ……。今日もせつかく頼まれ事1つ終わらせたって報告しに來ただけなのに」

なあ、と青年は同意を求めるように後ろの相棒に声をかける

それはよく鍛えられたドダイトス、草・地面タイプの大型ポケモンこの天変地異のなかで勝手に話が進んでいくことに憤慨しながら、助手が思い切り叫んだ

「……っ、ええいこうなったら私も行きますからっ！　頼みましたよ、プラチナくん！」

「あー、ハイハイ。りょーしょーしますた」

力なく、何とも頼りなく返事をするプラチナという青年に助手は物凄い不安をおぼえる

突然来訪したこの青年のことをナナカマド博士から話に聞いたけれど、こんな今になっても信じられない

このプラチナという青年が、あの『シンオウの湖畔』を撮った若手最高峰のカメラマンだということ

「これ、震度3か4くらいかね。まだお前のじしんの方が凄いな」
プラチナがドダイトスにそう話しかけると、その相棒は大欠伸をするばかりだった

シンオウ地方を揺るがす大地震とポケモンの技を比べるなんて、非常識というか不謹慎だと助手は言う

大きく揺れてがしゃーんとまた何か割れる音を聞いて助手が頭を抱えると、プラチナはことなげもなくよいしょっと立ち上がった
「てことはまだ道も建物もそう倒壊してないな。出るなら今の内だぜ、いけるか博士達」

「ウム」

よろよろとおぼつかない足取りで、ナナカマド博士と助手はプラチナのところまで歩いていく

助手が足元不注意でこけて、揺れている地面から起き上がろうとすると差し出す手が目の前にあった

「ほれ」

プラチナの手につかまり、助手は起き上がる

この揺れのなかでその腕も身体もまったくぶれない、まるで一本の大樹のようだ

助手がプラチナのことを見つめていると、頭をかいて彼が言う

「あー、ま、要するにポケモンのじしん程度で収まるなら、まだ行けるだろって言いたかっただけだ」

何のことかと思ったら、先程の不謹慎のことだと助手は思い当たる
そうだ、ポケモンバトルというのは時に街中でも起きるものだ
ポケモンのそこそこ強力な技がもし流れて当たっても大丈夫なようにポケモン協会が保険、そして十分な強度を義務付けしている
シンオウは厳しい自然と付き合ってきた地方でもある、かけられた保険も耐えうる強度も申し分ないはずだ

すっかり頭からそのことが抜け落ちていた助手は、プラチナに向けて頭を下げた

「すまない、思慮が足らなかったのは……」

自分の方だったと顔を上げたら、そこには当のプラチナもナナカマド博士もいなかった

あれ、と首を傾げていると玄関が開きつ放しになっている

流石はナナカマド博士が見込んだ人間と思い直した矢先がこれである、助手は開いた大口からぶあつと魂が抜けた気がした

「おーい、あれ、まいいか。行くぞー、博士」

「よくないよくないっ！ 待つて、待つてええええ」

声をかけるのは遅いし、諦めるのは早すぎる

助手がひいひいと言いながら、研究所から脱出すると既にドグイトスは歩き始めている

跳んでプラチナのドダイトスの尻尾につかまり、ずるずると引きずられながらフタバタウンをあとにするのだった

6話

6月1日

コトブキシティ、西地区

「ほいほーい、どいたどいたー」

プラチナがドダイトスの上であぐらをかきながら、間の伸びた声で言う

どすんどすと重量級の足音を立てるドダイトスが、ひび割れたアスファルトの上を歩いていく

今でも地面は大揺れを起こしているのだが、その上に乗っているナナカマド博士と助手は意外と快適だった

ドダイトスが四つ足をうまく使い、その身体を自ら傾けるなどして揺れを軽減させているのだろう

この安定感、確かに頼もしい

「んゝふっふふふうゝ」

しかし、そのおやトレナーのプラチナは鼻歌を口ずさむなど至極能天気に見えた

コトブキシティの様子は一変し、ビルや建物は倒壊し、ライフラインは既に機能しなくなっている

あちこちから煙があがり、空は真っ黒に曇り、ひび割れた大地は悲鳴をあげているようだ

予想だにしない断続的な大地震、そんな天変地異に流石のシンオウ強度設計も負けてしまったようだ

そんな凄惨な光景を見て、どうして鼻歌などしていられるのか
氷雪のシンオウ地方を氷4倍弱点のドダイトス1体で渡り歩いたことも合わせて、どこか常識というものが欠落している

「大丈夫なんですか、ナナカマド博士……」

「ウム」

助手の不安な言葉を否定、肯定するわけでもなくナナカマド博士

は頷くだけだ

はあとため息をつき、助手が空を見上げると目を見張った
傾いていた高層ビルがビギツと音を立てて崩壊し、ワンフロアま
るごと落下してきた

しかも落下地点はドダイトスの真上だ、こんな歩行速度では逃げ
られない

慌てうろたえる助手、流石にこの事態にはナナカマド博士も驚い
て腰を浮かせた

「うわあああああッ！！」

「ぬうつ」

こんな状況において、歩いていたドダイトスがのうてんきにも立
ち止まって大欠伸を見せている

助手はネクタイの結び目に手をかけたまま、一瞬意識が吹っ飛んだ
駄目だ、完全に間に合わない

超巨大なガレキがドダイトスに影を落とし、その影に入ったもの
は完全に押し潰される

落下音も響き、びりびりと肌が震える

助手もナナカマド博士も頭を低くして、せめてもの防御態勢を取る
そんな絶望的な色んな感覚ですぐにわかる状況下で、どうして暢
気な鼻歌が耳から離れないのか

「ドダイトス、タネばくだーん」

プラチナの間延びした指示、落下してくる超巨大なガレキそのも
のにはまるで見向きもしない

それでもドダイトスの背中から真上に放たれる打ち上げ花火のよ
うなタネばくだん、その速度と正確な連射はタネマシンガン以上だ
ドドドドドドドドドドドと鼓膜がどうにかなくなってしまいそうな
轟音で撃たれるタネばくだんが鉄筋製のビル、その超巨大なガレキ
を粉碎し真っ二つにした

信じられない破壊力だ、助手は頭を抱え四つ這いになって震えな
がら思った

立ち止まっていたドダイトスがまたどすんどすんと歩き出し、ミオシテイに向かい出す

ずずーんと左右の脇に、真つ二つになった瓦礫が落下し土煙をあげ、周辺の電子機器を潰したのかバチバチと火花が散った

ナナカマド博士も流石に肝が冷えたようで、ふうとあごの下を拭うような動作を見せる

助手はまだ身体の震えが止まらないようで、ネクタイの結び目を確認するようにぐつぐつと押さえた

「ふふっふっうん」

プラチナの態度は依然として変わらない、どういう神経をしているのだ

だが、これで彼の实力は充分過ぎるほど証明された

あれだけの威力を引き出すなんて、このドダイトスも相当鍛え抜かれたポケモンだ

これなら図書館のあるミオシテイまで無事たどり着けそうだが、助手はここでようやく安堵の息がもれた

「っふふふふうんんんふうう、っあ」

プラチナのご機嫌な鼻歌が一瞬止まり、それからまた鼻歌が再開される

何かあったのか、と思った時そういえばと助手は思い出した

「そーいえばプラチナくんもドダイトス1体旅だよな。218番道路にある運河はどうやって渡るんだい？ あそこは確かなみのり使えないと……」

「あゝあゝ、大丈夫。その辺、ちゃんと考えたから」

おお、と助手は感嘆の声をあげる

頼もしい返事が返って来て、ぐつと拳を握って「どうするんだい？」と聞いた

無難な考えならなみのり用ポケモンか丈夫な簡易ボートとか、もしかしてこのドダイトスは特別なポケモンでなみのりなんて使えてしまふのだろうか

プラチナは右手をあげてひらひらと横に振り、それから親指を立ててサムズアップして見せる

「今は流水も浮いてないし、案外水んなかはそー冷たくないから！ 服も折り畳んで頭の上に乗せればそんな濡れねーえよ」

助手は絶句した

まさか、泳げというのか

夏でも涼しいシンオウ地方では泳げる人間は少ない、むしろカナヅチな人間が多い

そもそも今は地震が起きている、波は荒れてまともに泳げるわけがない

もしかしくなくても、先程鼻歌が途切れたのは218番道路のそのことを、つい先程まで忘れていたのではないか

その上、プラチナはそれ以外の解決策を言わぬまままた鼻歌を口ずさんでいる

「……ナナカマドはかせえ」

やっぱりこの青年を頼りにするのは間違いではないのか、引き返せる内に引き返した方が良くないか

助手は頼りなく、ナナカマド博士の服の裾を引っ張った

そうやって「どうにかしてほしい」と懇願するが、ナナカマド博士は否定も肯定もせず「ウム」と頷くばかりだった

……

ミオシテイ、昼前

陽は既に高く昇っているのだろうが、空は暗く何か歪んでいるように確認できない

プラチナの護衛によって、ナナカマド博士と助手は無事ミオシテイに到着した

あの運河は地震によって倒壊した木を使ってイカダを作ることによって解決し、その製作もすべてプラチナの手によって行われた

そのサバイバル技術は間違はなく本物なのだが、材木を運んで組みあげている間に助手は何度それらにぶつかりそうになったか
も少し周囲への配慮とか、そういった常識を身につけてほしいものだ

「ミオの図書館はもう少し先だな」

「ウム」

「やつとここまで来た……安全でしたけど随分ゆっくりでしたね」
ナナカマド博士は起きていたが助手はまだ眠っているような早朝にあの大地震が起きて、正午前にミオシティに着いたということは5時間以上かかったことになる

プラチナは続く地震や襲ってくるポケモンを追い払うなどもしていたからだが、丸腰のナナカマド博士と助手がいたからいつも以上に慎重な歩みだったのかもしれない

いやそれ以前に……そういうことで逆算するとプラチナがナナカマド研究所を訪ねてきたのは朝日が昇り出す前となる辺り、本当に常識がない

大都会より大自然に生きていそうなこの青年は陽が昇る前に起き出し、陽が沈む前に寝るような生活を当たり前のように過ごしているのだろう

助手は頭を抱え、そしてミオシティをぐるりと見渡す

街のと真ん中に大きな運河、跳ね橋があることで有名なミオシティだがやはり見るも無残な光景が広がっていた

人気がないのはこの大地震のせいで住人が完全にどこかへ避難したからなのか、いやそもそも人が逃げたという痕跡が残っていない

「ナナカマド博士、これは……いったい……」

「何か地震が起きる前から、ミオシティに異変があったようだな」
周囲の建物をよく見ると、人間や地震ではない壊れ方をしたものが見られる

あの歯型はパチリスのいかりのまえば、向こうのはアズマオウか何かのつのドリルの可能性が高いと見てわかる

これだけの規模で野生ポケモンに街が襲われたのなら、マスコミ関連でトップニュースになってもおかしくはない

しかし、現実にはそんなニュースは報道されていない

世間を騒がせるニュースとして割合を多く占めているのは、いつもながら怪盗マージユの続報や考察記事だった

「……………まさか、ここまで奴らの根が伸びていようとは」

「？ ナナカマド博士、何か御存じなのですか？」

どしんどしーんとドダイトスがゆっくりと闊歩し、運河の手前までやってくる

跳ね橋は地震で崩落寸前だったが、かろうじて1人ずつなら渡っていけそうだった

プラチナはドダイトスを戻し、ねじ曲がった街灯の柱にロープを固く結んだその端を持って先に跳ね橋を渡る

向こう岸に着いたら跳ね橋の上を通って、ロープが一直線になるように同じような街灯にくくり付けた

「これでいいかー」

「ウム。ありがとう」

ナナカマド博士はそのロープにつかまって、不安定な橋の上を歩いていく

助手はひええええと肝を冷やしながらも、おどおどとへっぴり腰ながらも橋を渡りきることができた

橋を渡ってしまえば、ミオの図書館はもう目の前だ

次第に揺れは収まりを見せ、もう立つても歩いてもらえないものではない

足元に気を配りながら、3人は徒歩でミオの図書館まで目指す
目指すといっても5分くらいで、すぐにお目当ての建物の入り口まで来られた

「おー、結構無事じゃねーえか」

「そうだな」

プラチナがゆるーい感じでミオの図書館を見上げるが、あれだけ

断続的に起こった大地震でもその外観は無事のようだった

ナナカマド博士が一步前に出て、その扉を開けようとするが動かない

地震でドア枠が歪んでしまったのだろう、代わりにプラチナがドアノブをひねったらバキンと嫌な音がした

「わり」

ドアノブが外れてしまい、プラチナが頭をかくのを見て2人はため息をついた

それからドダイトスに無理やり扉を押し倒し、なかに入るとふわっと本の匂いが鼻孔をくすぐった

流石に本は辺りに派手に散乱していたが、なかの本棚は殆ど倒れていない

地震の影響は見られたが、ここがポケモンに荒らされずにすんだのは良かったとナナカマド博士は思う

「で、ナナカマド博士ここに何が……あーッ！」

助手が図書館の1階を見ていると、2階へ続く階段に誰かが座っているのが見えた

しかし、それは初対面ではなく助手もよく知る人物だったから声をあげたのだ

傍らのムウマージがふわりと浮かび、つばの広い帽子と黒いマントをしたその人物が3人の来訪者に気づき、そちらを見た

顔につけた目元を隠すマスク、間違いなく怪盗マージュだった

実際は本物なのかわからない、いやあの立ち振る舞いは本物だと何故かわかる

助手はこれまで読んできた記事を思い出し、憤慨しながらその怪盗マージュを指差し怒鳴った

「なんだってお前がこんなところに！ ナナカマド博士、いやプラチナくん警察を呼んでき」

興奮する助手を掌で押さえ、ナナカマド博士が一步前に歩み出る「久し振りだな。きみが元気でやっていることは、記事で読んで

いるよ」

「そうか」

「あんな風にポケモンは使ってほしくないが、きみのやっていることは理解しているつもりだ」

怪盗マージュとナナカマド博士が何やら親しげに会話するのを、助手は2人の顔を交互に見やって首を傾げる

そして首を横に思い切り振って、ナナカマド博士の前に立ち塞がって手を広げた

「ナナカマド博士っ！ こんな奴とお知り合いなんですかっ？」

「ああ。そして、怪盗マージュこそわたしがここに来た理由だ」

助手は絶句し、ナナカマド博士の言う怪盗マージュのことを振り返り見た

「……俺はああして、俺なりに反抗し、妨害してきたつもりだった」

怪盗マージュが一步、一步とナナカマド博士達に近づぐことに帽子やマント、マスクをはずしていく

「だが、結局俺は戦っているつもりで逃げているだけだった。それどころか、俺のことを利用してこの隠ぺい工作までしゃがった」

怪盗マージュのマントが地面に落ちると、その下からすりりとした手足と黒いライダースーツが露わになった

「おかげでシンオウ地方はこの有り様。俺は自分が情けない」

怪盗マージュの帽子が地面に落ちると、それが黒髪のカツラと一体になった変装道具であることに気づけた

「奴の計画は恐らく最終段階。だが、だからこそ最高だ」

怪盗マージュのマスクが地面に落ちると、カツラの下に隠れていた目立つ白髪とマスクの下のつり目が3人のことを見据えていた

「……っ！？」

助手は初めて見た怪盗マージュの姿に驚きを隠せない

色んな説は出ていたが、こんな15〜16歳くらいの若い男の子だったなんて……巷は女の子希望が多かっただけにショックだ

「目的達成寸前で絶頂になっている奴を、そのすべてをぶち壊してやるのさ。最高だろ」

そのつり目の輝きはにぶく暗く、そして燃えている

怪盗マージュはナナカマド博士に向かって手を差し出し、声を低くして言った

「サバイバルエリアから、わざわざ約束通りにここに来てやったんだ。とつとと俺に、また力を寄越せ」

「……交換条件だ。お前に協力する代わりに、この状況そして計画、わかったすべて説明するんだ。怪盗マージュいや」

ナナカマド博士は口元に手を添え、言い直した

「パールよ」

……

222番道路、同日、早朝

そこはリッシこの傍、その手前

陽がようやく昇ってきた早朝だというのに、元氣よく戦うジェントルマンと少年がいた

「アクアジェット！」

激しい水の先制攻撃にジェントルマンのペラップが戦闘不能になり、少年の勝ちが決まった

ジェントルマンはぱちぱちと勝者に惜しみない賞賛の拍手をし、握手を求めてきたので少年はポケモンをボールに戻してから駆け寄ってそれに応じる

「お見事！ 若いとは良いですね」

「いえ、そんな、ありがとうございました」

戦いの後に世間話を親しげに交わし、遠慮するダイヤにジェントルマンが何かを渡している

それからまたやり取りをした後にダイヤは礼をして、ジェントル

マンはリッシこの方へ歩いていく

若さを羨ましがっていた彼だがまだまだ健脚なことを見送ると、ふうと少年が一息入れる

そして小脇にものを抱えたままジェントルマンと握手した右掌を広げ、何かを憂うようにそれを見て、ぐつと握った

空を見上げて朝の爽やかな空気を胸一杯に吸って、目を閉じる

木々のざわめきが耳に心地よく、またリッシこの方に顔を向けた「いつもこんなに早起きなの、ダイヤ」

優しく聞き覚えのある声に、名前を呼ばれた少年が声のした方をきよろきよろと探す

立ち並ぶ木々と茂みから、何の音も立てず静かにその人はダイヤのことを見つめていた

黒い服を身につけた、金髪の美女

「シロナ……さん！」

「無事で良かった。2週間ぶり、くらいかしら」

7話

ミオシティの図書館、正午

ここに危うい現状に立つ者が4人いた

ポケモン学・進化の権威ナナカマド博士とその助手

シンオウ地方若手最高峰のカメラマンのプラチナ

そして世間を騒がす怪盗マージユの正体、パール

「新聞できみが紙面を踊るたびに、わたしは悩んだよ。これで良かったのか、と」

「……ふん」

「ナナカマド博士っ、ですからこの怪盗マージユとどういう関係なんですか！」

助手がじたばたとあがいてみつともないので、ナナカマド博士はふーと息をついて説明することにした

プラチナは壊した扉の、ドア枠に寄りかかって興味なさそうにくびをしている

「パールくんは今から3ヶ月ほど前に、ある男から逃げ出してきたそうだ」

「逃げ出してきた？ 誰から」

ナナカマド博士、助手の言葉にパールの瞳が見開かれざりりと歯を食いしばる

「……奴のことを思うだけで、この身を、今すぐ引き裂きたいくらいだ」

その言葉に助手はぞっと背筋が凍った、まるで血に飢え腹をすかせた獣だ

ナナカマド博士はふと視線をパールから床に、そして図書館の2階へと少しずつ上げていった

「ギンガ団事件が終わった束の間……このシンオウ地方にまた何か恐ろしい企みが始まったようなことを、わたしは薄々と気づいた」

それはただの予感めいたものに過ぎず、それも水面下から決して出てくることはなかった

シンオウ各地をまわっていたプラチナでさえつかめない、それでいて彼も何かおぼろげながら不穏を感じ取るだけの不確かでもどかしいものだっただ

新聞もＴＶも気になるニュースも流れず、気のせいであればいいと思っていた矢先だった

フィールドワークの一環でズイタウンを歩いていた時、遺跡の近くの森で錯乱状態になったパールを見つけた

本当にひどい状態で、ナナカマド博士は連れていたムウマージとドンカラスの技や翼を借りてパールをズイタウンまで運んだ

「何日かして落ちついたパールから、少しずつ話を聞いた。そして、わたしが気づいていた何かが明確なものになっていったのだ」

ナナカマド博士は白ひげを撫で、厳しい表情で語る

「このシンオウ地方を、新たにつけ狙う集団に名前はない」

「ええ」

助手は素っ頓狂な声をあげると、パールが嘲笑うように言った

「ある１人の男をすべての上に置き、その為だけに動くカルト集団さ。宗主とかエースとか、信徒にそう呼ばせてる」

「ウム。彼らの教義や作法は知らんが、その男がすべてである為に集団名を必要としなかったのだ。もしギンガ団のような名があれば、もっと早くに世間的に知られるようになったかもしれん」

どんな地位や職業に就いていても、何よりも前にその男の信徒である

自らの住所を地球在住から書き始めないように、教義は下のものをすべて内包し、そのことが信徒にとって当たり前であるから意識しない

決して口にすることがないから、知らずの内に広まっていったのだそして、それがどこまで広まっているのかもわからない

何が敵で何が味方なのか、ナナカマド博士は知ってしまったが故

に動けなくなってしまった

「途方に暮れてるそのジジイなんざ放っておいて、俺は好きに動いて奴らをぶちのめしてやろと思っただけだ」

「それは危険だ、と止めた。その集団の目的をパールくんも完全に把握しておらぬ現状、下手に動くわけにはいかん。奴らがどんな手を使おうとも、それを止めるだけの十二分な力を手にするまでは決して直接対決してはいかん」

自棄になったパールを説き伏せ、ナナカマド博士はその代わりにポケモンを与えた

ドンカラス、ムウマージ、そしてヒコザル

集団もポケモンを利用する研究をしていたということで、その対抗手段は最終的には政治的な権力よりポケモンバトル的な実力が有効になるものと踏んだ

『この3体を十二分に扱いこなし、強く鍛え上げる、それまで堪えるのだ。そして、奴らが水面下より上に現れ、きみ自身が強くなった時——ミオの図書館に來なさい。わたしもそれまでに更なる力を手に入れておこう』

そう約束してから、パールはナナカマド博士の前から姿を消したそれからすぐに、怪盗マージと呼ばれ始めるものが悪事を働いだした

マージ、その名前はムウマージから……そして真珠のもじり

ナナカマド博士はパールの仕業とすぐに察したが、連絡する手段も無く、約束を守りつつ強くなる手段のひとつとして選んだことなら……と悔みながら黙ることにした

「それが怪盗マージの誕生、ですか」

助手がネクタイの結び目に手をかけ、うつんと眉間に指を当ててうなった

しかし、それでも合点がいかない

「強くなる手段なら他にいくらでもあります。何故、あんな盗みをしてかしたのか！ 社会的な弱者をいじめするような真似、許され

るわけが」

ナナカマド博士とパールを叱責するように、助手が言っのをパールが間に入らずに割って言う

「ジジイは直接対決するな、とはいったが俺は奴らが我慢ならなくてね。情報収集も兼ねて、奴らの教義・宗主様への行いってやつを妨害してたのさ」

何も知らないことをバカにするように、パールは助手に告げた

「奴らが最終的にどこに行き着くのかは知らないが、奴らはPTDという違法ドラッグで人間をポケモンに密かに変えていた。それこそ町村単位でハマらせて、人知れず集団失踪なんてこともしてかした」

助手は絶句した、そんな非人道的な話がどうしてニュースにならない

それはシンオウ地方の広大さ、雪に閉ざされ孤立し移動・連絡手段が限られる町村が多いなどの条件もあった

「何より奴らはそれをただの違法ドラッグとしてばら撒いたんじゃない。あらゆる方法で広めていたのを知ったのさ」

パールは腕を組み、つぶやくように吐き捨てた

「例えば信徒となった医師や薬剤師を使ってPTDを画期的な、最新の治療薬として医療機関に流通させる」

「は……？」

「見た目はただの薬だ。それこそPTDだの違法だの、薬に直接書いてあるわけじゃない。俺達は本当にそうなのかわからないものを、ただ資格を持つてるっただけで信用して薬を飲んでる。考えてみればおかしい話だろ」

それは医師や薬剤師、国や地方が長年培ってきた資格への信頼のなせる業だ

そこに奴らはつけ込んだ、恐ろしい話だとナナカマド博士は静かに憤慨する

しかし、飲んだらポケモンになってしまう薬なんて怪しすぎるだ

ろうと助手は反論する

「それが確かにそいつを飲めば病気は治るのさ。だから、常習性に関係なく次も飲んじまう」

べろつと舌を出し、パールは助手に意地悪く嘲笑う

「PTDは麻薬じゃねえ。人間をポケモンの姿に変える魔薬だ。

ポケモンになった患者は一時的にその苦しみや痛みから解放される。ポケモンと人間じゃ身体の構造も違うし、何よりかかる病原体が違う」

何よりポケモンは生命力が高い、ポケモンセンターに行けば一発でどんな怪我也回復するところからもうかがえる

信徒である医師から「アナタにだけ特別に与える新型の治療薬、画期的な治療法です」とでも言って患者に勧める

ポケモンに変身すること自体にまず驚くだろう、しかしそれ以上の驚きが患者を待っている

人間の病原体を持ったままポケモンになれば、その間は病気もなりをひそめてしまい溢れる生命力に完治したように錯覚する

しかし、人間に戻れば体内に残っている病原菌は再び暴れ出す

患者はその完治した錯覚を忘れられず、PTDに手を伸ばしてしまふのだ

「それからTVや雑誌に出る食べ物や新製品。特別な効能があるって紹介されりゃ、翌日にはあつという間に売り切れさ。そういうのに混ぜておけば、食った後にポケモンになる異常事態も常習性の手伝ってハマル。意志の弱い生き物だよ、ホント」

パールがウザそうに、救いきれないと肩をすくめる

「そうして薬にハマった連中は奴らの言うことを聞かざるを得なくなり、完全にポケモンになったら適当に住んでた家や街を荒らして野性に返る。街の人口は少しずつ低下、閑散としたら、それこそ後は奴らのやりたい放題。家に無理やり押し入ってPTD飲ませたりしても、騒ぎにならない完全犯罪の成立さ」

助手の顔面が青ざめ、どさつと尻餅をついてしまふ

何もかも、この世界にあるものが信用できなくなってしまういそうだった

一度飲んだら戻れなくなってしまう常習性の合わせ技

そんな恐ろしい考えを振り払うかのように頭を横に振って、パールにすぎるように聞き返した

「ま、待ってくれ。その話を聞く限り、まるでマスコミや警察いやシンオウ地方全体がグルのようじゃないか。まさか、まさかそこまで」

「その、まさかさ。奴らは随分と色んなところに食い込んで、教義に従って生きている。そういう企業や店が稼いだ金は奴らの資金源になる、俺が盗むのはそういうところさ」

尻餅をつく助手の青ざめた顔に間近に迫り、くっくくくくつと笑うと彼は泣きそうな表情を見せた

「そういう集団失踪やPTDの恐ろしさが広まらないよう、奴らに与する警察やマスコミは俺の活躍に重点的にスポットを当てさせて目を逸らさせた。俺はその為に泳がされ、奴らの掌で踊るピエロだったわけだ」

パールはへたりこむ助手の胸倉を両手でつかみ、それをぶるぶると怒りの混じった感情で震わせる

ナナカマド博士はどこまで知っていたのか、うつむき黙ってそれまでの話を聞いていた

「よー、マジジュさんよー。お前さんが隠れた義賊って話は飽きたわ。そろそろ俺も話していいかなぁ？」

空気を読まずにプラチナがごろんと床に横になり、眠そうにしている

パールが怪訝な表情でそちらを見て、パツと助手をつかんでいた手を離れた

「眠たくなる話で悪かったな。お前は手短に言え」「そうするわ」

勝手なパールの決めつけだが、プラチナは気にしない

寝転んだまま、プラチナはポケットから3つのボールを取り出す。それらの中身を一齐に出すと、パールや助手の表情が変わった。プラチナの頭上、ミオの図書館のなかを飛び回り始めた青・黄・赤色の3体のポケモン。

アグノム・ユクシー・エムリット

シンオウ地方にいとされた、人間の成り立ちに深く関わってきたといわれる幻のポケモンが3体揃っている。

「こいつらが博士の探してた更なる力、んで俺の頼まれ事さ」

にいつと笑うプラチナを、パールは驚愕の目で見降ろした。

パールはもう一度天井を見上げ、自由に飛びまわる3体を眺めて拳を握る。

この3体がいれば、何とかなるかもしれない。

「で、よ。話もついたし、力の確認も終わったところで、結局俺達はどこに行けばいいのよ？」

プラチナの疑問も尤もだ、最早地面の揺れは殆どないに等しいが、それは別の嫌な予感を思わせる。

ナナカマド博士は頷き、そしてパールの顔を見る。

「……ひどいじゃないですか、ナナカマド博士」

シヨックから立ち直り、ふらりと助手が立ちあがった。

ナナカマド博士から信頼されていると思ったのに、これだけ色々と内緒にして秘密裏に話を進めていたなんて信じられない。

そのことに罪悪感をおぼえなかったわけではない、ナナカマド博士は「すまん」と詫びた。

助手はパール、プラチナ、そして頭上の3体の希望を見上げた。

「でも、これだけの戦力があれば、何とかなるかもしれないね」

「ウム。そうだ。だから」

「だからこそ、もう一刻の猶予もならん。早く奴らを止めに行こう。そうですね、ナナカマド博士？」

ナナカマド博士の言葉を遮り、助手はその先を見事に言い当てる。面喰らったナナカマド博士は苦笑して、同じようににこっと微笑

む助手がネクタイの結び目に手をかけてから、それをしゅるつと緩めた

そして素早くポケットから取り出した何か飲み込むと助手の身体から、ぶしゅーっとガスが勢いよく噴き出した

プラチナががばつと起き上がり、立ち上がるよりも早く、そして助手はつぶやいた

「我ら、宗主様の御心のままに」

ミオの図書館の壊れた扉から、なかから真っ直ぐに爆炎が噴き出した

8話

ミオシティ、午後2時前

7時間も断続的に続いてきた異常な地震も沈静化の兆しを感じさせた、そんな矢先だった

突然、小さな振動と大きな爆音が響き渡った

バラバラバラと吹き飛んだ木片が地面に落ち、一部の木材に火がくずぶつっている

街の住人に大事に扱われてきて、地震にも負けなかったミオの図書館が無残な様相になった

「つつお、あつちい……」

プラチナは図書館の外へと自ら飛び出していたようだ、扉付近にいたのが幸いした

彼はゆっくりと立ち上がり、そのままふらふらと歩いて、自然に運河のなかに落ちていく

薄く細い煙が運河からのぼって、それからばしゃつと水音を立ててプラチナが這いあがってくる

びしょ濡れになった服を軽くはたき、ミオの図書館を眺めた

「……あー、まずいことになった」

あの爆発に確実にナナカマド博士とパールは巻き込まれただろう、脱出は恐らく間に合わなかったはずだ

プラチナはがしがしと頭をかき、それから両手を腰に当てて考えた

「げほげほつ……そこでなに突っ立っているのだ、お前というやつは」

「チツ、自分だけ都合良く脱出か。ふざけた男だ」

パールとナナカマド博士が並んで出てくると、プラチナはそちらの方に歩いていく

「無事だったか」

「ウム……彼らのおかげでな」

ナナカマド博士が上を指差すと、そこにはアグノム達が宙を泳ぐように飛んでいた

彼らのエスパーの力、いやエムリットのまもるの技でナナカマド博士は九死に一生を得たのか

パールの方はユクシーやアグノムに頼らなくても、Lvの高いポケモンを3体も連れているからどうともなるはずだ

ナナカマド博士が徐々に燃え広がっていく火を、建物のことをじっと見つめていた

研究者としてその胸中はわかる、ミオの貴重な資料が焼失していくのを止められないのは残念だろう

「……彼は、わたしが研究で行き詰った時、必ずギャグを振ってきた。笑えるものは何ひとつなかったが、いつでも2人しかない研究所を盛り上げようとしておったよ。彼の研究は実に丁寧でまとまりがあつて、非常に先が楽しみな有能な助手だった」

そんな彼が、実は信徒であり、その教義の為に宗主の邪魔となるだろうアグノム達やプラチナ達を爆弾で吹っ飛ばそうとした

いやあれはPTDでマタドガスが何かに変身しての、だいたいはつだろう

ナナカマド博士はがくつと膝を折り、その胸の上に拳を置いた
「いつからだったのか……。胸に、穴が空いたようじゃ」

助手にこの最後の時まで秘密にしておいて、本当は良かったのかもしれない

信用していなかったわけではない、すべてがわかるまで危険に・無闇な心配をさせたくないかったのだ

悔やんでも悔やみきれない、突然の喪失感がナナカマド博士の心の痛みと苦しみを麻痺させてしまっているようだ

プラチナはその胸中をはかりそこね、なんともバツの悪い思いをしていた

そして、このシンオウ地方を襲う奴らの恐ろしさを改めて理解する
とりあえず焼け石に水かもしれないが、出来る限りの消火活動を

しようとプラチナが動こうとした時だ

どんっと大気が派手に震え、瞬間的にこれまでで最大いやそれ以上の縦揺れが足元に起こった

あまりの揺れ幅に足が浮き、体勢を崩したプラチナとパールは何とか踏ん張るが姿勢を低くして堪えるしかなかった

揺れはすぐに収まったが、足の微かな震えは止まらない

「……急ぐのだ。もう、こんなことを起こさせぬように、奴らを止めるぞ」

穴の空いた胸に決意を詰め込んで立ち上がったナナカマド博士が、パールと向き合った

ふんと小さく鼻を鳴らし、パールがある方向を見遣ってあごで示した

「奴は言っていた。私に天上への道を開け、と」

シンオウ地方で最も空に近い場所、テンガンさん

そこがきつと奴らの最終目的地だ

だが高いだけではなく、もっとそれらしく、シンオウ中をここま
で震わせる何かが起こせるような場所でなければならない

ナナカマド博士はひとつだけ、テンガンさんにそんな心当たりが
あった

「やりのはしら……！ そこしかあるまい！」

3人は遙か遠方に見える、その頂を見据えた

……

6月1日

リッシこのほとり、早朝

「早起きなね」

「いつもじゃないです。旅に出る2日前からとか……今日はなん
だか寝つけなくて、それで」

夜行性のポケモンは眠りに巣へ戻り、昼行性のポケモンでもまだ

起き出すには早い時間

静かな湖畔の森陰近く、1人の美女と1人の少年が並んで歩いていた

「無事、だったんですね」

「ええ。あなたも、210番道路のぬかるみに残っていた足跡を見て、まさかと思ったんだけど」

美女が憂いの笑顔を少年に見せると、彼は面食らったような表情になる

それからリツシこの方を見て、少年がつぶやく

「……間違っていないです。僕はあそこから飛び降りました。シロナさん」

きゅつとモンスターボールを手に握り、なかを覗き込む

シロナは「そう」と小さくつぶやいた

「水タイプのポツタイシがいるから平気と目算して、無謀にも。

自分よりLvの高い野生ポケモン複数と戦うより助かるかもって…

…」

「危険な行為よ、二度としないで。ダイヤ」

少し彼女は怒っているようだったが、無理もない

きらめく水面を見て、ダイヤは続けた

「それからなんとかここまで流れ着いて、そのホテルの人達に拾われて。大して水も飲んでなかったみたいで、1日もしたら目が覚めたんだ」

ダイヤはリツシこから見えるリゾートホテルを指差した

運が良かった、本当にそうダイヤはそう思っている

歩く2人の目の前に、先程のジェントルマンが会釈してその横を通っていく

朝日にきらめくリツシこの周りを散歩するのが彼の日課で、同じホテルに泊まるダイヤとも顔馴染みなのだ

「……きみのポツタイシ、いえエンペルトもかなり強くなったわね」

先程のポケモンバトルを見ていたのだろう、シロナが言うのでダイヤはボールからエンペルトを出した

水と鋼タイプを持ったポツチャマの最終進化形、その凛々しくたくましいその姿は貫禄を備えていた

10日間でLv36の進化まで持つていくのは、相当大変なことだったろう

「ホテルの人達と沢山バトルしました。なんだかここで大湿原くらいしか見るものもなく、結構相手してくれるんです」

近場のノモセだいしげんのサファリゲームにも飽きてしまった長期滞在の観光客は、地元の人達とのバトルなどで刺激を求めているのだ

シンオウの湖畔、写真でしか見たことがなかった憧れのリツシコそれを眼下にできるホテルの広場で、ダイヤは何回も何十回も戦った

日々時間で様々な表情に変わる美しさを、その目でずっと見ることができたのに、ダイヤの心はずっと浮かなかった

「早く、強く、なりたくて……追いつきたくて」

ダイヤより背の高くなったエンペルトが、うつむくおやトレーナーの顔を覗き込む

彼にそう強く思うところがあったのだろう、シロナはエンペルトの頬をそつと撫でた

「それにこの辺ていうかナギサシティ寄りの草原は野生ポケモンのLvも結構高くて、そこでも時々……」

顔をあげて明るく言うことに努めたダイヤの言葉が不意に途切れ、何か言い淀んだ

それからダイヤはポケットから、ポケモン図鑑を開いて起動させた「……色んな野性ポケモンと出会って、図鑑も埋まってきました。けど、捕まえたり倒すことができなくなって……もしPTDでポケモンになった人かと思うと」

だから、トレーナーのいるポケモンとばかり戦ってきたのだ

それなら、その可能性がぐっと減る

ダイヤを見つめるシロナに、彼女が彼女を見上げ、真っ直ぐな目で見据えた

「シロナさん、僕は」

彼、ダイヤは運こそ悪くないがタイミングは悪いようだ

シンオウ地方全体を何時間も揺るがす謎の大地震の最初が、今の時起きた

……

213番道路、リゾートホテル、午前9時30分過ぎ

「エンペルト、こっちも頼む！」

ダイヤが地震に身体を振られながら、ガレキに手を差し込んで力を込める

呼ばれたエンペルトは大きなガレキも持ち上げて、その下敷きになっていたポケモンを救い出してからそちらに向かった

「よし、一二の三！」

一緒に力を合わせて、ガレキを持ち上げるとお嬢様がその下から姿を見せた

ガレキの隙間に入っていたからか目立った怪我もないことにほっとし、エンペルトが拾い上げ抱きかかえる

「あ、りが、と……」

「あまりしゃべらないで。これ飲んで」

ダイヤが水筒を差し出すと、お嬢様はそれを美味しそうに一口飲んだ

もう立って歩けると言うが、心配なのでダイヤは付き添って、今の避難場所まで連れていくことにする

——最初の揺れから1時間近く経過した時のこと

断続的に続く大地震に耐震強度に問題なかったホテルの建物さえ

倒壊を始め、揺れで歩くことがままならず逃げられなかった人達やポケモンが出てきた

幸い宿泊客にポケモントレーナーが多かったので、その手持ちポケモン達総勢100体以上を使つての救助作業は順調に進んだ

しかし、天変地異によつて半狂乱となつた野生ポケモン数百体ものの襲撃までは読めなかった

ダイヤやシロナ達が応戦するものの、それによつて救出及び避難状況は悪化

Lvの高いポケモンの攻撃と大地震で一部の岩盤が砕けるなど、決して少なくない数のものがそれに巻き込まれる二次三次被害が起きた

それから3時間弱・最初の大地震から4時間以上経過したが、宿泊名簿と避難所にいる人の数は未だに一致していない――

「ダイヤ、大丈夫？」

避難所だけがの手当てを手伝っていたシロナが、ダイヤに気づき声をかけた

現シンオウリーグチャンピオンという実力者である彼女は、被災者にとつて頼もしく安心感をもたらす重要な存在だった

「はい。彼女、お願いします」

「わかつたわ。……また、行くの？」

「はい。僕にできることは、全部やらないと」

もう休みなく、ダイヤはずっと救助活動の手伝いをしている

人やポケモンを助けるほかに、いざという時の為に道路の確保といった重いガレキを撤去する作業が続けている

ぐらつと大きくまた揺れ、被災者から悲鳴があがる

ダイヤが膝を折り、体勢を低くして堪えた

ガシヤングシャツパリンバキツバチチと派手な音と共にものが砕け、割れる音がする

「うわああああ」

「もおおうイヤアアア」

絶叫、阿鼻叫喚

こんな大自然の力を前にしたら、人間なんて無力だ

「っ、おい、発電機がっ」

身体を伏せたままダイヤが顔をあげると、リゾートホテルから持ち出した小さな自家発電機が壊れてしまっていた

これによって簡易式の医療キットや電灯、浄水器を動かしていたのだ

電気ポケモンもいるにはいるが、そのポケモンだって疲弊するシンオウ全体を揺るがしているという天変地異レベルの災害、復興や救助隊が来るには恐らく相当な時間もかかる

それまで電気ポケモンとの併用で皆の命を繋いでいく、大事な機械だった

「どうすんだよ、っここれじゃ」

「もうおしまいなのよおお！」

「落ち着いて！」

小さいながら皆の心を支えていた希望が、文字通り潰えてしまったのだ

その動揺を始めとした負の感情は、あっという間に広がった
追い打ちをかけるようにまた地震が起きて、避難所はパニックになる

ダイヤはその中心に立つて、呆然としていた

ポツタイシをエンペルトにして、更にそこから鍛えても……無力だ
ぐつと自分も感情があふれ出てしまいうるなるのを、顔を歪めて堪えた

「みんな落ち着きなさい、大丈夫だから」

パニックの渦中でもはつきり聞こえた優しく、力強い声
それによって皆の騒ぎが徐々に収まっていくなかを歩いて、その手をぼんとダイヤの肩に乗せるシロナ

「ダイヤ。今からあたしはナギサシティに行くわ」

「ナギサシティって……この先、西にある？」

「ええ。あそこは街全体が発電所みたいなもの。あそここの被害状況を確認して、協力を仰ぎましょう」

どのみち、このままでは限界があった
近隣の街への避難や協力を考えなければならぬ、そういう時なのだ

「あなたもついてきてくれるわね？」

「……はい！」

シロナは頷き、避難所の中心から皆に呼びかけた

「みんな、隣の人を1人だけ助け合うことに努めなさい。こんな状況下ですべてを1人の手で助けることなんてできないから、だからせめて自分と1人だけは必ず守りなさい。みんながそうして1人ずつ助け合えば、全員が助かる」

その言葉に避難所にいた被災者が、1人1人ずつ隣にいる人間と手を取り合っていく

お互いの掌のぬくもりにびっくりして、ぎゅっと強く固く握りしめ合った

「おれ達もノモセに行ってくる。シロナさんばかりに任せてはおけません」

「ポケモンの腕には自信があるわ！ 子供が頑張ってるのに大人のわたしがいつまでもそれに甘えてたら格好悪いもの」

サイキツカーとおとなのおねえさんが自ら志願し、前に出てくる
シロナはゆっくり頷き、「任せるわ」とお願いした

そして、シロナは改めて避難所の皆に言うのだ

「シンオウにいるみんな、きつと助ける。それがあたしの願いだから」

ダイヤの手を引き、シロナが避難所から離れてグライオンを出す
ナギサシティまでそう離れているわけではないが、地震や地割れが起きているかもしれないし海沿いの道だから津波も怖い

そらをとべるが使えるなら、それに越したことはないのだ

「飛ぶわよ」

「はい」

グライオンは自らの足につかまるダイヤとシロナを確認してから、
ばさつと翼をはためかせた

9 話

ナギサシティ、午後10時前

この街の道路はすべてソーラーパネルとなっていて、街そのものが発電所といっても過言ではない

グライオンで空から被害状況を見るに、立体式の道路は完全に落ちていたが建物自体に損傷は多くない

近代都市故に他の都市よりも耐震強度が飛びぬけて高いのかもしれない、これなら協力を仰げそうだ

ダイヤとシロナがそらをとぶで降りた先は、ナギサシティジム前ナギサの市長でもいいが、この状況だ

ポケモントレーナーとして有数の実力者であり、街の守護者とされるジムリーダーの方が話を付けやすいかもしれないというのがシロナの意見だった

ダイヤもその意見に賛同した

ジムの建物は未だに健在で、堂々と建っている

「行きましょう。シロナさん」

ダイヤがそう言つて扉に手をかけながら振り返り見ると、シロナは憂いの表情だった

避難所の皆を励ましていたけれど、やはり不安なのだろう
そう察し、ダイヤは率先して扉を開けてなかに入っていく

「こんにちはっ、ナギサシティのジムリーダーさんはいらつしやいますか？」

そう大声を出してダイヤはジムのなかを見る、まぶしいぐらいに室内灯が輝いている

返事がすぐに返つてこないの、避難してしまったのかと思つたら奥から声がした

「……なんですか、こんな大事な時に」

総髪の男性がひよつこりと顔を見せ、あからさまに不機嫌な表情

でダイヤのことを見た

そうだ、今はデンジという人じゃなくて違う人がジムリーダーなのだった

「お願いします。この災害で苦しんでいる人達の為に、ここの電気を少し分けてください」

ダイヤは懇願すると、ナギサ新ジムリーダーは今度は怪訝な表情を見せる

普段なら唐突過ぎるが、今は非常事態だ

きつと聞き入れてくれる、そう思っていた

「ああ。そうだな……お前が俺に勝つたらくれてやるよ」

「!？」

非常事態なのはわかっているはずなのに、とんでもないことをナギサ新ジムリーダーは言いだした

ダイヤが口を開こうとすると、それを遮って続ける

「御心を解さないお前らにくれてやる道理はないが、今この時の待機を明けてその時を迎えるまでの余興だ」

「なんだ、それ」

ずん、とまた地震がするとナギサ新ジムリーダーはそのことを喜ぶように微笑んだように見えた

「やるのか、やらないのか」

そんなナギサ新ジムリーダーがダイヤに2択を迫る、そしてもしも答えはひとつしかない

ダイヤはエンペルトを出し、ナギサ新ジムリーダーのことをにらみつけた

「やります!」

「ふん」

眉をひそめるナギサ新ジムリーダーが出したのはライボルトだ、前任と得意タイプは変わっていないらしい

エンペルトにはタイプ相性から不利、不本意ながらの初めてのジム戦……だがやるしかない

「エンペルト！ アクアジェット！」

先手必勝と、激しい水流を身にまとうてエンペルトがライボルトに突撃する

ダイヤの記憶が確かならライボルトの特性はせいでんきかひらいしん、前者ならかなり厳しい戦いになる

エンペルトがライボルトの身体を吹き飛ばしたが、まひになつていない

相手のHPはそれほど削れていないが、正確なところはわからないが両者にLv差は殆どない

「ライボルト、10まんボルト！」

ナギサ新ジムリーダーは接近戦を避けて、距離を取れる電撃を放つエンペルトが素早く動くが、放たれた電撃がその手に絡み全身に伝わり痺れさせた

激しい電撃による火花に顔を逸らしかけたが、ダイヤは臆するものかと負けじと指示をする

「アクアジェット！」

痺れを振り払うようにエンペルトは身体を震わせ、電撃の恐怖にひるまず勇敢に突っ込んでいく

中・遠距離技を専門としないダイヤのエンペルトは、こうしてタイプ一致の先制技で地道にHPを削っていつて、しおみずでとどめをさすしかない

バシツとライボルトが地面に倒れ込むが、ナギサ新ジムリーダーの号令で四肢に力を込めて立ち上がる

ダイヤとエンペルトのことを見て、ライボルトがふつと微笑んだ気がした

まるで人間みたいな表情だった気がして、ダイヤは目をこすった壁のシミといったものが人の顔に見えるような、そんな感じの気のせいだ

「ライボルト、10まんボルトを連発せよ」

ナギサ新ジムリーダーの指示にライボルトが頭を垂れるように下

げて拒否した、ように見えた

そしてダイヤに何か言いたげに、その方を見た

ゆっくりと、吠え声ではない……音の出ない口パクをしている

ポケモン語では何が言いたいのかなんてわからない、でもダイヤにはわかってしまった

『デ・ン・キ・ス・キ・ニ・モ・テ・イ・ケ、キ・ミ・ニ・ミ・ン・ナ・ヲ・マ・カ・セ・ル』

ライボルトの表情が、見覚えのある誰かに被った気がした

そうだ、ポケモンジャーナルで見た……爽やかな青年の顔だ

「ライボルト、どうしました。まさか、まだ自我が……？」

ナギサ新ジムリーダーのその言葉で、ダイヤの視界は暗転した
理解してしまった、考えたくもなかった

あのライボルトは、PTDによって……変身してしまった前任の
ナギサジムリーダー・デンジだということがわかってしまった

PTDでポケモンになってしまった人間は、モンスターボールで
捕まえられる

その事実が判明し、ダイヤは今ポケモンバトルをしていることを
忘れて頭を抱えた

『ニ・ゲ・ロ』

ライボルトが口を動かすそれは必死の抵抗、いや託そうとしてい
るのだ

天変地異のなか、自分だけではなく皆を助けようとする真っ直ぐ
な少年に……未来を託そうとしているのだ

「どうしました、挑戦者」

ナギサ新ジムリーダーがダイヤに声をかけ、ライボルトを無視し
て近づいてくる

ダイヤはエンペルトを戻し、踵を返してジムの出口に向かって走
りだした

この異常な空間から、バトルから逃げ出したかったのだ
開きつ放しの扉から出ると、グライオンを待機させたシロナが走

ってきたダイヤを身体で受け止めた

それからグライオンはすぐにそらをとび、ナギサシティの上空へと飛び上がった

ナギサ新ジムリーダーがすぐ追ってきて飛ぶ2人を見ていたが、彼が他に電気タイプを持っていてもグライオンには無効だ

ダイヤはシロナに顔をうずめ、震えていた

……

222番道路、上空

「……」

グライオンの飛行速度は少し遅いくらいだった
皆を待たせているのはわかっていて、それでも時間が欲しかったのだ

ゆつくりと避難所へ進路を取るシロナに、ようやくダイヤが口を開いた

「シロナ、さんは、全部知って……いたんですか」

「……ごめんなさい」

たった一言の謝罪、それですべてわかった

そして、ナギサジムの前での彼女が見せた表情も理解した

酷いと思った、ダイヤは何もかも吐き出したくなって下を見る

小さな余震がまた起きているのが、そらをとぶをしていてもわかった

ダイヤは、小さく、シロナに訊いた

「……この地震の原因について、何か知っていますか。もしかして、あのPTDと何か関係があるんですか」

「ええ」

シロナの即答にダイヤは顔をあげて、叫んだ

「なんでっ、なんで……」

「ごめんなさい。あたしにできることは本当に少ないの」

彼女は悲痛な表情で顔を伏せ、つぶやいた

あのナギサ新ジムリーダーの言葉が気になって、違ったらいいと思って聞いたことが……本当に繋がっていた

「じゃあ、僕が何とかします！ シロナさん、どこに行けばいいんですかつ」

ダイヤが叫んだ、震えながら目一杯叫んだ

「もう嫌だ！ 弱い自分も、苦しむ人を見るのも！ だから、だから僕が何とかする！」

「無理よ。あなたでは、きっと力が足りない」

「わかってます！」

シロナの冷静な判断にダイヤは頭を震わす程度に、横に振った

近くにいるポケモンの鳴き声と遠くからの山びこを聞き間違えて、滝へ飛びこむ大馬鹿だ

無謀と勇敢を間違えて、自分の命を粗末にするところだった

もう二度とそんな真似したくない、次はないかもしれないともわかってる

「あなたにこの事態を何とかするだけの力はない。……人ひとりが本当にことを成し得るのは持っている手の数だけ。それが精一杯なのよ」

シロナは穏やかに諭し、まだ震えているダイヤの頭をそつと撫でた
避難所で言ったシロナの言葉、助けるにしても守るにしてもことを成せる手の数は限られている

何もかも救おうとすれば助けようとすれば、それらか自分自身を取りこぼしてしまう

それ以上のことができる人はいるかもしれない、しかし今のダイヤはいっぱいいっぱいだ

自分に言い聞かせるように、何度も強く言った

「それでも行きます。そこで僕に何かひとつでもできるなら……！」

高望みであっても、やらなければ後悔する

死ぬまで後悔しても自分の命が拾えればいい、とダイヤはそう割り切ることができなかった

「勇敢な無謀。それはただの自殺行為よ」

勘違いしているのではないか、そんな風なシロナの言葉に力がこもった気がした

その言葉でダイヤは黙る

わかってくれたのだろうか、いやきつと違う

そして、彼女はそうだろうとわかっていた

ダイヤは自分のなかにうずまく想いをひとつにまとめて、ゆっくりと紡ぎだしていく

「僕にはここまで広がった事態を、どうすることもできない。でも、この事態を引き起こした奴1人を倒す。それならきつと僕にもできるっ！」

沢山の被災者を、PTDの被害者すべてに救いの手を差し出せないなら、もう二度とそういったことが起きないように元を断つ
その相手がどんなあに強大な力を持っても、エンペルトと一緒なら手の数は倍になる

きつと結果を残せる、そう信じる

それが今のダイヤにできる精一杯、成せるひとつだと思うのだ

「シロナさん、教えてください」

ダイヤの真っ直ぐな目を、シロナは見据えた

そして、彼女は空を見上げる

「……………テンガンさん」

「！」

「そこにあるやりののはしらで、何かが起きている」

超強力なポケモンの生息地、そこでことを起こせるだけの実力者がシンオウ地方全体を文字通り揺るがしているのだ

「誰かが……ダイヤのようにその相手へ立ち向かおうと動いていたみたいけど、今もそうかは、その保証はないわ」

もしかしたらもうかなわないと悟って、立ち向かう前から諦めて

逃げ出しているかもしれない

誰からも助けを期待できない状況だ、それでも行くのかと……その問いは改めて聞くまでもないことだった

「……そこまで、直接はそらをとぶでも行けない。途中から歩きよ、行ける？」

シロナが口を固く結ぶダイヤに、につこりと微笑みかける
その意味がわかり、表情を明るくする彼は力強く返事した

「はいっ！」

ダイヤの返事を聞いたシロナは、また空を見上げた

「避難所へ急ぎましょう」

シロナの指示でグライオンは全速力でわずかな距離を飛び抜ける
——ダイヤ達が着いたら、そこで待つ人達を不安と絶望に陥れるだろう

ナギサシティの協力は得られないことと、またシロナとダイヤが出かけることを伝えなければならないからだ

必死になって引き止められるかもしれない、沢山の手ですぐられるかもしれない——

ダイヤは決めていた

もしそうになったら手を振り払うのではなく、その手を包み込んで
言おう

次にここに帰ってくる時は、必ず良い報せで皆を笑顔にしてみせるから……と約束しよう

そうしたら行こう、最も空に近い場所テンガンさんに

10話

6月1日

207番道路、上空、午前11時前

シロナとダイヤを連れて超高速飛行するグライオンはその上空からテンガンさんに入り、低空で回り込むように飛んでいく

このまま飛んで山を登っていけるのは途中まで、猛吹雪のなかは流石に無理だ

それでも時間短縮で行けるところまで行く、氷4倍弱点のグライオンには無理を強いるが頑張ってもらうしかない

山の中腹より上方、それがグライオンの限界だった

積雪は深くて歩きにくく、ちらつく雪で視界良好とはいえない

シロナはドータクンとブーバーンを出し、吹雪く風除けと気温の低さを補う熱源を得る

現れる高Lvの野生ポケモン、逃げることはかりを選択する守勢では前に進めない

まだ格下のダイヤとエンペルトはそのHPもPPも惜しまず、立ち塞がる相手を倒していく

着実に経験値を増やしていき、ダイヤとシロナの持つアイテムでエンペルト達の減ったHPとPPを回復させる

いつかアイテムが尽きてしまうのではないかという不安はあったが、不思議と山頂に近づいていけばいくほど野生ポケモンの出現は減っていた

まるで山頂で何かが起きていて、それを恐れ、山を降りてきているようだった

テンガンさんの野生ポケモンまでも逃げ出すほどの何か、山頂を見つめるダイヤも吹雪とは違う肌寒さとプレッシャーを感じ始めていた

「……あそこよ」

シロナが示した洞窟のなかに入ると、ダイヤと彼女は服に付いた雪をはらった

洞窟のなかは階段のようになっていて、それが人の手が入ったものか天然のものなのかはダイヤにはわからなかった

ブーバーンの明かりで見えるその先をシロナが指差し、ダイヤはその方を見る

「この洞窟の先に、やりのはしがあるそうよ」

「……」

そらをとんでの時間短縮や動けなくなるほどの猛吹雪でもなく、野性ポケモンの出現もかなり少なかったので思った以上に早く着けた

また一番の懸念だった大地震による雪崩の発生も、テンガンさんを登り始めた頃からせいぜい震度1から2程度の揺れが数回あっただけにとどまったからか回避できた

普通に登れば3日近くかかる行程、迷わずにここまでたどり着けたことも含めて運が良すぎるくらいだといえる

それだけいつものテンガンさんとは違う、異常事態ということでもある

ダイヤがぐくりと唾を飲み込むと、シロナはしゃがんで足元を見た複数の足跡のようなものがあつた、それはダイヤ達よりも誰かが先にここを通つたことを示している

地面を見るシロナより先に、ダイヤが一步前へ出て、そのまま階段を登り始める

シロナはダイヤの背中を見上げて、目をつむって、わずかに口の端で笑う

階段を登っていると、上の方に光が見えた

ダイヤとその後続くシロナは止まらず、その光のなかをくぐり抜けた

……

やりのはしら、午後2時過ぎ

ダイヤとシロナがそこに足を踏み入れると、既に先客がいた
まず間違いない、その先客がシンオウ地方に天変地異を起こした
者達だろう

しかし、ダイヤとシロナが見たのは意外すぎる人達の後ろ姿だった
ダイヤはその声を失い、目を疑った

「……っ、パールさん、それにナナカマド博士っ？ ……あ、あ
と……？」

驚愕に満ちた声が、彼らの耳にも届いたのか振り返った

まずナナカマド博士、それから見覚えのない後ろ姿もやる気なさ
そうに頭をかきながら振り返る

「むう……っ、ダイヤくん！」

「んーあー……誰？」

「ど、どうしてこんなところに、まさか博士がっ……いやそれよ
りなんでプラチナさんがっ？」

うめくダイヤが頭を抱え、頭を横に振った

対決する相手がまさか自分の知るナナカマド博士とパールと知り、
そして憧れのプラチナがいることもダイヤの混乱を助長させる

「あれ、もしかして俺のファン？ サインは後にしてくれな」

ビシッと決めるプラチナのマイペースさがダイヤの混乱に追い打
ちし、わけもわからず自分を攻撃しそうになる

後ろにいたシロナがダイヤの肩を包み、落ち着くように言う

ナナカマド博士もまた、自分の知るダイヤと現チャンピオンのシ
ロナが現れる事態に額を押さえる

ただパールだけがその事態を無視して、その視線にあるものをず
っとにらみつけていた

離れて見える後ろ姿からでもわかるほど、何もしゃべらないパー
ルの背中から激しい感情が噴き出しているのがわかる

肩を怒らせ、虎視眈々と、獲物を食い千切ろうとする衝動を皮一
枚で抑え込んでいるような……鬼のようだった

ダイヤはパールの視線に合わせて、その先を見て見る
そこには意外なものがあつた

この場にまるで似つかわしくない、丸眼鏡をかけた撫で肩でそれ程背も高くない男だ

パールとは対象にその表情に微かな笑みを浮かべ、無言でいる

「誰……？」

本当にわからないから、そうつぶやくしかダイヤにはできなかった

……

ミオシテイ、午後2時

「やりのはしら、テンガンさん。そうか、わかった」

パールの言葉からナナカマド博士によって導かれ、判明した最終決戦の地

ナナカマド博士も頷き、プラチナに声をかけ、その身体を動かそうとした

「テンガンさんだと……？」

興味なさそうにしていたプラチナが怪訝そうな表情に、そして厭しいものに変わった

その後ろではユクシーがエスパーの力で運河の水を持ち上げ、ミオの図書館の消火活動を行っていた

「ちよつと待った。お前ら、何を言ってるのか自分でわかってんのか？」

ナナカマド博士とパールの間にずっと割り込んで、掌を突きつけるプラチナはいつになく真剣な表情だった

「テンガンさんつつたらシンオウで最大の難所って言われてる最高峰の山だ。猛吹雪に高Lvの野生ポケモン、獣道しかない山道は天然の迷路。慣れた奴でも登頂に最低2日はかけ、下手すりゃ帰ってこない奴も出る。そういうところだ」

プラチナは2人をにらむように上から下まで、その姿を見る

「まともな装備も準備もしていないど素人2人連れて登頂なんて、死に行くようなもんだ」

珍しく見せるプラチナの本気で見せる非難の眼差し、それは大自然を知る者が出せる言葉の重みだった

プラチナ1人ならいい、しかしそれ以外の命を背負うにはあまりに準備が足らなすぎる

その言葉に明らかな反発を持って、パールが踵を返す

「俺は1人でも行く。プラチナ、アグノム達は貰っていくぞ」

宙を舞う3体に指で行動を示し連れて行こうとすると、プラチナがボールを放り投げる

ボールはパールの頭上を通過して、その行く手を阻むようになからドダイトスが現れた

更にプラチナはアグノム達をボールに戻し、まとめてナナカマド博士に向かって放り投げた

元々ナナカマド博士に頼まれて手に入れたポケモンだ、プラチナに未練はない

「……そんなに俺のことが気に入らないか？」

「山舐めると死ぬって言うてるんだ。それがわからない奴は死んでいい」

たれ目とつり目の視線が交差し、その動きを止めてけん制し合うどちらもポケモントレーナーとしての実力者、ここでまともにやり合えばお互いただではすまないだろう

ナナカマド博士が2人の間に割って入り、諭した

「やめんか。こんなところで争ってどうする」

「……おいパール、どのみち今からテンガンざん行って、間に合うと思ってるのか？」

プラチナは更なる問題点をつついた

吹雪を限界まで堪えさせるかして7〜8合目くらいまで高速のそらをとぶで距離を稼ぎ、野生ポケモンとの出会いや戦闘が最小限で、余計なトラブルに遭遇することなく迷わずに山頂まで辿り着く

そんな奇跡のような、異常な登頂ができたとしても……それでもここから3時間強はかかる

今から3時間、それは大地震が起き始めてから12時間の経過を意味する

もし敵がやりのはしらで何かことを起こしている間に事故があったとしても、それだけの時間があれば必ず目的を成し得られる

少なくともプラチナなら、そうする

どんな想定外の事態があっても、12時間ですべて終えられる…

…前もって練られていた計画ならそうであって当然だ

12時間でも遅いくらいだ、計画の遂行にかかる時間は少ない方がいいのだから

そういったプラチナの言い分は尤もだった、行動を起こすのが遅すぎた

奴らは周到で静かすぎ、こうして水面下より上に出てきたのは計画の最終段階の今だけ

結果としてナナカマド博士達はすべてが後手、今からやりのはしらに行く意味が本当にあるのか

パールはゴウカザルを出し、ドダイトスと対峙し炎を見せて威嚇する

「知るか。俺はやりのはしらに行く」

「知るか。俺がさせるかよ」

言って聞かないのでぶち切れた2人のポケモンが激突し、ナナカマド博士がその争いに対し何かしようと手を伸ばした瞬間

「その役目、私が担おう」

まるで時が止まったかのように、寸前でゴウカザルの拳が止まった間に割って入った声は今までこの場にいた者のものではない、第三者のものだった

「やりのはしらに、行きたいのだろうか？」

「……っ！！」

パールがあごを上げ、何かがこみあげてくるのを震えながら堪えた

突然現れたその人にプラチナは眉をひそめ、指を差した

「誰だよ、あんた」

プラチナが差す指を押さえ、ナナカマド博士が前に出てパールと2人の行動を制した

そして、ナナカマド博士が言った

「今の言葉」

「本当だ。行きたいというなら、私が連れて行こう」

パールが拳を振り上げ、澄ました顔に一撃食らわせようとするその攻撃を平手で止めたのはプラチナで、何か勘づいたのかもしれない

「どういっつもりかは知らん。だが、連れて行って貰えるのなら遠慮はしない」

ナナカマド博士が相手のことをにらみながら、了承する

その話に乗ったことに頷いた相手が手で示すと、その背後の空間が割れた

割れた隙間から覗いた眼はパールのことを見据え、小さくうなづいたようだった

そして、その場にいた全員はやりのはしらまで一瞬で来た

……

やりのはしら、午後2時過ぎ

ダイヤのつぶやきにパールが憎々しげにつぶやくように、はつきりと声を荒げて言った

「どういっつもりだ、親父ッ！」

その言葉の意味を理解するのにダイヤは長い一瞬を要した

親父、お父さん、父親、誰の、叫んだのは誰、パール、パールの父親

「っ、は、ばパールさんのお父さんっ？」

「ああ、そうさ。こいつがシンオウ地方にPTDをばら撒いた、イカレ集団の大ボスだ！」

ダイヤが来ていたことはわかっていたのだろう、彼のつぶやきに合わせて答えを返す

それはダイヤだけに言ったのではなく、この場にいる全員に正しく認識させる為だった

誰が敵なのか、それを明確にした

「おいおい……似てねえっかいメージと合わね」

プラチナのつぶやきは最早無視され誰からの失笑も買わないが、確かにその通りだった

目の前にいる男はどう見ても冴えない男、シンオウ地方を静かに制圧した圧倒的なカリスマ性を持つ男には思えなかった

ズバツと冴えない男の背後から派手な音がした、そして大地が震えた

まるでプラチナの言葉を侮辱と受け取った誰かが、抑えた脅しをかけたようだった

そして裂けた音は何もない宙からで、そこから何かが抜け出ようとしている

物理的にあり得ない光景、更に出てきたものはもつとあり得なかった

ダイヤは図鑑を取り出して起動させ、その画面を見た
ざざざつとノイズがはしるが、そこに映し出されたものは読めな

くもない

目の前のものと画面のものを見比べて、ダイヤは目を見開いた
反転世界の王、ギラティナがそこにいた

伝説のポケモンを目の当たりにし、ダイヤの震える手からナナカマド博士は図鑑を取った

そしてナナカマド博士自身が、両者を見比べ照合する

「違う。あれはワシらの知るギラティナではない」

ポケモン図鑑を作った製作者がそう言い切ったことに、ダイヤは

後ろにいるナナカマド博士のことを見上げた

説明を求める前に、冴えない男が口を開いた

「その通り。成り替わっている」

丸眼鏡の向こうにある瞳がダイヤ達をじっと見ている、それだけなのに何故か恐ろしかった

冴えないなんてとんでもない、認識をそこで新たにした

宗主が左手を上げると、更に背後の空間を2カ所裂けて現れた巨大な影をダイヤ達は目の当たりにする

時間の神、ディアルガ

空間の神、パルキア

パール達をやりのはしらまで連れてきたパルキアが明らかに敵対心を持って咆哮をあげると、ディアルガがそれを制するように首を上下させる

ギラティナは静かに宗主の後ろについて、座して待っている

「私は時間・空間・反転世界を手中に収めた」

宗主が上げた手の方向に向かつて、三神が空を見上げる

ダイヤ達もそれにつられて、感嘆の声が漏れてしまった

「これより天上の道を行く」

その言葉が示す通りのものが、宗主の上げた手の方にあつた

やりのはしらに、天上から少しずつ薄い光の膜でできたような階段が降りてくる

「あれは……」

シロナだけがまともな言葉でつぶやきを、そこに現れた現象と存在を正しく認識した

天上からの階段を下りるような動作で降臨した、白き創造神

「……アルセウス」

11話

カンナギタウン、過去

「あたし行くわ」

そう微笑むシロナが開いた扉の前に立つと、長老は泣き崩れた
どうして、最愛の孫を差し出さなければならぬ

「奴らの力があそこまで広がっていたとは思わなかった。だから、
これはあたしのミス」

シロナが見上げ、つぶやくのを長老が首を横に振ってその足にす
がる

「行くなシロナ！ ほこらも壁画もどうでもいい、行かないでお
くれ！」

「ダメよ長老様。あたし達は遺跡を後世に伝える義務があるの」

「義務などつ、過去などいい。わたしはお前が大切なのだ……」

おおおと嗚咽する、小さな長老の背中をシロナがしゃがんでさ
する

シロナの身柄と引き換えにほこらや壁画には手を出さない、奴ら
は確かにそう言った

過去と未来を秤にかけるなど、なんと卑劣な輩か

行けば二度と戻ってこられない、それがわかっていてどうして差
し出せるのか

「頼む、シロナ……戦っておくれ。お前は現チャンピオン、シン
オウで最も強いトレーナーではないかつ」

長老は彼女の手を握り、懇願するがシロナは首を横に振った

1人で本当にことを成せるのは手の数だけ、相手の圧倒的多数の
前に守り切れない

「おおおおおおおお……っ」

「大丈夫、心配しないで」

シロナは長老を抱きしめ、優しくつぶやいた

命の保証は約束されている、奴らの言う………ことが終わるまでの辛抱だ

だから、それまで何があってもここには戻らない
もう二度と、長老に悲しい選択を迫られないように

……

やりのほしら、午後2時過ぎ

その上空に現れた、今まで見たことがない白くしなやかな身体を持つ荘厳な佇まいのポケモン

それに唯一まともな言葉を出せたのはシロナだけ、ダイヤ達の注目が一斉に彼女に集まる

「アルセウス？」

「なんだそりゃ」

「……まさか」

聞き覚えのない名前だ、そもそもそんなポケモンがいたことさえ知らなかった

ただナナカマド博士はその名前を聞いて、思い当たる心当たりがあるようだ

その手にあるポケモン図鑑を白いポケモンに向けると、それが正しく認識して画面に表示される

「アルセウス……本物なのか？」

少し興奮気味なナナカマド博士が前のめりに、ポケモン図鑑をダイヤに返しつつアルセウスのことを見上げる

その反応を見て、宗主が目は笑っていないが微笑んで言った

「それは彼女が一番よく知っているだろう」

やりのはしらに初めてザアツと風が吹き、シロナのロングドレスをはためかせた

「そうだろうシロナ、いや最初のポケモン……ミュウ」

宗主の口から出たその名前にシロナが目をつむり、それからすっ

と手でスカートをはらう仕草を見せる

その仕草が終わった時、そこにもうシロナはいなかった

いたのは淡く光る薄桃色の体色をしたポケモン、ミュウがいた
ミュウのへんしん

ダイヤの目が見開かれ、何か声に出したかったのに出なかった
気づかなかった

わかるはずもなかった

今までずっと一緒にいたのに、いやそれよりもずっと最初から…

…最初からそうだったのか

ダイヤの頭のなかでシロナとの思い出、語ったひと時が走馬灯の
ようにぐるぐると回ったがわからなかった

「私が求めていたそのものがそこにいる」

宗主のつぶやきに、三神が静かにうなり声をあげる

そしてダイヤの手にあるポケモン図鑑が初めて認識を示し、そこ
にいるのがミュウだと証明した

また彼の頭に混乱の渦が戻ってくる

「求めて……ミュウ……PTD……まさか……」

ナナカマド博士が言い淀み、宗主の顔を見る

するとパールキア素早くがパール達の背後に回り、宗主へ対する不
穏な動きを許さないと言わんばかりにけん制した

見ればパールがいつの間にかモンスターボールを握っていて、隙
を見て宗主に襲いかかるうとしていたようだ

しかし、宗主はそれらすべてを許した

「好きに話すといい、進化の権威。間違っていたら訂正しよう」

ぐぐつとナナカマド博士の手に力がこもり、そしてダイヤが何か
がわかったらしい博士の袖をつかむ

この状況に納得のいく説明、それへの最初の糸口となるものを求
めて願った

ナナカマド博士はふうと息をつき、しまいこんでいた言葉を口に
していく

「……昔からポケモン学界には決着の尽かない議題があった。それは、何故人間はここまで進化してこられたのか。何故ポケモンと共存をはかることができたのか」

ポケモンという生命体は太古より存在していた

人間と同時期、いやもつと以前からいたのかもしれない

火を噴き、岩を砕き、雷を落とす……そんな強力な力を持つポケモンと何の力を持たない人間がどうして共存できたのか

モンスターボールも言葉も知恵もまだ持ち合わせていない時、それ以前のヒトと呼ばれたか弱い猿から人間になるまでどうして進化してこられたのか

生存競争の過程によってポケモンに淘汰され、人類が発生する前に絶滅しなかったのは何故か

「……その答えが、ワシらの横にいる」

ナナカマド博士の視線の先に、ミュウがいた

ミュウはその技としてへんしんをおぼえる、すべてのポケモンに変身することができる

それが可能なのはミュウのなかに、すべてのポケモンの情報があるからに他ならない

最初のポケモンといわれるが所以、メタモンもドーブルも真似することができない完全なへんしん

そんなミュウが人間に、シロナにへんしんした事実

つまり、ミュウは人間の情報も内包しているということだ

「おいおい博士、それ……本気で言ってるのかよ」

プラチナが頭をかき目をそむけ、その事実を聞いて流石にパールも横目でナナカマド博士のことを見た

「ウム。つまり、かつては人間もポケモンだった。正確に言えば、すべてのポケモンはミュウがへんしんし、その姿を保ったまま種族として確立していったもの」

この世界に生物はたった一種しかいなかった

唯一の生物であるミュウが己の体内の情報からその身を変質、完

全なへんしんすることでポケモンと人間が同時に出現・誕生したミュウには性別はないが、性別もまた遺伝子の情報……へんしんによって繁殖に必要な性別をも作り上げたのだ

「訂正しよう。人間の基となったヒトにへんしんしたミュウのなかに何らかの欠陥を持った亜種的なものが存在し、それが原因で人間はポケモン以上に多種多様な外見を得た」

宗主の横やりにナナカマド博士は一瞬面食らい、それから小さくウムと頷いて続けた

新たに生まれてくるポケモンは♀の姿を完全に維持し続けるが、人間は♂と♀が完全に入り混じって生まれてくる

肌、髪、瞳、輪郭、声、性質と様々なものが不安定に、同じものはまたとしてない

これはヒトとなったミュウに何らかの欠陥があり、他のポケモンと同じように完全な維持ができなくなってしまったのだろう

しかし、それだけだ

根本は変わらない

「つまり、PTDは……人間がポケモン的一种であることを思い出させ、体内に眠るポケモンの情報呼び覚ますきっかけのようなもの」

ドーブルのように、すべてのポケモンがへんしんを使わせればそれが可能なのは……基がミュウであって体内にはその名残であるすべての情報が眠っているからだ

PTDによる変身に特撮のような筋肉や骨格が突き破る・盛り上がるなどの派手なアクションがなかったのは、文字通りポケモンのへんしんに近かったからだ

閉ざされた脳のブラックボックス、休眠遺伝子を目覚めさせ、働きかけることで人間をへんしん・回帰させる一種の遺伝子治療薬

人間がポケモンであることは自然のこと、だから一度回帰したものは理性ではなく本能でPTDを常習してしまうのだ

「そうだ。それ故に解毒方法なんて存在しない」

ひと粒1回でも飲めば、開かれた遺伝子と本能の目覚めは進行し、いつかは必ずポケモンになってしまう

宗主のその言葉は皆をうちのめす決定打となった

自らも導いてきた結論にうめくナナカマド博士は額を押さえ、目まいに似たものをおぼえた

「よもやそんな薬を、実際に作り出しておるとは……」

ナナカマド博士でさえ知らない裏の研究世界と成果、倫理観に縛られない方が確かに発見やその応用が多く見つけらるのかもしれない戦争による軍事兵器の開発が、後々の技術発展に貢献するなどいう……皮肉な話もある

「流石はナナカマド博士、といったところか」

宗主はわずかに微笑み、少し小首を傾げてこれまでの推論を裏付けるように賞賛する

パールもそこまでは知らなかったようで、ナナカマド博士と宗主のやり取りには聞き耳を立てていた

だが、最大の疑問はまだ残っている

「そうやってPTDで人間をポケモンに変えてどうする。目的は何だ」

ナナカマド博士でも推測できない、出せない答えを宗主に問いかける

「すべてをあるべき姿にする^{もの}」

たった一言で、宗主は己の目的をすべて話した

しかし、ダイヤ達には伝わらない

それに先程やりのはしらに光臨したアルセウスは上空に佇み続けたまま、動かない

逃げも隠れも戦いもしないのはどうしたのか、とダイヤが思うことをプラチナが察する

「あの三神だろーさ。よくわかんねえ力で押さえつけてんだろ」

「そんなことできるんですか。というか、なんであの三神はあの宗主って奴に従っているんだらう……？」

見たところ捕獲されているわけでもない、気位の高い伝説のポケモンがおやトレーナーでもない人間の言うことなど聞くはずもないその答えはパールが背後のパールキアを後ろ目で見てから、吐き捨てた

「成り替わったと言っていた。恐らくあの三神は奴の側近がPTDによって変身した姿だ」

本来の三神はPTDによって変身した側近達に倒された、その時の三神同士の争いがシンオウ地方全体を9時間近く揺るがした天変地異の正体だろう

それぞれの世界に1体ずつしかいないはずの神と呼ばれるポケモン、その激突ならあり得ない話ではない

その話が本当なら、あの三神は捕獲されなくても宗主の言うことを聞く忠実なしもべに等しい

そういえばパールキアがずっとパールのことを意識、いや敵対の視線を向けていることに気がついた

まだ人間としての意識があるのだろう、そういった感情が色濃く見える気がする

宗主は吐き捨てたパールの言葉を肯定し、付け加えた

「その通りだ。彼らには今後、それぞれの世界の主として、そこを守り続けることを許した。悠久の時をただ独り。それが三神にとつてあるべき姿だからだ」

これまで忠誠と教義を頑なに守り続け、従ってきた側近達を容赦なく突き放すものと同じだ

それも側近達が自ら選んだことなのだとしても、残酷な話だった
「そして」

宗主がどこからともなくモンスターボール、いやマスターボールを取り出した

それは世界でも数えるほどしか生産されていない、どんなポケモンでも100%捕獲できるという貴重なアイテム

シンオウ地方全域を静かに制した宗主のことだ、社会的地位の高

い信徒から献上品といった形で得た可能性が高い

「っ！」

ナナカマド博士とパールが察し、それを阻止しようと身体を動かした瞬間だ

形態を変えたギラティナがその長い巨体を使って2人の行方を阻み、パルキアまでも押さえ込んでその首を振った気がした

「あるべきものはあるべきところへ」

ヒュンと軽やかに上空に向かって投げられたマスターボールが、静かにアルセウスをそのなかに吸いこんでいく

HPが満タンであろうと、いかに強大な力を持ったポケモンだろうと……逃れるすべはない

宙で停止していたマスターボールがゆっくりと地に落ち、宗主はそれを拾い上げた

「アルセウスは私の下にあるべきなのだ」

ぐつとナナカマド博士が首から姿勢を後ろに下げ、苦々しい表情になる

最悪の事態、止められなかったことを悔やむ

アルセウスはシンオウの神話にも確かな記述は残されていない、ミユウ以上に未知数なポケモンだ

このまま渡していいポケモンではないことは明白だが、今は三神ににらまれて動けない

「……アルセウスには創造の力があるそうだ」

宗主がマスターボールを手をなかで転がし、ナナカマド博士に言った

「目的は何だと聞いたな。私はすべてをあるべき姿にする^{もの}」

側近達と三神が成り替わったという異常事態にアルセウスを呼び出させ、その後はそれぞれの世界で主を務めるように……すべてをあるべきものにする

「すべての人間をポケモンに回帰させ、私が始まりの人間となる。それこそが、世界のあるべき姿。そうだろう？」

宗主に賛同を示すように、三神が同時に咆哮をあげた

エース……それは宗主であり第一人者、Adam、Arcusを表す

PTDによつてすべての人間はあるべきポケモンの一種、ポケモンそのものとなり野性へ返る

宗主が唯一の人間としてこの世界に残り、人類の新たな始祖となる
それこそ宗主が求め起こそうとすること、すべてをあるべきものにする……その意味だった

真意を知り、三神に囲まれたままのダイヤ達が絶句する

そんななかでパールだけはこの状況に臆さず、宗主に対して下品に吐き捨てた

「Asshole!!（見下げ果てた阿呆が）」

12話

やりのはしら、午後2時30分

ダイヤ達が置かれている状況は最悪だった

三神に取り囲まれ、アルセウスは宗主の手に落ちた

最初のポケモンとされるミュウがダイヤ達側にいるが、これまでの間ずっと傍観している

果たしてミュウを戦力として期待していいものか、つかみかねていた

しかし、まだ宗主達も知らないアドバンテージがダイヤ達にはあった

「下品な言葉をおぼえたものだな、パール。私の血を継ぐものとして、それはよくない」

「黙れ、下種野郎」

怒りでわなわなと身体を震わせ、自らの右手で左肘に爪立てるパールの暴言が止まらない

堪えかねたパールキアが叫び、パールに襲いかかろうとするのを再びギラティナが間にその身体できつくぶつかって止めた

ナナカマド博士はその機を逃さなかった

バツと宙にボールを3つ投げ、そのなかにいるポケモン達を解放した

不意打ち、唐突に放たれた力にパールキアとギラティナが左右に分かれて吹き飛んだ

更にこの状況を少しでも好転させようとダイヤ、パール、プラチナもそれぞれエンペルト、ゴウカザル、ドダイトスを出す

宗主はその吹き飛ばされた2体に見向きすることなく、傍らのデリアルガが頭を下げ臨戦態勢を取ってそのポケモン達に対して身構えた

「ほう。アグノム、ユクシー、エムリットか」

それぞれ意思・知識・感情を司る神とされるポケモン

その存在を宗主が知らないわけがない、だがこう相對するとは思わなかったことだろう

「人間にしか影響を及ぼせなかった三神で、時間・空間・反転の三神と創造の神に挑むか……」

愚行だ、と言っているように聞こえた

パルキアとギラティナが起き上がり、ディアルガと共に圧倒的なプレッシャーを放つ

びりびりと大気が震え、身体の上に重いものがのしかかって来るようで、本当に息ができなくなってしまいそうだった

そんな空間のなかで対峙する4人のなかで、宗主が1人に目を付けた

「きみはどうしてここにいる？」

宗主の言葉は他でもない、ダイヤに向けられていた

思いのほか優しく、諭すような声でダイヤは戸惑いいや不思議な気持ちになった

「ささいな感情のささくれを制御しきれずにここに立つもの、この土地を愛する研究者としての自負と知識欲をかいて戻れなくなつたもの、場の流れと己が意志に逆らわぬ愚かもの」

パールのゴウカザルが低くうなり、せつかちに今にも襲いかかりそうだった

だが、そうしないのは宗主の後ろに控える三神との実力差をはかったパールが抑えているからに他ならない

ゴウカザル以上の荒ぶる感情を抑え、紙一重のところで堪えている……確実に宗主の喉元を食い千切ろうと狙う復讐者の目だ

これをささいな感情のささくれ、と言い切つた宗主はダイヤに問い続ける

「きみには、そうして私と戦う理由がない」

「……！」

ダイヤの脳裏に浮かぶのはリッシこのほとり、避難所の人達だ

それを見透かしたように、宗主が微笑いや嘲笑った

「少し見知った人達の為に戦う。感傷に酔い、他人の為に命を捨てる行為に身を投じる……最も愚かしいよ。きみはシンオウの代表にでもなつたつもりかな」

宗主の視線がダイヤを射抜く

パールも、ナナカマド博士も、プラチナも自身のなかからくる揺るがない何かを持って宗主と対峙している

しかし、ダイヤだけがそれがない

あるとすれば周囲の惨状に耐えきれなくなった、自身の救済

それはここに立つ理由にはならない、ナナカマド博士と比べればダイヤとシンオウ地方との繋がりはかなり薄い

断つたところで思う以上に傷も罪悪感も浅い、そうでなくとも逃れ方なら他にいくらでもある

宗主が胸ポケットから巾着を手にし、ダイヤに向かって投げたものが地面に落ちた

「PTDを受け入れることを許そう。誰も責めたりはしない。それがきみのあるべきものだ」

その言葉に導かれるようにダイヤが一步二歩前に出て、巾着袋を手拾い上げた

巾着袋を見て、軽く握りしめる

「……ここにいる理由なら、あります」

ダイヤは少し振り返って、ミュウのことを見た

「シロナさん、いえミュウにも言われました」

……

リツシこのほとり、10時40分

避難所にいた人達につらい言葉を受け入れさせ、テンガンさんへ向かう前のこと

そらをとぶの前にダイヤが靴紐を結び直している時、シロナが後

るから声をかけた

「ダイヤ。……あなたはやはり、やりのはしらに行くべきではない」

シロナは目を伏せ、続ける

「確かにあたしはあなたに真実を示唆し、伝えたわ。でも、それはあなたを戦いに巻き込む為じゃない」

ダイヤの靴紐を結ぶ手が止まり、シロナの言うことに静かに耳を傾ける

「酷い言い方だけど、あなたに声をかけたのはほんの気まぐれ。

そして、誰でもいい。真実に気づいてほしかった、のかもしれない」

「……」

「やりのはしらに行ったところで、PTDによって変身してしまった人達を救う方法が見つかるとも限らない」

シロナは首を横に振り、ダイヤに正直に伝える

「今なら遠くの地方に逃げることも、まだできる。あなたの、本当の家に帰せるのよ」

ダイヤが靴紐から目を離し、ふっと空を見上げた

あの空は彼の故郷であるカントー地方にも繋がっていて、そらをとぶで行ける

ゆつくりとダイヤはシロナとも故郷とも違う方、テンガンざんが見える方を向いた

「……僕はテンガンざんに行きたい」

グライオンとシロナは黙って、彼の続く言葉を待つ

「シロナさんの話を聞いて、確証はないけど、きっとそこにいると思う人がいるから」

ダイヤは自らの胸の上に掌を置いて、軽く握りしめる

たった一度きりの出会い、そしてPTDや現状に対して自分以上に何か深い感情を抱いていた

だから、きつと今、自分と同じようにテンガンざんを目指す……
そう思うのだ

「その人の為に……あなたは行くの？」

それでは今と何も変わらない、そんなシロナのつぶやきにダイヤがはつと力なく笑った

「そうでもないんです。すごく自分勝手な理由、だと思います」

ダイヤ自身も困惑していたけれど、今では随分と落ち着いたという「初めて会った時から、ずっと」

憧れのブラチナが撮った美しい写真を見た時よりも、ポツチャマと図鑑を手にした時よりも、これまでにない胸の高鳴りをおぼえた正気を疑いもした、けれどこの感情に偽りがなければ……それを貫こうと心に決めた

「報われなくても、届かなくても……行って、その力にならなくちゃと思うんです」

だから、早く強くなりたかった

今まで会ったなかで一番強いその人に追いついて、並んで歩いていきたかったから

……

ダイヤは巾着袋を手にしたまま、パールのことを振り返り見たまともな出会いでもなく、あれだけの会話しかしていないのに……ダイヤはあの時からまいってしまった

「僕がここにいるのは、パールが好きだから」

たとえ同性であっても、異性のシロナと出会った時にもなかった

感情

「気持ち悪いことと言ってごめん、同じ男同士なのに、でも……嘘じゃないから」

真っ直ぐな瞳で、ダイヤはパールのことを見て照れ臭そうに笑った異性よりも他の誰よりも魅力的で、一目で惚れてしまった

そんな唐突な愛の告白に、流石のパールも返す言葉が見つからなかった

相手の気持ちも知らないで、ここに立つ自分勝手なダイヤの行為に宗主は愉快そうに笑った

「報われないな、きみは」

『それは大丈夫』

キインと耳に直接響くような、空気の振動で伝わる誰かの声
ふわりと浮かぶミュウはダイヤのことを見て、それからパールの肩に手を置いた

「……こんな状況で、呆れたバカだな」

うんざりし、あれだけ沸いて出ていた怒気がすっかり抜けているように見えた

いや、それでも何かに対してイラついているようにも見える

困ったようなすがらようなダイヤの目に、パールはその身を震わせて小さく小さく吐き捨てた

「胸なくて悪かったな」

変わらずパールの肩に手を置いて浮かぶミュウ、そしてダイヤは頭を極大の撞木で打たれたような衝撃に見舞われた

開いた口が塞がらず、それから自分のしでかした最大級に失礼な勘違いに顔を真っ赤にする

プラチナはあさつての方向を見て、ナナカマド博士は目を伏せた
三神は咆哮をあげ、パールは未だに身体の震えが止まらず……その表情を青くさせながらつぶやいた

「……お前の言う通り、男なら良かったよ」

その言葉の意味をとらえかね、ダイヤが開いた口から声を出そうとすると宗主が割って入った

「それは報われない、と言っただろう」

パールの表情が歪み、自らを抱くように腕を組んで爪を立てた

「私は人類の新たに始祖になる。そして、子孫を成す。それはこれまでの人類と同じであってはならない。決してふたつとて分かつ

てはならない」

髪や目の色、輪郭から何まで宗主そのものが続いていくポケモンのような完全な一種族無二の血統

「パールは私の娘だ。そしてアダムの花嫁、イヴだ」

その後が続く宗主の言葉は、これまでで一番理解し難く破壊力のあるものだっただ

娘であるパールが宗主を、その周囲をこれ以上なく憎む理由

——過去の言動にある「この身を、今すぐ引き裂いてやりたいくらいだ」

3か月より前、奴から逃げ出し、錯乱した状態でナナカマド博士に助けられる

あまいみつと花畑で有名なソノオタウンで起きる吐き気

ダイヤとの出会いでの「野郎は信用できない」——

宗主は震えるパールの青い顔、無い胸、細い腹を順に見てことなげに言った

「腹に私の子を宿している。3ヶ月は過ぎているというのに、まだ目立たないな。パールは細いから、もう少しすればわかりやすくなるか。お前は優しい子だから、命を殺す選択肢はきつとできないからね」

まるで普通の父親のように、愛しいような楽しみにするような目と声で宗主はつぶやく

それにディアルガは目をつむりうやうやしく頭を下げ、ギラティナは動かず、パルキアだけがパールを嫉ましそくにいらんでいた
ナナカマド博士とプラチナは何も言わず、宗主ともパールとも目を向けられなかった

ぐしゃつと巾着袋を握り潰すダイヤの目には、強い光が宿っていた
ぶんと乱暴にPTDを遠くに投げ捨て、宗主の前で静かに叫ぶ

「たった今、あなたと戦う理由ができました」

「そのようだ」

13話

パールが腹を隠すようにつかみ、押さえた

彼いや彼女をここまで激情に、憎悪に身を焼いた理由

思えば怪盗マージユが活躍できたのも、民衆の目からその本質と
宗主の企みから目を逸らすだけではない

PTDの流通と拡散はその目的達成には重要なこと、それを妨害
する彼女を何故放置したのか

理由のひとつに、パールの妨害が無意味なほどPTDの普及が早
かったこと

更にあえてパールの好きにさせることで怒りの矛先を作らせ、発
散させることで下手な自棄を起こさせないようにすること

パール自身とその身に宿っている宗主の血統を傷つけないように
する為に、怪盗マージユの逮捕を極力制限させていたからだ

時には怪盗マージユがことを起こしやすいよう、何らかの形で補
助することもある

まさにパールは狭い籠から逃げ出した先が、そこよりは広い飼育
小屋のなかだった鳥のような存在

「何度も死ぬことを考えた。だが、ただで死ぬ気にはなれんっ！
その為にこれまで堪えて、生きてきたんだからな……！」

パールの悲痛そして怒気に満ちた叫びだが、宗主には届かない
宗主はダイヤの目も、パールの声も意に介さず……今度はミュウ
に向かって語りかける

「ミュウ。お前がこの場にいることも天の導きだ。許そう、私と
共に来ることを」

『……』

「お前なら、更に確実に私を残し続けられる」

最初のポケモン、ミュウだけに可能な完全なへんしん

「かつての始祖がしたように、お前も人間になるといい。シロナ

ではなく、この私に」

ポケモンが♀の種族を完全に維持し続けられるならば、すべてのポケモンの基となったミュウの完全なへんしんで宗主という人間を種族として確立することは確かに可能だろう

パールよりも確実とわかれば、宗主はそちらを選ぶ

ミュウはパールから離れ、ふわりとその頭上から1mほど浮いたところで宗主を見下ろす

エスパーの力で、空気を振動させることで自らの声として伝え始める

『始祖が何を考えてミュウという種族や個体を捨て、今の人間をはじめとするポケモンとなったのかは理解できません。きっとこれからも、ずっと』

各地に神話を残すような伝説のポケモンや目の前のアルセウスも、かつてはミュウという種族だったのかもしれない

完全なへんしんでミュウであることを捨て、すべての生き物の始まりとなったのは或いは婉曲した種の保存であるのかもしれない
現在に生きるミュウも遥か太古から生き永らえた個体ではない、性別不明とされながら他の生き物と同じように続いた子孫

『私がわずかな間でも、人間になったのは——』

……

215 番道路

私の目の前に、

苦しむ人間がいた

既に手遅れだった人間の身体の中かで、

本能にかき消されつつある残りわずかな理性を使って、

私という存在がもうその目に見えなくても、

私という存在を感じ取った人間が、

私という存在を誰と間違えたのか、

私という存在に何を期待したのか、
か細い声でうったえるようにつぶやいた

『お願い。シンオウのみんなを……助けて。シンオウのみんなに、
知らせて……』

最後の自我が消えるまで、

自分ではなく他人へ向けて懇願した

人間という種族のなかで、

代え難いたった1人しかない自分を顧みず、

自分よりも1人以上も多い他人の為に何故なのか

きまぐれに、

私はその人間を写し取った

容姿はそのままに言動も真似て、

様々な他の個体と接触を試みた

それでも理解し難かった

自分という個体を優先し、

その遺伝子を優先的に子々孫々と後世に遺していく

生物としての種の保存という行動から大きく外れたその人間の懇

願は、

未だに不可解な点多すぎるままだ

……

『生物は利己的であるべきだ。最後は己を優先するのが自然なこ
と』

ミュウが宙からダイヤより前に、宗主に程近い位置の地面に降り
立った

『その点で言えばあなたという個体はそれに忠実で、ポケモンと
してはとても好感が持てる』

尻尾を揺らし、ミュウは宗主に一步近づいた

モンスターボールがあれば、充分その射程距離内にある

そして、宗主はどこからかまたマスターボールを取り出した
ダイヤがミュウの背中をつかもうと手を伸ばすが、わずかな距離
が届かない

他の誰もが同じように動けない、見えない何かに阻まれているよ
うだ

それはミュウの意思に感じられた

宗主がマスターボールを山なりに放ると、それを目で追うことな
くミュウは言った

『けれども、今の私という存在にはあなたは受け入れがたい』

近づくマスターボールが反応を示し、ミュウをその対象に選んだ

『だから、私はポケモンのミュウとしてではなく』

開きかけたマスターボールをその手で受け止め、宗主にそれを差
し出した

「人間のシロナとして、あなたを止めます」

再びミュウはシロナとなって、そこにいた

宗主にマスターボールをさっと手渡してから踵を返し、ダイヤの
横をすり抜ける

何か言おうとして振り返るダイヤに対して、彼女はウィンクしな
がら自らの口元に人差し指を当てた

そのチャームिंगな仕草に顔を明るくするダイヤだが、バキンと
いう音でまた振り返らざるを得なくなる

ミュウから手渡されたマスターボールをその掌から滑り落とし、
踏み潰した宗主の姿があつた

「良い。許そう」

宗主の背後にいる三神が騒ぎだすと、それにやりのはしらが共鳴
するように震えだす

「これより終わりの始まりを、いや始まりの終わりを告げる」

高く掲げた宗主の手のなかに、アルセウスの入ったマスターボ
ールがある

開閉スイッチを押すと、開いたボールの隙間から光が陽光のよう

に溢れだした

「創造の時だ。アルセウス」

細くしなやかな四肢を持った、白と金色の荘厳なポケモン

やりのはしら上空にまだ残っていた光の階段が色めき、そのグラ
デーションは音無き合奏に見えた

「させるかつ！」

「やらせるか」

「させないっ」

パール、プラチナ、ダイヤのやる気満々のゴウカザル、緩慢だが
力強くドダイトス、果敢にエンペルトが宙に留まるアルセウス目指
して突撃する

それらを阻もうとする三神、その大気ごと押し潰してくるような
強大なプレッシャーに3体の動きが止まりかける

「アグノム、ユクシー、エムリット！」

世界の三神の前にトライアングル隊形で障壁を張り、押し返すの
はナナカマド博士が指揮する湖の三神だった

しかし、世界の三神の力と身体は湖の三神の障壁を打ち破っても
なお勢い衰えず迫りくる

「ブラッキー、メガヤンマ、ドータクン、グライオン、ブーバー
ン！」

障壁を破った三神を更なるチームワークで止めたのはシロナの持
つポケモン5体、完全に勢いが止まってダイヤ達のポケモンは無事
だった

「ここはあたし達で止める。ダイヤ、あなた達はアルセウスを」

「……シロナさん、いやミュウ……あなたの使うポケモンは」
ダイヤが口にしようにとし、やめた

全速力で宗主のもとへ走り抜けるパールに気づいて視線をそちら
に、気を取られたダイヤをばしっとプラチナに背中を叩かれて、ダ
イヤも走りだした

シロナはそれを見送り、ナナカマド博士の横に立って三神を見上

げた

三神がダイヤ達を追うことがないのは、先に湖の三神・ミュウとその手持ちいう厄介な邪魔者を始末するべきと一致団結したのだろう

「……ミュウよ、お前は」

ナナカマド博士も気づき、その傍らで戦闘態勢な5体のポケモンを見た

そのポケモン達に、かつての面影を見た

ブラッキーのシロナ

メガヤンマのリョウ

ドータクンのゴヨウ

グライオンのキクノ

ブーバーンのオーバ

シンオウ地方に名を馳せたチャンピオンと四天王の、PTDによって変身した姿

どんな経緯があつて、彼女らがその姿となったのかは想像に難くない

それは直接話したことはないナナカマド博士の私見であり、実際のところはわからない

だが、今ディアルガ・パルキア・ギラティナに怯むことも臆することもなく立ち向かう姿勢を見せている

それだけで、充分に思えた

頼もしく、申し訳なく、誇らしく、やるせなく……ナナカマド博士の心は複雑な感情で満たされていた

願わくばこの決戦の結末に救いがあることを、天に望んだ

14話

やりのはしら、午後3時

揃う出演者と場所は新たなシンオウ地方の神話として刻まれるに相応しい、世紀の決戦だった

時間の神ディアルガ、空間の神パルキア、反転世界の王ギラティナ対するは進化の権威ナナカマド博士と現チャンピオンのシロナであり最初のポケモンのミユウ

ナナカマド博士が持つのはアゲノム、ユクシー、エムリット……かつてディアルガとパルキアを抑えた逸話のある湖の三神

「また来るか！」

激しい攻防のなかで三神の初動を見て、ナナカマド博士がシロナに注意を促す

ギラティナがこの場から消え、パルキアが左腕を振り上げ、ディアルガが咆哮をあげる

シロナは自分達とナナカマド博士の前にドータクンを置いて、てつべきの補助を加えて耐えさせることを試みる

1度目は技が外れ、またまもるやみきりによってかるうじて避けられた

だが、戦いの激化でナナカマド博士達がそういった回避技を使いつくしてしまったことを三神は数え間違えなかった

そして2度目となる、三神が使う最大にして最強の固有技

ギラティナのシャドーダンプ、パルキアのあくうせつだん、ディアルガのときのほうこうが惜しみなく放たれる

たとえでも硬いドータクンでも、この合わせ技をトレーナーごと守らせるには無理がある

防ぎきれなかった技の余波がナナカマド博士やシロナ達を焼き、体重の軽いものから後方へ吹き飛ばされていく

多大なエネルギーの残滓が晴れた時、仰向けに倒れるナナカマド

博士のスーツはぼろぼろに息も上がっていた

いちトレーナーであつた時もあつたが、年老いた身ではこの決戦は相当厳しいものだ

ぐぐつと肘をついて、震える身体を奮い立たせて起き上がるナナカマド博士をシロナが支える

「……つアグノム、シャドーボール。ユクシー、あくび。エムリット、まねっこ！」

寄る年波で言うことのきかなくなってきた身体がどれだけ傷つこうとも、その目は死んでいなかった

老体に宿る老獪さは、成り立ての若い三神に負けることはない最強の固有技を放つた直後を狙い、ナナカマド博士の指示で湖の

三神が動く

ときのほうこうで動けなくなったディアルガにあくび、ギラティナに弱点タイプのシャドーボール、エムリットはパルキアに同質同威力のまま技を返した

思わぬ返しに三神がよろけたところに、シロナのポケモン達が一気に攻め落とそうと走る

それを許すまいとパルキアが足を踏み出し、他の水ポケモンとは比較にならない程のハイドロポンプを放つ

更にギラティナがはどうだんで追い打ちをかけ、ナナカマド博士とシロナ達がいた場所・やりのはしらの一部が吹き飛んだ

……

やりのはしら、午後3時前

そこは今、二つに分かったようだ

ダイヤの背後にせり上がる壁、アルセウスの力だろうか

ナナカマド博士とシロナを三神と戦わせる構図のまま、完全に分断された

だが、そうやって振り返っている余裕はない

目の前にいる宗主、その男がダイヤ達3人3体を見つめている
パールが先手必勝とゴウカザルにマツハパンチを、ダイヤもエン
ペルトにアクアジェットを指示する

トレーナーの想いがポケモンにも伝わっているのか、ゴウカザル
の勢いは凄まじいものがあつた

溜まりに溜まった宗主へ対する負の激情が堰を切り、その奔流は
止まるわけがない

勿論エンペルトもそれに負けてはいない、許せない敵として宗主
を見るダイヤのなかに怒りが再燃してくる

「！」

ゴウカザルの攻撃目標がアルセウスではなく、宗主めがけている
ことにプラチナが気づく

それにつられて、エンペルトも宗主に突撃を……おやトレーナー
のダイヤは止めようとしていない

「許そう」

音速の拳と激流の突進を前にしても宗主は動じず、空を仰ぎ見る
「アルセウス、さばきのつぶて」

宙に留まるアルセウスの周囲に、小さなエネルギーの塊が無数に
散らばる

それらは流星のようにやりのはしらに降り注ぎ、広範囲に及ぶ攻
撃がゴウカザルとエンペルトを撃墜する

「バカ野郎っ」

どすんどすと遅れて駆けるドダイトスがうおーんと吠え、プラ
チナが叫ぶ

「タネばくだん！」

アルセウスのさばきのつぶて、降り注ぐ攻撃にドダイトスが地上
からタネばくだんを連射して相殺していく

ドダイトスのタネばくだんでさえ追いつかない、撃ち落とすけれ
ないエネルギー弾がやりのはしらをえぐった

「……っ！ エンペル」

さばきのつぶてを食らい、地に伏すゴウカザルとエンペルトにダイヤが駆け寄る

そのダイヤの服の襟をからつかんだプラチナが、思い切り後ろに引き倒した

ずしゃつと派手な音を立てダイヤが起き上がろうとすると、その上にプラチナが立って胸ぐらをつかんだ

「お前、自分のポケモン殺す気か」

「っう」

「怒りを力に変えるのはいい。俺もあの野郎は気に食わねえ。だけどよ、見るべきモン間違えんじゃねーぞ」

ぱつとすぐに手を離され、ダイヤはごちんと地面に頭を打った

「後から気づいても遅えんだ。まずは自分にできることを考えて、よく周りを見とけ」

プラチナは頭をがしがしとかきながら、パールを見る

もう既にゴウカザルを切り捨てたのか、続けてムウマーシとドンカラスを出していた

ダイヤはエンペルトに駆け寄り、状態を見る

あれだけの攻撃を受けたのに、ダメージはそれほど深刻ではない
ちらりとゴウカザルの方を見ると、エンペルト以上のダメージを負っている

この差は……先程の技のタイプ相性によるものだろうか

パールも少し頭が冷えたのか、攻撃対象を宗主からアルセウスにして指示を出す

「ドンカラス、あくのはどう！ ムウマーシ、サイコキネシス！」

中・遠距離から攻撃を仕掛けると、宗主はアルセウスに再び語りかける

「アルセウス、さばきのつぶて」

同じ技の指示、しかしその初動が違った

アルセウスの身体から突然十数個ものの何かが飛び出し、自身を中心に廻り始めた

その内のひとつがアルセウスのなかに再び戻ると、一瞬でその白い身体と金色の飾りが冷たさを感じ取れる水色に変化した

それから放たれたさばきのつぶてはやはり圧倒的な数と量でドンカラスとムウマージを吹き飛ばし、地面へと叩きつけた

今度は範囲を狭めた分、ドンカラスとムウマージに命中した数が多かったように見える

「っ！」

恐ろしい程の破壊力にダイヤは息を呑み、それからパールのポケモンに目を向けた

そして、気づく

ドンカラスとムウマージ、その両者のダメージ量が違う

タイプ相性、その組み合わせやLvが違えばそれは当然だ

しかし、ドンカラスは明らかにムウマージよりも多大なダメージを受けている

どうやら効果抜群のタイプ技を受けたようだが、それではおかしいさばきのつぶてという技が同じなら、そのタイプも同じのはずだが、エンペルトとゴウカザルの時の攻撃命中数・Lv差・ダメージ量を比較検討すれば、恐らくノーマル技のはずだった

それなのに2度目のその技は、ゴーストタイプのムウマージにも命中した上にドンカラスには効果は抜群ときた

そうだ、これではまるでタイプ相性において有利なものに変化させたようだ

沢山あるポケモンの技のなかでも、タイプ変化する技なんてめざめるパワーやウェザーボールくらいなものだ

しかし前者は個体ごとに発現タイプが違うだけで変化はせず、後者は天候に左右されるもので自発的なものではない

「（ありえるとしたら、アルセウスの……さっきの行動）」

今もアルセウスの身体を中心に廻る、体内に戻ったものを含めて16個の物体

あれがもしさばきのつぶてという技のタイプを変化させていると

したら、事実上すべてのポケモンに対し効果抜群を狙うことができるそれはとんでもないことだ、まさに万能の能力といっても過言ではない

アルセウスの脅威を体感しつつも、パールがまだ体力の残っているムウマージを捨て身で突撃させる

無謀なそれに宗主は失笑し、アルセウスの水色だった飾りが黒く染まる

「さばきのつぶて」

黒いエネルギー弾がムウマージを容赦なく襲い、その身をボロボロにして息の根を止めた

間違いない、あのアルセウスは攻撃タイプを自在に変えられる能力や特性を持っているのだ

当たりをつけたダイヤは図鑑を開いて見るが、そういった情報は表示されず、何度もボタンを押して他に何かないかと探す

「……っ、う」

ムウマージが地に墜ち、パールの身体から急激に力が抜け落ち、膝から崩れた

「よく頑張ったな。パール。もういいだろう？」

宗主が手を伸ばし、優しく声をかけた

絶対に許せないと憎んだ相手を倒す為に3ヶ月の間、堪えて牙を研いできた

そうして培ってきた憎悪の修練の賜物、そのポケモン達が圧倒的な力で打ちのめされた現実にはパールはうめいた

「許そう。お前は私の下で、私の為に子孫を成す。それがあるべきものだ」

その言葉にパールが逆上し、女性のものとは思えない叫び声をあげた

顔を歪め、彼女が飛び出しナイフを逆手に取って……自分の身体へ向けて振りかざす

絶叫のなかで確かにぱしん、という軽い音がした

「パール。それは駄目だ」

ふっふっふと荒く小刻みに呼吸するパールのナイフを持った手を背後からつかみ、ダイヤは優しくはつきりとささやいた

パールの腕を押さえている手が震えるのは彼女自身が震えているから、それからかなり強い力にダイヤが負けそうだからだ

頑張るダイヤを振り払おうとするパールの身体が揺れた、それは誰かがその足をがしっとつかんだような衝撃からだ

ゆっくりとパールは背後で踏ん張るダイヤを、そして足元を見ると……ゴウカザルがぼろぼろになった腕を伸ばしていた

「おらあ！ ドダイトス、じしん！」

ドダイトスが巨体を傾け、どんっと踏み鳴らすと足元が大きく揺れる

ぐらっと大きくパールの体勢が後ろへ崩れ、ダイヤを巻き込んで尻餅をついた

足元を揺らす攻撃ではさばきのつぶても相殺はできず、またさばきのつぶてによって碎けていたやりのはしらの地面がひび割れる運悪くそれに宗主は足を取られ、がくんと左側に身体を斜めらせ、澄ましていた顔を歪めた

「いいざまだぜ、おっさん」

へっと笑うプラチナが、少しすっきりしたような顔で続ける言う「上を見たり下に見たりしてねーで、真っ直ぐまともに見てみろや」

ドダイトスがもう一度じしんをすると、宗主の足を挟んだ地割れが広がって今度はその下半身をまるごと呑み込んだ

ひび割れが閉じるとかそういうことはないが、これで少しは時間を稼げる

プラチナがちらつと横目で見ると、ダイヤとパールはまだ転んだ姿勢でいた

「あつつつう」

変な体勢で地面に手をついたからか、ダイヤは手首をひねってし

まいったようだ

そのはずみで滑り落ちた図鑑も、その画面にざざっと一瞬ノイズがはしった

「……お前」

「パール、どいてくれる？」

極力その身体に触れまいとしているから余計に体勢がきつい、そのことに気づいたパールはさっさと立ち上がった

「ゴウカザル、無事か」

ダイヤのことはガン無視して、♀のゴウカザルの手を先に取ったそのことに苦笑して、ダイヤは自ら立ち上がって図鑑を拾い上げる
「もう二度と、あんなことしないでよ」

パールに対し、ダイヤは怒ったような声で言う

「みんな、あの宗主ってやつが嫌いなんだ。だから、みんなで倒そう」

ダイヤが図鑑を差し出し、パールに微笑みかける

「それが嫌なら、僕のことを利用して。信用しなくていい、僕は勝手にきみの盾になって矛になるだけだから」

エンペルトがゴウカザルに対し、胸を張って見せた

「その為に、僕は強くなったんだから」

パールはふんと鼻を鳴らし、ダイヤとエンペルト、プラチナとドダイトスのことをにらむように一瞥する

「あてになりそうなのはドダイトスぐらいだな」

「おいおい、勝手に入れんな。つか俺はお前に利用される気なんてねーぞ。んなの博士だけでじゅーぶんだ」

「さて、どうしたことかな。やつの強さは半端じゃない、認めるしかない」

プラチナのことガン無視し、宗主を助けることもなく宙に留まり続けるアルセウスをパールは見た

扱いにわなわなと肩を震わせるプラチナを押さえつつ、ダイヤが諦めずにパールに見せるように図鑑を差し出す

パールが厭そうに図鑑の画面を見て、それをひったくった

「これは……」

「うん。アルセウスのおぼえている技だ。タイプ変化の特性についてにはわからないままだけど、Lvとかは表示された」

プラチナがどれどれと覗き見ると、その画面にはアルセウスLv 100とあった

「レベルひゃくう!？」

野生でもトレーナーの持ちポケモンでも、そんなLvに達成したポケモンは過去に存在しない

最強最大のLvに愕然とするが、ダイヤが2人に注目させたいのはおぼえている技の項目だ

そして、ダイヤは考え思ったことについて話した

「……!」

「おー、そういうことか」

確かに可能性は高い、充分にあり得る話だった

しかし、とプラチナが厳しい表情で言う

「そいつあつまり、結局俺達のやるべきことに変わりはないってことだろ」

「はい。そうなんですけど」

ダイヤが首をすくめ、かしこまるように小さくなる

パールは無言、押し黙ってしまったかと思っていたら唐突に飛び出しナイフをまた手に持った

びつくりしたダイヤがまた手を伸ばそうとすると、それを遠くに放り捨てた

更に踵を返すパールの行動に唖然としているダイヤの背中を、ばっしーんとプラチナが思い切りはたく

手加減なしで、痺れるような痛みに縮こまっていた背筋がぴんと伸びる

何をするんですか、とプラチナの顔を見るとその表情は不敵に笑っていた

「じょーとーだ。やれこうしたらああとか細かい策練って、ちま
ちま攻撃するよりそっちの方が断然性に合うわ」

ぐつと頭の上で右肘を左手でつかみ、ウォーミングアップを見せ
るプラチナにダイヤが顔を明るくした

それからプラチナはダイヤの頭をわしづかみにし、ぐしゃぐしゃ
と撫で回した

「よく見えてきたんじゃねーの」

寝ているのか乱暴に頭をぐわんぐわんと振られて、くらくらす
るダイヤがそれから逃げたところでパールの背中を見た

「……元から俺はそのつもりだ。言われるまでもない」

短く早口で言い切ったパールがゴウカザルにオボンのみを与え、
できる限り体力を回復させて備える

「うん、はい……！」

ダイヤが2人に返事をしたところで、ぞわりとした……首に手を
かけ触れられるような恐怖をおぼえた

3人3体が同じものを感じたらしく、また同じ方向を見る

「……許そう」

がらり下半身を抜き、ゆらりと上体を揺らし、宗主が再びやりの
はしらに立った

アルセウスの身体と飾りの色が薄い紫色に変化し、周囲にエネル
ギー弾が無数に浮かぶ

「さばきのつぶて」

またたきと共に降り注ぐ弾幕に、3人3体は立ち向かう

この苦境でこれから臨むことは、単純明快にして至極困難な試み
だった

『アルセウスをできるなら一撃で倒す、可能な限り早期決着に持
ち込む』

15話

きゅるんとアルセウスの周囲の物体がひと回りし、ひとつが体内に差し込まれると今まで入っていたものが飛び出す

それにより薄い紫色へと変わり、アルセウスから無数のエネルギー弾が生み出され散らばる

「さばきのつぶて」

ドシユドヒユドヒユとエネルギー弾が降り注ぐのを、それぞれ3体の傍らにいる3人が見上げてにらむ

「くるぞお！ まもるだ、ドダイタス」

プラチナの号令でドダイトスがまもりの体勢に入り、ゴウカザルは低くぐぐつと構えた

「ストーンエッジ」

ゴウカザルは自分に当たりそうなエネルギー弾だけを狙って、素早く投げる尖った岩で撃ち落とす

速射性のあるこの技は高威力で、恐らくさばきのつぶてにも劣らない

「エンペルト、メタルクロー！」

ダイヤの指示で全身を硬化させ、ギリギリまで引きつけて鋭い一撃ではたき落とす

タイプ一致だが元の威力は低い、その分を硬化することで補っているのだ

ドドドドドドドドと激しい轟音が辺りに響き、土煙があがる

「……」

全弾撃ち尽くしたアルセウスが小休止、地上を見下ろす

宗主は静かに、土煙が晴れるのを待つ

「…… なんとかあったか、お前ら」

唯一まもるで無傷だったプラチナがそう声をかけ、土煙のなかを手探る

「はい」

ダイヤは無事のようにすぐ返ってきたが、パールはない
先程のさばきのつぶてのタイプ、プラチナは何となく察している
からかつうつと嫌な汗が流れる

『ギシャ』

小さく聞こえたのは傷だらけのゴウカザルの声、その傍らでパールも健在だった

無事だったことにダイヤは笑顔に、プラチナは眉をひそめて彼女の
ことを指を指し言う

「そんくれーの返事はしろ！」

「……さっきの攻撃タイプ」

ぼそつとつぶやくパールに、諦めたプラチナはああと頷く
あれは飛行タイプのものだ

この場でLvの高いドダイトスとゴウカザルに共通する弱点タイプ
を狙ってきた

だがドダイトスはまもる、それに強い岩タイプの技でゴウカザル
は乗り切った

エンペルトも威力が低いメタルクローで何とかなったのは、自身
が鋼タイプであったことも大きいだろう

「てえことは、次は炎か氷か虫か、飛行の連発だな」

数えるように指折りながら、プラチナがそう予測する

そして、恐らくそれははずれないだろう

……

「アルセウスのおぼえている技？」

「はい」

ダイヤが見せる図鑑に表示されている技は4つ

さばきのつぶて、はかいこうせん、ほろびのうた、じこさいせい
その強烈な技の並びにプラチナは目を剥くが、ダイヤは続ける

「でも、宗主はさばきのつぶてしか知らない」

「！」

アルセウスは未知のポケモンだ

宗主がさばきのつぶてという固有技を知っているだけでも凄いことだが、それ以外の技は知らない可能性が高い

ポケモンのおぼえる技は460種類以上あり、そのなかからアルセウスがおぼえている4つの技を当てるのは難しい

そのすべてが固有技であることはないだろうと予測はしているだろうが、ピンポイントで当てられるものではない

「PPも10あるって知らないかもしれない」

「高威力ほど少ないもんだからな。できれば数撃ちたくねーはず」
アルセウスが撃ってきた回数は3回、宗主はあと2回でこの戦いを終わらせたいはずなのだ

宗主に時間を与えれば、じこさいせいをおぼえていることに気づかれるかもしれない

ただでさえLv差があるのだ、この場を全滅させられるほろびのうたもある

長期戦は絶対にダイヤ達に不利だ

「アルセウスをできるなら一撃で倒す、可能な限り早期決着に持ち込む」

Lv100、伝説のポケモンでも最上級のアルセウスに対する小さな人間達の挑戦だ

……

宗主が即決する

「さばきのつぶて」

旋回する物体が入れ替わり、アルセウスの飾りの色が変わるそれも冷たさを思わせる水色、ドンカラスを倒した氷タイプ
思った通りだ、とプラチナは威勢よく声を出す

「ドダイトス、タネばくだん！」

まもるをおぼえていると知った今、確実にそのドダイトスを仕留める為の選択だ

さばきのつぶてしかおぼえている技がわからず、そのPPが5か10程度しかないと予測している宗主なら当然のこと

高威力で少ないPPの技の弱点はまもるといった完全防御技、どれだけ攻撃しても無駄にPPを消費するだけで終わってしまうからだとえアルセウスがわるあがきにはならなくても技の指示ができないなら、この場では次点にLvの高いドダイトスを残しておくのは非常に危険だ

だから、連続で成功しない完全防御技の弱点を狙って、更にドダイトスの4倍弱点である氷タイプを選んだのだ

アルセウスのさばきのつぶてが、その殆どがドダイトスに向かって集中砲火される

プラチナはタネばくだんで真っ向から相殺していくが、タイプ相性で負ける撃ち合いではかなうはずもない

完全に押し切られ、無数のエネルギー弾がドダイトスの身体に被弾する

かすっただけで身体をえぐられ、直撃すれば文字通りへこんだ

「うおおおお……っ、右だもつとみぎ……」

プラチナも逃げず、ドダイトスの傍で少しでも直撃を避けさせてやろうと指示をし続ける

降り注ぐ弾幕、しかし集中砲火で薄くなったところを狙って駆け抜ける赤い身体があつた

「ゴウカザル！」

着弾した地面が凍っていく、そしてすぐにもドダイトスもプラチナの声も聞こえなくなった

それに目を向けることなく、ゴウカザルとパールはただ目標に向かって走る

勢いづいたゴウカザルがやりのはしら、そこに立つ柱にだんつと

一足で跳んでつかんで登り出す

全弾撃ち尽くしていない、今しかない

アルセウスのさばきのつぶて、そのタイプが変わる前には必ず旋回する物体の入れ替えと体色の变化がある

攻撃エネルギーのみの変化なら、そのエネルギー弾の色だけが変わるはずだ

しかし、実際はアルセウスの身体の色が変化してからそれに即したエネルギー弾を生み出す

「（つまり、さばきのつぶてはアルセウス自身と同じタイプの攻撃になる）」

攻撃と身体タイプが一致しているなら、今のアルセウスのタイプは氷

宗主が自らの指示による弾幕によって目で追いつかなかった先に、駆ける勢いそのままのゴウカザルが柱を蹴り飛ばす

「フレアドライブ！」

ボォツと全身を燃え上がらせ、宙に留まるアルセウスへ渾身の一撃を当てに行く

Lv差があるうと、パールが絶対の自信を持つこの技なら確実に大きなダメージを与えられる

「（決まった！）」

ゴウカザルの技が当たる瞬間、その数cmでのことだ

きゅうんと音がして、アルセウスの身体の色が濃い青色に染まった全弾撃ち終わるか否かの絶妙のタイミング、突撃したゴウカザルとの間からじゅうつつと音が鳴る

「……………」

わかる、今のアルセウスのタイプは水だ

炎に強く、効果の薄い水に一瞬で変化された

「こいつ……っ、こいつに死角はないのか」

パールが苦々しくつぶやき、歯を食いしばる

勢いを失ったゴウカザルが宙から落下するのを、アルセウスが見

降ろした

『！』

その真下、そこにエンペルトが構えていた

これまでのさばきのつぶて、エンペルトに当たったタイプに効果は抜群のものはなかった

他の2体に比べてLvが低かったからか、それとも偶然か

しかし培われ鍛えられた身体と性格で臆することなくアルセウスの攻撃をかくぐり、今もこうして健在している

「エンペルト、しおみず！」

ダイヤの指示にエンペルトはその身体の周りから噴き出した水流をもって、アルセウスを真下から攻撃する

程近いところで跳ねるしぶきに宗主が顔を覆い、そしてつぶやく「さばきのつぶて」

迷うことなく6度目の技の指示、それに応えたアルセウスの色が山吹色に近くなる

しおみずから逃れ、アルセウスは宙で体勢を変えて真下を向いたいや、アルセウスが逃れるよりも早くダイヤはしおみずの攻撃を止めさせていた

「（多分あれは電気タイプ、食らったらおしまいだ）」

ダイヤは空を見上げ、痛む手首を我慢してずっとアルセウスを指差した

……

リツシこのほとり、同日、早朝

ポケモンバトルを楽しんだジェントルマンとダイヤが、親しげに世間話をしている

「おお、そうだ。きみにこれをあげよう」

ジェントルマンがダイヤにものを差し出すと、やんわりと断る

「いえ、そんな。受け取れません」

しかし、ジェントルマンは気にせずダイヤの手に押しつけてそれを握らせた

「なんの。昨日はトバリまで足を伸ばしましてな、刺激求めてスロツトをしたら大当たりしましてね」

はははと紳士的に笑うジェントルマンが、ぱちつとウィンクして見せる

「バトルの勝者に賞賛と賞金を。これはその代わりです」

ダイヤは頭を下げてお礼を言つて、素直にそれを受け取ることにした

「強くなりたいきみの役に、きつと立ちますぞ。では、私はこれで失礼」

颯爽と踵を返し、ジェントルマンは歩いて行ってしまった

ダイヤは受け取ったそれ、わざマシンを見つめた

……

しおみずで濡れたアルセウスの身体、それにタイプ相性なんて関係ない

ダイヤは言つた

「れいとうビーム！」

エンペルトから真上に向かって放たれる直線軌道のエネルギー光線、さばきのつぶてを生み出すよりも速いそれが直撃する

「む、う」

宗主が見せた焦りと驚きの表情、アルセウスの身体が見る見る内に凍つていく

宙に留まっていたアルセウスの体勢が崩れ、周囲に散らばる無数のエネルギー弾がしぼんで消える

技は不発、凍った身体の重みでアルセウスが落下を始める

「……な」

それでも体勢をすぐに整えようとする、その打たれ強さは賞賛す

るしかない

アルセウスの身体の色が赤く染まり、凍った身体を熱で溶かしていく

ダイヤの不意打ちはこれまで、もうこれ以上の手はない

「ゴウカザル」

最強であるアルセウスのわずかな時間の陥落、それに気を取られた宗主のわずかな時間の隙

パールが見せる最強の技フレアドライブも敗れ、地に伏したはずのゴウカザルが宗主の横を駆け抜けた

「……これで終いだ、怪盗マージユの魅せる業」

まだ強くない、何も見ていないと……わずかにでも父親から逃げたこそ泥の技、どろぼう

ゴウカザルの手にはマスターボールがあり、それをばきんと握り潰した

「お、おおおおっ」

宗主が手を伸ばした時には遅い

上空のアルセウスがその身の内から光の輪を放ち、全身を回復させた

それは自分の意思によるじこさいせい、宗主から解き放たれた証明だった

「……倒してないけど、勝った」

ダイヤがへたりと座りこむと、その後ろからばきばきんと固いものが碎けていく音がした

振り返るとやりののはしらを分かっていた壁が、氷のさばきのつぶてで凍ってもろくなったのが何かの衝撃で崩れたらしい

その壁を崩した衝撃のことは、ディアルガの身体だった

がらららと巨体が倒れた向こう側に、同じように地を這うパルキアと仰向けに倒れるギラティナの姿

そして、身体のおちこちから血を流すものの立っているナナカマド博士とシロナの視線がダイヤの視線を交わった

「う、つ……う」

崩れたがれきの下で、それらに当たったことで意識を取り戻した
プラチナのうめきが微かに聞こえた

プラチナが下敷きになっっているガレキの上に、ぼろぼろのユクシ
ーが来て心配そうに見つめている

「は、はは……」

ダイヤの身体から一気に力が抜けて、表情が保てない
くしゃくしゃに表情を歪めて、目をつむった

勝った、生き残った

エンペルトがダイヤのことを覗き込み、そしてガレキを乗り越え
て歩いてきたシロナがダイヤの手を取って立たせた

力の入らないダイヤはよろけて、シロナの身体にぼすんとぶつか
ってしまった

「……親父」

勝利の余韻もないまま、ぎりと唇を噛むパールが宗主にゆっくり
と近づく

その手には尖ったガレキが握られ、少しずつ振りかぶる

「……」

宗主は近づくパールを見ても動じない、気づいたダイヤがシロナ
から離れて声をあげようとした

その時だった

ふおんと軽い音を立てて、宗主の身体が浮き上がった

パールを眼下にどんだん宙に舞い上がっていき、下から見上げる

パールはそれをにらんで見つめる

「な、何が」

宗主の身体が持ち上がった先、その傍らにはアルセウスがいた
どうということだろう、ダイヤはシロナの顔を見ると彼女は上空に
いるアルセウスと見つめ合った

頂点に立つポケモン同士、言葉もないまま疎通は一瞬のものだった
シロナがアルセウスからのものを、そのままつぶやく

「『この男は人間の手では裁けない。だから、我が天上に連れていく』」

「！」

冷静な態度でアルセウスが天を仰ぎ、駆けるように脚を上げるとその体勢のまま更に上空へと昇っていく

少し遅れて宗主の身体も持ち上がっていき、同時に光の階段も徐々にすうつと消えていく

ダイヤが叫ぶ

「待つて、待つてよ！ その人は、その人はパールの……っ！」
手をめいっぱい伸ばし、空をつかもうとするが届かない

天に昇る宗主を、パールはがれきを握りしめたままだ見送っていた

「……良い、許そう。さあアルセウスよ、私を天上へ導け」

まるで勝ち誇ったように微笑む宗主は、もう二度と地上を見ることはなかった

アルセウスだけを見つめ、雲のなかへと吸い込まれていった

宗主が見えなくなると、ナナカマド博士とシロナ達に倒されたデリアルガ・パルキア・ギラティナが起き上がる

ゆつくりと、緩慢な動きでそれぞれの目の前に次元を裂いて入り口を作る

誰にもそれを止めることはできず、三神はそれぞれの世界へ落ちていくように姿を消した

「……………」

後に残されたのは崩落寸前まで壊れたやりのはしら、いやもう跡地というべきかもしれない

そこに何も言えなくなった人間とポケモンが、ただ立ちつくしていた

午後4時前、静寂が訪れたやりのはしら跡地

戦いが完全に終わり、それから初めてした音はどしゃっというものだった

「……あ」

それは人が倒れる音、次に聞こえたのはその人の名前を言い淀んだ声

あちこちが裂けてぼろぼろになったライダースーツ、閉じたつり目は何も語らない

「あパアアア——ルっ！」

受け身も取れず倒れたパールにダイヤは駆け寄るよりも早く、ただ名前を叫んだ

16話

6月5日、フタバタウン

プラチナがぐだぁーっとソファの上に寝転がり、何もせず天井を見ていた

その顔をにゅっと現れた影が覆い、つぶやいた

「パールがいつもより冷たくなった」

それだけ言って引っ込んでいくのを見て、プラチナが起き上がるソファの裏を覗くと、座り込んだダイヤがいた

「んだよ、お前まだ諦めてねーのかよ」

ここはダイヤの家、冒険というか放浪からぶらっと帰ってきたプラチナが寄った日のことだ

あからさまに沈んでいるダイヤに、プラチナは面倒臭そうに頭をがしがしかいた

「やめとけて、あんな可愛げのねー女」

「パールは可愛いですよ」

ぷうつとむくれるダイヤに信じられない、という表情をプラチナは隠さずする

「あんなどこにも詰め物してないような女が、ねえ」

「失礼な言い方しないでくださいよ」

座ったままダイヤがプラチナのことを見上げると、彼は肩をすくめた

「俺はシロナさんみたいな柔らかくて、出るとこ出たのが好みな」

そう言ったところで思い出し、ダイヤにびしっと指を差す

「そーいやお前、何度もシロナさんに抱きついたりしてたらしー

な。このむつつりめ」

「あれはミユウですってば。それに……確かにドキドキしたけど、パールほどじゃなかったし」

小さくつぶやくダイヤにあきれて、プラチナはソファに寝転び直した

ソファに寄りかかりながら、ダイヤはふーと長くため息をつく
「あれから僕も強くなっただですよ。ジムバツジも7個まで集めたし」

「おー、博士から聞いた。あとはビーコンバツジだけだっけな」
相変わらずのエンペルト1体で、ついにシンオウジム制覇に王手をかけた

寝転んだままおめでとう、とつぶやくプラチナにダイヤはありがとうございますとつぶやく返す

ダイヤは自らの頭に、髪に触れて撫で回す
あれから背も10cmは伸びたのだが、それでもパールの方がまだ5cmくらい高かった

好きな女の子よりも背が低いというのは結構悲しいことで、それでいてちつとも進展しないのは流石のダイヤも堪えているらしい
4年間ずっと好きだと言い続けて、できることはして、彼女よりもきつと強くなった

プラチナはソファで寝返りをうとうとして滑り落ち、ごつつと痛そうなお音がする

「……あの女の境遇も境遇だ、わかってんだろ」
仰向けに倒れたまま、プラチナがつぶやく

——あれから4年の月日が流れた
やりのはしらで意識を失い倒れたパールはふもとの病院に運ばれ、精密検査を行った

付き添っていたナナカマド博士から、ダイヤもプラチナもその結果について何も聞かされなかった

結局、彼女が本当に妊娠していたのかはわからない

怪盗マージユとしての活動、やりのはしらでの激しい戦い

それらが原因で墮胎したのか、最初から妊娠していなかったのか
もしれない

前者ならパールの意思も誰もが宿した生命に対し決断をすることなく、その手を汚さなかったのは良いことなのか

後者にしても、実の父親に穢された過去と事實は消えることなく彼女のなかで残り続ける

法の追及も届かないところに宗主は消え、PTDをばら撒いていた名無しの集団も自然消滅し、関係者と思われる21人は逮捕されたシンオウ地方で起きた最も静かで恐ろしい大事件は、そうして終わったのだ――

ダイヤはソファに寄りかかったまま、無言でずっと横に倒れた

……

3日後の6月8日、キツサキシティ南部

雪が深く残る山道を登っていくプラチナは、周囲を注意深く見ながら進んでいく

キツサキシティの住人からこの辺りと聞いて、探しているのだ

「お」

森の、木の隙間から複数の人影が見えた

ようやく見つけ、手を振るとそちらも気づいたようだ

ぴちつとした防寒具、出るところがまるで無いスマートで背の高い女性が似たような服を着た男性と話している

その周囲にはアグノム・ユクシー・エムリットが舞っていて、指示を受けた男は女性から離れていく

プラチナは手を振り続けるが、女性はそのまま別方向へ歩いていく
どうやら気づいているが、無視しているようだ

相変わらずな態度だな、おいとつぶやきながらプラチナが呼ぶ

「おいっ、パール！」

「……」

ガン無視してくれるが、アグノム達がプラチナに気づくとふわーっとそちらに行ってしまう

舌打ちして、パールがプラチナと向き合う

「……帰れ」

「ああ、俺ここに来たこと間違いだったって一瞬でわかったわ」
プラチナとパールがばちばちつと視線で火花を散らしたが、すぐにパールは目を逸らしてつぶやく

「何の用だ。手短に話せ」

「いや、ちいっと様子見に来たんだよ。まだ、続けてるって……」
プラチナがアグノム達を見上げて言うと、パールは当然だと返す

……

4年前、6月3日

カンナギタウン、テンガンざん下山後のこと

シロナをのぞいた全員が医者からの手当てを受け、身体のあちこちに包帯を巻き湿布を貼った

その病院、パールの病室のなかでシロナが言った

「アルセウスはPTDによって完全にポケモンとなった人間を救うことはできない、そう言ったわ」

ナナカマド博士、ダイヤ、プラチナ、そしてベッドの上にいるパールがその言葉を呑みこもうとした

それは重く、しにくかったからか皆うつむいたまま言葉が出なかった

「けれど、まだ自我が残っているものなら助けられる方法はある」
続いたシロナの言葉に、呑みこみかけたまま皆は顔を上げた

わずかに微笑んでいるようなシロナが、病室の天井を舞う湖の三神を見た

「ヒトがポケモンからはずれ、人間となったきつかけ。それはアルセウスが生み出した1つのタマゴから出たアグノム、ユクシー、エムリットが世界を駆け回り、ヒトに決意と感情と知恵をもたらしたから。ヒトは人間となった際に鋭い爪や牙といった技を失い、そ

の特性はポケモンを使役する能力へと取って代わった」

ウウムとうなるナナカマド博士、皆はその話をなんとか呑み込んだ
「それで」

パールが身体を起こし、シロナに続きを求めた

「どうしたら、いい」

「……もう一度、アグノム達にシンオウ中を駆け巡らせる。まだ人間としての記憶や自我があるものなら、徐々に本能から理性を取り返すわ」

PTDによって目覚めたポケモンの扉を閉じて、人間としての姿を取り戻せるというのだ

ただし、とシロナは付け加える

「それでもポケモンのままであることを選ぶ人間もいるでしょう。それはもう個人の意思に委ねるしかない」

それが現状で、いやすべてをもつてしてできる最良最高の解決策だった

人智を越えた力で人智に依った災禍を救えるのだ、ダイヤ達は喜ぶしかない

ただ独り、わずかでも喜ぼうとしないものがいた

……

プラチナは白い息を吐きながら、パールの顔を見た

「まだ探してんのか。もういいだろ、そいつらはきつとポケモンのままでいることを選んだんだ」

パールはダイヤ達と共に天変地異の大震災によるシンオウの復興に助力しながらも、あれからずっとアグノム達を連れて歩いている一度シンオウ地方を駆け回り、その殆どは人間に戻ったようだが、

だが、8%ほどの人間達はまだ戻ってこない

大震災で死んだか、時間が経ち過ぎて間に合わなかったか、シロナやプラチナが言う通りポケモンでいることを選んだのだ

それでもパールは今も協力者を何人が連れてそういった人達を、シンオウ中を探している

「……勘違いするなよ」

プラチナをつり目でにらみ、言った

「俺はポケモンでいることを選んだ奴らに興味はない。ただ、もしかしたらアグノム達の力が及んでいないかもしれない地域を回っているだけだ」

アグノム達の力がもし及ばぬところ、深い雪山の奥に迷い込んだものがいたらどうだ

そこで人間としての自我や記憶をわずかに残しながら、いつか戻る日を待っているかもしれない

「行くぞ。アグノム、ユクシー、エムリット」

パールに言われ、湖の三神がプラチナから離れる

そうしてパールはざくつざくと雪を踏みぬき、道の無い山の奥へと入っていく

宗主を父に持った贖罪か、それとも何か別の意志や感情によるものだろうか

眉をひそめ小さく欠伸するプラチナがその背を見送っていると、

山の下の方から間延びした声が聞こえてくる

「おーい、パール」

聞き覚えのある声にプラチナが振り向くと、山道を駆け足で登ってくるダイヤを見た

その呼びかけにパールはガン無視、ダイヤがプラチナに気づくとあれつと声をあげた

「プラチナさん、どうしてこんなところに？」

「そういうお前こそ」

「僕はパールのお手伝いです。4年前からずっと、彼女の傍で、利用されているんです」

嬉しそうに言うダイヤに、プラチナはこれはもしかしくともストーカーじゃないのかと首を傾げる

プラチナの横を通り、ダイヤはパールの後を追う

どんなに彼が呼びかけても、彼女は無視し続けている

酷いものだ、プラチナの時よりもずっと酷い扱いだ

4年前から、あの2人はまるで変わっていない

嘘をつく女以上に男を信用しないと切り切ったパールと、そんな

彼女にひと目惚れして追いかけたダイヤのままだ

下手すればそれ以上、この4年間で更に悪化しているかもしれない
更に冷たくなった、とダイヤがぼやいたのも頷ける

「……ん？」

プラチナは気づき、首を傾げた

ダイヤにあれだけつれない態度を取るパールだが、プラチナとは
それなりに会話をした

それはダイヤよりも、プラチナの方が気に入っているということ
なのか

いや、あれにモテても嬉しくねーなと頭をかいて、すぐに思い直す
木立ちから見えたパールに声をかけた時、その時彼女は男性と普
通に話をしていた

森にいるからって気の多い女なのか、と冗談を思いついたがふと
考え方を変える

「ねえパール、僕、ついに8個バッジ取ったんだよ」

「……」

「真っ先にパールに教えたくて、ナギサの223番水道からキッ
サキシティまでぐるっと回り込む感じでなみのりしてきちゃった」

「……」

「疲れてない？ 根詰め過ぎないでね、パールは無茶ばかりする
んだから。この前だって倒れてさ……」

ダイヤが積極的に話しかけているのがプラチナにも小さく耳に届
くが、すべて無言をもって受け付けないパールというのを見て傍目
からして悲しくなる

——だが、それは見方を変えるところなのではないか

パールはプラチナやナナカマド博士といった男性と普通に話す、それはある意味友好的であって実はそうではないとしたら

そうして話せるのは、プラチナ達を男性として見ていないからだとしたら

過去に実の家族であつた父親に穢された彼女は、より身近で親しい男性ほど拒絶を示すのだとしたら

それは他の誰よりも男性として認めている、屈折しすぎてひと回りした彼女の嘘偽りのない意志表示なのだとしたら――

まさか、と両手で頭をかきむしるプラチナが山の方を見ると2人の後ろ姿はもう遠くなっていた

すべては第三者からの推測でしかない

「……ああ、俺、もー知らね」

しかし、その答えを聞く気にもならない

プラチナはカメラを手に取り、望遠レンズで遠くの2人をぱしりと1枚の写真に収めた

「タイトル。 Pearl と Diamond」

16話（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

2ちゃんねるのスレに

『ポケモンの二次創作に関する議論スレ6

778 : 名無しさん、君に決めた！ : 2010/02/12（金）

19 : 32 : 11 ID : ????

小説のネタが浮かんだからその設定に関して相談。

下に書いてあることに關して、こうしたら良い点、これはないと思う点、厨設定等あればご指摘お願いします

・ミュウがポケモンの技で人間に変身して人間として生活している。

・悪の組織が人間をポケモンにする薬を發明。薬を服用した人がポケモンの力で犯罪に走ったり、人間をやめて野生ポケモンになる行為が、密かな社会問題になっている。

・ジムリーダーがポケモンになる事態が発生しないように、ジムリーダーはゲスト程度でオリキャラ中心。

・主人公はあくまで普通のトレーナーの予定。主人公と扱いは同等で立ち位置の違うサブ主人公って扱い難しい？

・舞台をシンオウにしてシンオウ神話に絡ませようと思うんだけど

……これって所謂原作破壊？

このようなレスが舞い込み、少しの間議論が起きました。自分はその時は参加しなかったのですが、突然このネタによるPTDのプロットが頭に浮かび、どうしても書きたくなってしまいました。

レス主様がどうか、掲示板の都合上わからないのですが。そう名乗る方から許可を貰って執筆をはじめ、完成に至りました。ネットへの掲載は報告後、その返信があったらと思っていたのですが、事

後承諾という形で先に「評価を表示しない」で掲載させていただきました。

とりあえず小説タイトルは既に作中でも明記されています。が、もうひとつあります。

舞台となったシンオウ地方、そのverであるダイヤ・パール・プラチナの略称であるD P P tのそれぞれP・t・Dから取っています。それは途中まで自分が思っていた主人公らしさの順でもありましたw

他にもポケモンのアニメ映画などからのネタが入っていたり、細かい設定は結構あります。しかし、全部書く気にはなりません。質問や感想で要望とかあったら、設定やあまりにも適当なプロットなどをさらそうかとは考えてはいます。

ここまで長くなりました。PTDに後日談はありませんが、1話より前の0話の1編だけ書きましたので、蛇足かもしれませんがそちらもどうぞご覧になって見てください。

0話（17話）

3月3日

大きく明るく広く美しく装飾がされた寝室、夜

「（やめろ、やめろよ）」

ベッドの上でそう言いたげな女の子は何の衣服も身にまとうておらず、その四肢と頭を何人も手で押さえつけられていた

抵抗しようとしても、周囲の人達の痛いぐらいの重みでベッドに縛られて動けない

舌を噛み切つてやろうとしたが、詰め物をされてそれもできない起伏に乏しい女の子の両足は大きく広げられ、その格好は卑猥なものではなかった

だが周囲の人間や同じく全裸の男の目に好奇や欲情といった感情は何もなく、無表情にわめく女の子を見ていた

「時間だよ、パール」

男がそうささやき、ぎしとベッドの上に足を乗せた

パールと呼ばれた女の子はその表情を引きつらせ、全身全霊の力で周囲の人間達を引き剥がそうとしたがびくともしない

足の付け根に何かが触れている、おぞましい

「……っ、ううううっ!!」

このまま意識を失ってしまいたかった、悪夢なら目覚めてほしかった

しかし、現実と恐怖感是非常にも彼女の意識を覚醒させるばかりだった

夕食に何か混ぜられていたのか、気づいたらこの状況で、彼女の意思に反して身体が疼く

そして、彼女の背筋を通してはつきりとわかったその感触と痛みに声にならない嗚咽を部屋のなかを満たした

……

同日、同時刻

行為中の寝室から離れた洋室、机が1つ椅子が3つ

「何故、宗主様はあんな小娘と……っ！」

ぎりど厚ぼつたい唇をかむ、平紐で目隠しをしている女性が椅子に座りながらそう忌々しげにつぶやいた

「口を慎め、ヴェル。宗主様の意に反する気か」

つとめて真面目に言う長髪の男性が女性ことヴェルを叱責すると、彼女は押し黙った

「それだけ、ヴェルの信仰が篤いということだオークル」

「シャザ」

薄い黄色の長髪を揺らしてオークルが振り向くと、剃髪のシャザが穏やかな表情をたたえていた

ヴェルの気持ちは察している、宗主の目が向かなくなったことがとても寂しいのだろう

それも仕方のない

今は計画の最終段階、その要ともいえる行為に勤しんでいるからだ
「宗主様は永劫に薄まることのない自己の確立を求めておられる。ただ子を成せば血は半分となる、それでは宗主様の理想に届かない」
姿技を似せられるメタモンといったポケモンとは、種族の違いに子が成せない

かつては同じポケモンというくりにあつたのに、今では遠くかけ離れてしまった

だから他の誰も無い、実の娘を孕ませることを選んだのだ

「その身による実の父への孝行、宗主様の為が基となれてパール様はさぞお喜びだろう」

「ああ。それに応えパール様の周期を考慮した今日より2週間、宗主様は毎夜のごとく子種を注ぎ続け新たな命を成そうとする」

「その間、我らには我らで成すことがある。それによって結果を

示すことが、宗主様への何よりの貢献ではないのかヴェルよ」

PTDは宗主^{エース}の御心の具現、すべてをあるべきものへ

すべての人間も信徒もポケモンであることが自然、故に宗主により信徒はPTDを広めその真実に気づかせてやる

そして新たな種族^{にんげん}として確立される宗主と、ポケモンと化した信徒と旧人類との間に永劫の絆を約束される

それこそが世界のあるべき姿^{もの}、すべてにおいて何よりの僥倖

「……あなた達に言われなくてもわかってるのよ」

椅子から立ち上がり、ヴェルはわざと大きな足音を立てて部屋から出ていく

オークルとシャザはフツと微笑み、その後が続いて出ていった

……

それから5日後の3月8日、夕方

「申し上げます！」

血相を変えたオークルが、宗主の部屋に入り、いつもよりも素早く胸の上で複雑な模様を指で切ってから言う

「パール様の安息所に、その色香に血迷ったと思われる信徒が乱入。それに乗じてパール様が……その、姿を消されました」

オークルは額を床に擦り付け、その面を上げられなかった

2週間続けられるはずの、大事な行為の途中でパールを見失ったというのだ

ただパールの精神状態があまり安定していなかったので、行為の時間まで寝室とは違う静かな部屋で待機させていた

気になるのはその別室と鍵の場所を知るのは限られた幹部のみ、ということだ

まさかとは思いが、宗主の御心に反する幹部による手引きがあった可能性もある

宗主の御心を集った信徒を疑うということは、宗主そのものを疑

う行為に等しい

「……この玉間を汚すことをお許してください」

わずかでも欺瞞の心を抱いたことにオークルは、面を上げないまま自らの右掌の中指を左手でねじ上げてぼきりと折った

裂傷でぼたぼたと数滴血が垂れ、白い玉間の床に赤い花を咲かせた

「許す」

宗主は短くそう言って立ち上がり、玉座から離れた

オークルはそれでも面を上げず、半日はその体勢のままそうし続けていたそうだ

……

3月9日

ズイタウン、郊外の森

そこにはズイのいせきがあり、稀に珍しいシンボルポケモンが出現するということなのでナナカマド博士は単身で調査に赴いていたしかし、3日間町に泊まり通い続けてみたもののそれらしい影も見当たらなかった

遺跡に刻まれた文字を調べてみたが、これまでの学会で挙げた報告以上のものもない

そこで発想を変えて、遺跡から離れて森のなかを調べてみることにしたのだ

午後いっぱいそうして調べていたらもう陽も落ちかけ、森のなかは少し早く夜の暗闇が訪れていた

「そろそろ切り上げるか」

どんなところでもカジュアルスーツという格好を崩さないナナカマド博士が上を見上げると、ドンカラスは静かな森のなかをはしゃぐように陽気に飛び回っている

やれやれと、次に後ろを見るとムウマージはびくびくと怯えている夜目が利かなくなってくる鳥ポケモンがはしゃぎ、夜に強いゴー

ストポケモンが臆病というのは考えものだなとナナカマド博士はひとつ息をついた

最もドンカラスはヨルノズク並に夜目がきく鳥ポケモンなのだが、おつちよこちよいでもあるので……ナナカマド博士の頭に木の葉が落ちてきた

どうやら樹の上でぶつかっただけらしいとわかり、ナナカマド博士は一度ボールに戻そうかと考えた

『ユウ!』

ムウマージが何かに反応し、驚く様子を見せた

森の奥に何かいる、ナナカマド博士もそれに気づいてドンカラスに右掌を振って合図する

警戒しつつ、じりじりとゆっくりと歩を進めていく

「……う、あ、う」

かすれたような声、それはポケモンではない人間のものとわかったのはポケモンと多く接してきたナナカマド博士だからだ

暗闇のなかから薄布をまとった、目もうつろな半裸の女の子がふらつきながら現れた

ドンカラスがばささつとその女の子の目の高さまで降りてきて、その顔を覗き込む

「っ! うああああああ」

ポケモンと目を合わせた途端、火がついたように女の子は半狂乱になって手を振り回し始めた

びつくりしたドンカラスは後ろへ下がりが、ムウマージはナナカマド博士の後ろで更に小さくなってしまった

この状態、かなりまずいと判断したナナカマド博士はドンカラスの手加減したつばさをつつを指示する

回り込んでからドンカラスがバシッと首筋の裏を叩くと、女の子は膝から崩れ落ちて地面に倒れた

ナナカマド博士が傍に寄ると、うつとその表情を歪める

四肢に誰かに強く握りしめられたあざが残っていて、更に全身の

そういった状態からナナカマド博士は察する

それ以外に外傷は無さそうだとナナカマド博士は薄布で彼女の身体を完全に包み込む

町の診療所に直接運び込むのはまずい、と判断してムウマージのサイコキネシスで身体を浮かせて運ばせる

夜の森のなか、帰路をいつも以上に急ぐナナカマド博士は何かざわつくような予感めいたものを胸に抱いていた

……

それから丸2日と半分が経過して、彼女は目覚めた

チェリムのアロマセラピーも効いたのかもしれない、丁度部屋に入ってきたばかりのナナカマド博士は安堵した

起き上がった彼女はかけられた布団を引き寄せ、上体を起こしてベッドの上で後ずさって警戒する

「……ここは」

「ズイタウンの郊外、ポケモン協会の建物だ。わたしときみ以外、利用者は他にいない。安心したまえ」

各地にある保有物件のひとつで、ズイのいせき調査などの宿泊施設として利用されている

町からはずれたところにあり、森もあるので彼女をここに運び込むところは誰にも見られていないはずだ

「お前は」

「ナナカマドだ。ポケモンの進化について研究している、フタバタウンに研究所を構えている老人だよ。服はお気に召したかな」

パジャマのようなゆったりとした服を着せられている、彼女は頭を下に沈ませるように頷かせる

緩慢な動作で彼女が部屋の隅を見ると、起き上がった彼女を見つづけているドンカラスとその影に隠れているムウマージがいた
「わたしのポケモンだ。出会いがしらは驚かせてしまったようだ、

すまない。よく言つて聞かせてあるから、もう大丈夫だ」

「……」

掌を上下に揺らし、来い来いと手招きするとドンカラスとムウマ
ージがナナカマド博士の傍にやってくる

それを見た彼女は顔をうつむかせ、じつとし、それきり黙り込
んでしまった

「さて、そろそろきみのことを教えてもらおう」

立っていたナナカマド博士が部屋の椅子に座り、彼女に問いかけた
これは身元の確認、それから意識や記憶がはっきりしているかの
確認も兼ねている

「きみの名前は？」

「……パール」

「フム。パールというのか」

小さく頷くナナカマド博士がつぶやく

「いい名前だ」

そう言われ、パールの顔が驚いたような表情でナナカマド博士の
方を見る

ぎゅつと布団を握りしめ、身体を震わせるパールが小さくかすれ
た声でつぶやいた

「……………母が、付けてくれた名前だ」

「そうか。……本題に入ろう。きみは、何から逃げてきた」

ナナカマド博士はそういうものの、察しはついている

「普通の性犯罪なら、真っ先にきみを警察に連れていったらう。
だが、その身体に残るあざ……人間のものではないな」

だが、ポケモンのものでもない

人間とポケモンの両方の特徴を持っているようで、どちらでもな
いような不思議なあざだ

パールは自らの腕を見て、その震えは一層ひどくなった

「っこれは、人間じゃない……ある信徒のものだ」

「シント？」

「最低最悪の、イカレた男の言うことを聞く中毒者だ」
やはりただの強姦といった事件ではない、もっと違う根本があり
そうだ

ナナカマド博士は時間をかけながら、ゆっくりとパールから事情
を聞きだしていく

——中毒者というのはとあるドラッグの作用によって、人間から
ポケモンに戻れなくなる過程でたまに現れる半端者のこと

ポケモンと人間の意識のはざまにずっと自我を落としてしまっ
た為、人間の言うことなら何でも聞く状態でいずれは完全なポケモ
ンになってしまうこと

とあるドラッグとはいうPTD、ポケモントランスドラッグとい
う人間をポケモンに変えてしまう魔薬だということ

そんなPTDをシンオウ地方にばらまく、無名のカルト集団がい
ること

何故そんなことをしているのか、その目的や組織自体が不明瞭で
あること

カルト集団ができてから数年は経つが、基盤のようなものはもっ
と前からあったとのこと

無名の集団には社会的地位の高いものがいて、これまで表世界に
その活動がばれたことがないということ

そんな信仰集団のボスこと宗主はパールの実の父親で、パールを
襲ったのも中毒者を引きつれたその男であること——

そのすべての話が信じ難く、ナナカマド博士の姿勢は祈るように
折れ曲がっていく

ナナカマド博士は、ゆっくりとパールに語りかける

「ギンガ団事件が終わってから、も、まだ不安という形にもなり
切れない漠然とした嫌なものを感じていた……。それが何なのか、
わからなかった」

「そうやって気づくだけ大したもんだと思う……ぜ」

パールはベッドの上にその足で立ち、ナナカマド博士のことを見

降ろした

「世話になった」

「どこへ行くつもりだ」

祈るような姿勢と両手を組んだ形でナナカマド博士が聞くと、パールは窓の外を見た

「決まってる。復讐だ」

「いかん！」

ことなげに言い切ったパールを、勢いよく顔を上げたナナカマド博士が止めた

四肢のあざに痛みもなく、特に外傷もないパールだがこのまま行かせるわけにはいかない

「助けてくれたことは感謝してる。だから、こうして身内の恥と悪事を話したんだ。もういいだろ」

「危険だ。目的も規模も拠点も何もわからん、把握しておらん状況で動くべきではない」

「言ってられっかよ。あいつは俺の意志も抵抗にも構わず俺を穢した、もう親でも何でもない。ジジイも危険ってわかってんなら、このシンオウから逃げ出せ」

ナナカマド博士を見下すパールの瞳に炎が宿っている、憎しみを糧に燃える危険な炎だ

きつと元は普通の娘だったのだ、言葉や態度は悪いがナナカマド博士のことを気遣っている

今は父親の非道な行為による怒りや悲しみといったもので、彼女の心が塗り潰されてしまっているのだ

「あいつが妙な仲間とつるんで、ポケモンと人間について何か怪しげな研究やってたのは知ってた。カルト集団がいつの間にかできてた時も、俺は見えて見ぬふりしてた。……そのツケは自分で払う」

パールの言葉に首を振るナナカマド博士が諭す

「いかん、いかんだ。それはきみが死に行く理由にはならん」「死なねえよ」

「いいや死ぬ。きみは何の力も持っていない」

「……っ！」

押し問答をし、ナナカマド博士が立ち上がってパールを真っ直ぐににらんだ

「死にたくないなら、力を得るんだ。下手に動けば返り討ちに遭う、きみならまた連れ戻される。だから奴らがどんな手段を使おうと、真正面から潰せるぐらいの力を得るんだ。」

ずいっと一歩踏み込み、ナナカマド博士はパールのあごを覗き込むように言った

「どうせ復讐するなら、そいつの喉元を確実に食い破りたいとは思わんのか？」

その言葉にパールがひるみ、それから耳に聞こえないくらいの舌打ちをする

「おっそろしいこと言うもんだ。……」

パールがベッドの上で1回跳ね、そのまま足を畳んでどすつと音を立てて座った

膝に肘つき、あごを支えてナナカマド博士の顔を見る

「いーぜ。確かにそうだ。乗ってやつてもいい」

ナナカマド博士を見つめ上げるパールと見つめ合い、そして彼はポケットからモンスターボールを3つ取り出した

2つのなかは空で、もう1つのなかには小さい猿が入っていた

「奴らはポケモンと人間の研究をしていたと言っておったな。なら、この3体をきみにやろう」

「ポケモンにはポケモンか。猿はいいけど他のボール2つ空だろ、捕まえるってか」

「いや、そのドンカラスとムウマージのだ。一緒に連れて行っている。猿はヒコザルという炎ポケモンだ」

「へー」

パールはまだ自分のポケモンを持ったことがないのか、博士の傍にいるドンカラスとムウマージをじろじろと眺めている

そんな彼女にナナカマド博士はヒコザルのボールを先に手渡し、言う

「炎タイプのヒコザルを鍛えることで、きみ自身のなかの炎の扱い方もおぼえるのだ。どんな形であれ、それは意欲。きみの生かす原動力にもなるが、扱い損ねれば道の半ばできみを破滅させるだろう」

3体のポケモンがおぼえている技や生態を言って聞かせ、パールはナナカマド博士から残り2つのボールも受け取った

ドンカラスとムウマージが博士から離れて、新たな持ち主の傍に寄って来る

それを見て、少し彼女の表情が緩んだ気がした

「……この3体を十二分に扱いこなし、強く鍛え上げる、それまで堪えるのだ。そして、奴らが水面下より上に現れ、きみ自身が強くなった時——ミオの図書館に来なさい。わたしもそれまでに更なる力を手に入れておこう」

「わかったよ。けど、それまでは好きにやらせてもらうからな」

「ああ。……きみが選んだことなら、いい。ただ命は大切にしてくれ」

「……わかったよ」

そうしてパールはその日の内に、3体のポケモンを持って部屋のなかから姿を消した

——ナナカマド博士がポケモンを渡したのは、単に奴らに対抗させる力を得させるわけではない

アニマルセラピーといったように、ポケモンと心通わせることでパールの塗り潰された心を癒させたかったからだ

願わくば復讐という道を諦め、忘れて、普通の女の子として生きてほしい

更なる力を手に入れる算段をするのも嘘ではない、それはパール

抜きでナナカマド博士自らの手で戦いに赴く為だ

それが手に入ったら、奴らが水面下に出てこないままでも当たってみる気だった

これ以上、若い命を……これからの時代を生きて作っていく者達を危険な戦いに巻き込みたくなかった

そんなことで犠牲になるのは老兵だけで充分なのだ、と――

ナナカマド博士はその部屋に彼女がいた痕跡を隠し、すべて処分した

……

パールが姿を消して、しばらくしてから怪盗マージユが活躍し始めた

すぐに誰なのか正体もわかった、その意図も理解した

黙っていたのは、そうやって直接対決を避けつつ彼女の気が済むなら……やり場はあった方がいい

それがたとえ目を逸らす逃避であっても、向き合わなくてもいいものはいくらかもある

「……ウム」

怪盗マージユは宗主の娘、それも怪盗マージユの悪事に関わっているものは奴らも公にしたくないはずだ

手荒な真似はない、奴らも見逃す他ない

そう信じて、ナナカマド博士は今日も新聞を持ってトイレにこもって、読みながらうなるのだ

「はあ~~~~かあ~~~~せえ~~~~っ！ あ、あーもおおおれええええるうううっ」

扉を激しく叩く助手の悲痛な叫びは、今日も耳に遠い

……

3月13日

ハードマウンテンのふもと、227番道路

そこは火山灰の降る草むら、その環境に構わず寝転ぶ大の男1人と草ポケモンが1体

時折、思い出したようにその体勢のまま胸にぶら下げたカメラのシャッターを切ってありのままのハードマウンテンを撮影する

ポケギアが鳴ると、その男は面倒そうにそれを取った

仕事仲間でも彼の番号を知る者は少ない、逆にそれを知っている者からの電話には彼は出ざるを得ない

「もしもし。プラチナです。博士だろ。なに、用？ この前の過疎村の調査はもうちつと待ってくれ、あ、違う。そ。あー、やぶへび。わあーった、やりますって。で、ん……ふーん、ほうほう、そうか。んで、本題は。………冗談だろ、なあおい。どういう頼みかわかってんの？ 伝説のポケモンだろ、普通の人間なら一生に一度拝めたら幸せっていうレベルだぞ。わかってるよな、で、頼むんだな。……しかも3体全部かよ！ 勘弁してくれ、できるか、んなも……いや頼むとかじゃなくて、いや待ってマジでありえないだろ。……いや、必要なのはわかる。……うん、そーかよ、ついにわ

かつちまつたんだな。いや、できれば気のせいであってほしかったなって話。………しよーがねえ、やるよ。ああ、なんとかやってみるさ。……気にすんな、俺が好き勝手できるのも博士、あんたのおかげなんだから。そう……じゃ、まあしばらく電波の届かねーとこ行くから多分。ああ、そうだ。もう年なんだから無理すんな。若い連中に任せてさっさと隠居しちまえ、おう、じゃーな」

ぶつつとポケギアを切って、その男は伸びをした

それから寄りかかっていた大きなポケモンの背を裏券で軽く叩くと、座り込んで寝ていたそいつがのっそりと立ち上がる

「まーたナナカマドのじーさんからの厄介事だよ。行くぜ、相棒」
ちらつく灰を見ながらプラチナはその背に乗り、相棒はどすんどすんと足音を立てながらゆっくりと進んでいく

プラチナが相棒の背中をさすり、空を見上げた

「……ギンガ団事件の借りはまだまだ返せそうにねーなあ」

ナナカマド博士との出会い、相棒との出会い、カメラとの出会い
かつてギンガ団の下っ端として、人生つまらなく働いていた人間だ
それが大手を振って、こんな気ままな旅ができるのもすべてナナ
カマド博士のおかげだった

いつまでもその恩義に縛られているのも性分ではない、いつかは
ポケギアごと捨ててしまおうだろう

「んー……まずはカンナギで伝承を一から調べるか、いや待て先
に目撃情報を洗うか……」

ぶつぶつと面倒そうにそれでいて笑っているプラチナを乗せて歩
くのうてんきな相棒は、これからの困難や苦境を考えてなさそうな
くらい気の抜けた大欠伸をした

……

5月3日

クチバシテイ、午後8時

「ほんとに行くの？ 母さん心配だわ」

ふーとため息をつく女性に、男の子は鞆にぎゅぎゅっと衣服を詰
め込みながら旅の支度をしている

「大丈夫だよ、お母さん。可愛い子には旅させろ、って言うじや
ない」

「それ、あんたが言うことじゃなのよ。あー不安よお！」
おたまを持ってじたばたとその場で跳ねる母に、少年は困ったよ
うな顔をする

もう決めたことだし、ここまで色々と準備を重ねてきた
できれば納得してほしいのだが、母の心配も無理はない

「まあかーさん、大丈夫。ダイヤは強い子だ、もう平気だよ」

「だってシンオウよ？ あんな寒くて大変なところで1人暮らしな

んで、もうたまないわよお」

「1人じゃないよ。親戚の人がいるじゃない」

ダイヤという少年が母にそう言つと、彼女はおたまと首を横に振つた

「年に5回も長期出張して、実際家にいるのは1年で1ヶ月もない人の家なんて1人暮らしと同じよもう！」

「まあまあかーさん、向こうもダイヤが来てくれれば家の管理が楽になるって喜んでるし」

「でもダイヤは向こうでポケモン持つて旅に出るつもりなんですよ？ ああああ、もー結局1人じゃないのお！」

「ポケモンがいれば1人じゃないって、かーさん」

言っている内にどんどん不安になってきたらしい

母はぴよんぴよんと跳ねて、どれだけ気になることがあるのかを訴える

「ポケモン貰つて旅の後見人になる博士も、誰だっけ。ナナカマド博士？ そんな人より、もっと有名でおなじカントーに住んでるオーキド博士の方が絶対安心よ」

「ナナカマド博士も高名な人だつて、お父さん言つてたよ」

「そうそう。ウチの企業とそこの研究所とが商品開発で一緒になったことがあつて、そういう縁で今回の件は引き受けてくれたんだ」

「でもおー」

むずがる母を、しょうがないなと父が抱きしめて落ち着かせる

「そう心配するなよ。おれ達の息子じゃないか、きつと向こうでもやつていけるさ」

「~~~~うう、ダイヤ、ちゃんと連絡しなさいよね」

「うん」

すっかり大人しくなつた母が台所に戻つていくと、父はダイヤの傍らに座つてその頭を撫でた

大きな掌に、ダイヤがちよつとだけ首をすばめて微笑んだ

「いいかい、ちゃんと目上の人には丁寧な言葉を使うこと。お前

は強い子だけど、まだまだ子供なんだ。そこはちゃんと自覚しなさい」

「うん、はい」

父にそう言われ、ダイヤはしつかり返事をした

「よぉーし、頑張つてこいよー！」

ぐしゃぐしゃーつと父に頭をめちやくちやに撫で回され、更に脇をくすぐられダイヤはごろつと横になつて大笑いする

本当は不安なところがまだあつたけど、そんな親子のじゃれあい
でそんなのは吹き飛んでしまった

そして、心配性の母や大らかな父にも内緒にしている決意がある
ことをダイヤは伝えていない

父のじゃれあいから解放されたダイヤはごろんと横なつたまま、
荷物からはみ出たA4サイズの写真集を手にとつた

『シンオウの湖畔』、ダイヤのお気に入りの一冊だ

ダイヤはその顔を綻ばせながら、そのページをめくる

この美しい写真に憧れて、シンオウ行きを決めた

そして、このカメラマンのようにパートナーポケモン1体だけで
シンオウ中を自分の目で見て歩き回りたい

そこではどんな出会いが、どんな体験が自分を待っているのかと
思うばかりに、今夜もまたうまく寝つけそうにない

風景写真を見ながら、様々な困難や苦境でも相棒と切り抜けてい
く自分の姿をそこに投影する

そうしてダイヤは明後日まで迫る旅立ちの日が早く来ないかな、
とまだ見ぬ本物のシンオウ地方へ思いを馳せるのだった

- (前書き)

完結設定の為の空投稿です。見苦しくて申し訳ありません。
それから基となったスレが落ちましたので、そのやりとりを掲載し
ておきます。

-

ポケモンの二次創作に関する議論スレ6

778：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1
2（金） 19：32：11 ID：????

小説のネタが浮かんだからその設定に関して相談。

下に書いてあることに關して、こうしたら良い点、これはないと思う点、厨設定等あればご指摘お願いします

・ミュウがポケモンの技で人間に変身して人間として生活している。

・悪の組織が人間をポケモンにする薬を發明。薬を服用した人がポケモンの力で犯罪に走ったり、人間をやめて野生ポケモンになる行為が、密かな社会問題になっている。

・ジムリーダーがポケモンになる事態が発生しないように、ジムリーダーはゲスト程度でオリキャラ中心。

・主人公はあくまで普通のトレーナーの予定。主人公と扱いは同等で立ち位置の違うサブ主人公って扱い難しい？

・舞台をシンオウにしてシンオウ神話に絡ませようと思うんだけど……これって所謂原作破壊？

780：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1
2（金） 20：34：07 ID：????

<<778 読んで想像力が暴走したことをつらつら書いてみる。
あまりマジメに受け取らないでくだしあ

・薬でポケモンに変じてしまう現象

↓悪の組織の目的？（……ネタバレか）

人を困らせるだけ、たかだか犯罪事をやらかすためだけにここまで高度な薬を開発するとは思えない

↓毒でもウイルスでもなく「薬のせい」だと人々は知っている？
現象の原因を調べられるだけの時間が経っている？

↓「密かな」ということはまだ現象は公表はされていない？ 検証不足？ あるいはマスコミへの政治的圧力？

↓ポケモンになったらもう元には戻れない？

手立てがないのであれば（あっても方法によつては）、人々は恐慌状態に陥るかもしれない

↓薬であるなら、実用しはじめる前に何らかの臨床試験は済ませているはず

実験台にされた人間は組織の人間、それとも誘拐された人……？
また事件が増える？

（組織のアジトに潜入するなんて場面があつた場合、実験台にされた人間が捕らわれていれば残虐性が増す？）

（既に用済みで処分されている？ いや引き続き新薬投与の実験台に？）

・ジムリーダー

↓説明の意図が分からない

ジムリーダーは部屋の奥の奥に引っ込んでいて、三下のオリキヤラが相手になつてる？

↓「ポケモン化現象」が全国規模で起きているのなら、物語に出演する／しないには意味がない

人類みな平等にポケモン化現象の脅威にさらされているはず
（組織が特定の人物を狙っている？ 狙っているとして、どのよう

うにそれがばれた？）

・主人公

↓結局のところ、一人？ 二人？

↓”サブ”主人公として用意する意図？ 主人公格の人間（主役）

が複数居ることは小説でも珍しくない

↓一人称視点で複数の主人公を書くと、読者にとっては感情移入がしづらそう？

781：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

2（金） 20：59：28 ID：???

仮面ライダーWのドーパントと同じだな。

782：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

2（金） 21：11：10 ID：???

・ミュウがポケモンの技で人間に変身して人間として生活している。

必然性が無ければ、普通に厨設定なんだろうなあ

具体的にはミュウが人間として生活する理由と、

物語の中でその設定が必要とされるか否か

・悪の組織が人間をポケモンにする薬を発明。薬を服用した人がポケモンの力で犯罪に走ったり、人間をやめて野生ポケモンになる行為が、密かな社会問題になっている。

犯罪はともかく、野生のポケモンになるメリットは？

それとも、能動的ではなく薬を多用すると理性が無くなるのか？

・ジムリーダーがポケモンになる事態が発生しないように、ジムリーダーはゲスト程度でオリキャラ中心。

いっそ全員、ベトベターにしまえと思わないでもないが、

確実に反発があるだろうし、距離を置いておくのも一つ的手段

でも、結局はポケモンになっても、ならないでも扱い次第だと思う

・舞台をシンオウにしてシンオウ神話に絡ませようと思うんだけど……これって所謂原作破壊？

絡ませ方次第。逆に言えば絡ませるだけでは、原作破壊にはならないかと

783：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1
2（金） 21：36：12 ID：???
<<778

>ミュウがポケモンの技で人間に変身して人間として生活している。

やっちまえ

人外が人間に化けて溶け込んでいるってのはそれだけで萌える

784：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1
2（金） 21：40：14 ID：???
ラティアスもやってたしな。体温が人間より高いとかで見つかったが

たが

785：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1
2（金） 21：49：58 ID：???
<<782の指摘みたいに裏付けやら理由がちゃんと成り立っていないのなら

書かない方がよい。

それにその設定で出ている小説もある。バクフーン氏のやつですでに悪の組織が

人間をポケモンに変える薬を開発しているというのも読んだ。

ミュウが人間に変身しているというのも、かなりの裏付け設定が無い限りラティアス

が人間に変身できるというのと変わりはないし、それにミュウが人間に変身するのではなく

ミュウが人間の体に乗っ取っていたという設定の話も読んだことがある。

ジムリーダー達については、二次創作なら個人の勝手である。それ以上に

主人公達が空気化しなければ良い。

神話については表面的にただ神と戦うだけでは面白くない。結局はどの小説も

神話となったら神と戦って勝利するというのがセオリー。

サブ主人公の扱いについては、真似るのであればKaryu氏のような主人公を二人

以上用意してのそれぞれの視点からのストーリー展開。それを成功させるには

その主人公達のストーリーがどう噛みあうのか。どう噛み合わせていくのかの

発想は出来ていた方が良い。しかし欠点はある、どっちみちはどちらかの扱いが

空気化してしまう。

786：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

2（金） 22：08：04 ID：???

主人公がラティ兄妹と出会って、兄妹は主人公と相棒のポケモンや信頼してもいいと認めた人物にだけ姿を見せる

ラティアスは人間の少女に変身できる。でも光を屈折させて少女の姿に幻として見せているだけで所詮まやか

ラティオスはイメージや見た光景を幻として相手の頭に直接送り込む事ができる

兄妹はテレポートやテレパシーなどを自由に使う事ができる

こんな設定を考えた事があるが形にはしていない。まあ大体図鑑の説明から取ったんだけどな

やっぱりミュウの変身とか伝説、幻ポケの能力がストーリーに絡むと大体厨臭くなると思うから

<<778はあまり気にしなくてもいいと思う。つか読んでみたい厨でもいいじゃないか

787：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

2（金） 22：16：40 ID：???

<<778

ミュウ人間擬態の話は一度考えたが結局形に出来なかったから応援してるぜ。

頑張って形にしてくれ。

788：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

2（金） 22：21：41 ID：???

<<778氏に期待を高めてのトスに違い無い！！

807：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

4（日） 17：32：41 ID：???

突然だけど<<778のネタ使って小説書きたくなっただが、やっぱりまずいかな？

もしアレならネットとかで公表することもしないけど、とにかくあれで書きたいw！って気が逸ってさ

ネタ譲れって言うわけじゃない、そのネタ・小説の二次創作を書かせてほしいんだが……

正直おかしいのはわかってるがw

808：名無しさん、君に決めた！「sage」 10/02/1

4 (日) 18:07:14 ID:???

簡潔にまとめる自信があるのならぜひどうぞ

そしてちゃんと報告しましょうね。と<<778じゃないけど言ってみる。

809:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1

4 (日) 21:18:41 ID:???

まだ書き起こしてないからわからんが、短くまとめることで想定したプロットだと1話4000〜5000字未満で大体13〜15話くらいかな

その文量なら早けりや2週間くらいで書ききれ、今の連載もまだ終わってないしそんな長くは出来ん

書きあがったら報告するが、なろうとかには多分掲載しないぞ

万が一「二次創作」の許可が下りても、少なくとも本人がそのネタで書いた小説が完結かその目途が立つまでは自粛かね

<<778が見てるかもわからんし、いても本人による自己申告だしなあ。確かめようがない

書きたい意欲に反して申し訳ない気持ちでいっぱいだw

810:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1

5 (月) 20:40:27 ID:???

まあ、出来てから言えよ。うん

811:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1

5 (月) 22:00:00 ID:???

<<807がこのネタで書いたら小説、読んでみたい。勉強になりそうw

814:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1

5 (月) 22:52:39 ID:???

<<811
ご本人様として、ありがとうございます
じゃあ全話書きあがったら、改めて報告します
ネットに載せるかはまたその時にでも

815:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1
5 (月) 22:56:29 ID:???

いや、頭の中にあるものを不完全燃焼させるぐらいならとりあえず書いて

当人がオツケーって言えば晴れてスッキリではなかるうか?
どうせダメって言っても妄想はとまらんだろwww

840:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/1

8 (木) 00:50:16 ID:???

<<815
まあなww

でも本能でそれを書きたいと思っても、理性で納得しないと気分が乗らないのよ

そっというのが絶対駄目って言う人もいるし、諦める覚悟の上で聞いたんさ

おかげで筆が乗って、もう想定したプロットの半分までいったw
楽しくて仕方ないわw

864:名無しさん、君に決めた!「sage」 10/02/2
4 (水) 00:10:10 ID:???

<<778のネタで書いた小説書きあがったw

大体1話平均5000字で全16話構成
今0話とそれに基づいての推敲始めたよ
この1週間楽しかった、ありがとうな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0352k/>

PTD

2010年10月9日12時54分発行